
東方 嘘つきな男と小さな鬼の話

冷えピタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方 嘘つきな男と小さな鬼の話

【Zコード】

Z9294V

【作者名】

冷えピタ

【あらすじ】

第1章現代編完結

第2章幻想郷編スタート

男は嘘つきでした。

嘘をついてお金を稼ぎ、本音を隠して生きてきました。

鬼は正直者でした。

お酒が大好きというだらしのない一面もありましたが、嘘が嫌いでまっすぐな少女でした。

まったく真逆の二人が、幻想の壁を越えて出会います。

一人の出会いにはどんな意味があるのでしょうか。

プロローグ（前書き）

読んでいただいて恐縮です^_^；
駄文ですが、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

プロローグ

『いや～、国崎さんのおかげで楽に仕事が終わって助かりやしたよ！』

「あれへりこ、じつひとないや」

電話の向こうから聞こえる若い男の声に、淡々と返すスーツに身を包んだ青年。

国崎和真は高級マンションの最上階にある邸室で、高級感漂うソファーに座りながら、いつもの仕事仲間と電話越しに会話していた。

『一、十、百、千、万……うわ、六千万もありやすぜ……議員つて噂通り、たんまり金溜め込んでやがるんですね……』

「元々は国民が納めていた税金を不正に横領してやがった金だ。それを俺たちが返して貰つただけだらつ？」

『へへへ…違ありやせんね』

「それじゃあ約束通り、報酬は二〇〇円（半分ずつ）でいいと。暇な時にでも口座に振りこんでくれ」

『ほんとに二〇〇でいいんですかい？自分で言つちやあなんだが、あつしらは今回ほとんど見てるだけでしたからね。あつしらの報酬の減額も覚悟してたんですけど……』

「気にするな、お前らは十分役に立ってくれたぞ。それに次回からもよろしくってことだ」

『…了解しやした。 次もよろしくお願ひしやす』

そう言つて相手の男は通話を切つた。
それを確認して和真はソファーに深く背中を預けながら大きく息を吐く。

今回の仕事はかなり簡単だつた。

標的が議員だと聞いて、念には念を入れて大分前から準備を進めてきたのだが、

取り越し苦労だつたようだ。

仲間が作ってくれたパイプを利用して標的の議員に接触。

数ヶ月に渡り親睦を深め、賄賂やら贈り物やらをし続けて、相手が俺のことを信頼してきた辺りで良い儲け話があると持ちかけた。

長年培つてきた話力で相手を乗り気にさせ、自分の代わりに費用を出してくれと頼み込む。

最初こそ悩んでいたようだが、俺に任せて損はさせてこなかつたといつ信用という名の実績があつたため、六千万という大金を差し出してくれた。

もちろん、儲け話の内容など嘘っぱちだし、議員が知つてゐる俺の携帯番号も裏ルートで手に入れた、複雑かつ絶対に足がつかない優れものである。

賄賂やらなんやらで三百万ほど使つたが、戻つてくる金はその十倍である。

諸君もすでに分かつたと思うが、俺は詐欺師だ。

民間人を狙つた詐欺など小遣い稼ぎ程度にしかならないので、標的はもっぱら大手企業の重鎮や、国の役人たちである。

俺の家系はシジイの代から詐欺師で、まだ俺がガキの頃から人間の汚さや詐欺のノウハウを叩き込まれた。

おかげで詐欺師たちの間では俺はちょっとした有名人である。

今回のように同業者に頼まれて、協力して仕事をすることも少なくない。

人を騙すという糞ついたれな仕事だが、そのおかげで俺の通帳には一十億を超える金があるのだから笑えない。

それこそもう一度と真っ当な仕事など出来ないだろう。まあ仕事などしなくても遊んで暮らせるだけの金はすでにあるのだが、特にこれといった趣味がない俺が時間を潰すための手段が仕事しかないといふだけである。

もう一十代も半ばであるし、そろそろ新しい恋人でも見つけて、こんな仕事から足を洗つて身を固めるのも悪くないとは思っているのだが。

いかんせん長続きしないのである。

過去には数人の女性と付き合つたことがあるものの、半年続いた試しがない。

長くて数ヶ月程度、最速では付き合つて始めた次の日に一矢から別れ話を持ちかけた程である。

別に付き合つてきた女性がゲテモノ揃いだつたというわけではない。ほとんどの女性が美人で、気立てもよく、一緒に居て心地が良い女性ばかりだった。

それでも俺にはどこか、満たされないという気持ちが強かつた。

「まさか自分でも気がつかない、特殊な性癖の持ち主じゃないだろうな」

自虐氣味に呴いてため息をつく。

すぐに鼻で笑つて、ふざけた妄想を頭の中から追い出した。

「さて、そろそろ寝る準備でも ッ！？」

寝室に向かおうと廊下に顔を向けた時、照明の明かりの無い、夜の闇に包まれている廊下に何者かが佇んでいるような気配を感じた。

一体誰が？

扉には鍵が何重にも掛けっていてセキュリティーは万全だつたはず…。まさかベランダから？それこそあり得ない、大体ここは十八階だぞ！？

正体の分からない侵入者に対して焦りが募つていく。

背中をすーっと冷や汗が伝う。

静かに懐に忍ばせておいたピストルに手を伸ばしかけた、その時

「あれ…！？」、「ビ！」、たしか、靈夢のとこの宴会に居たはずなのに…」

幼さが残る鈴のような声が暗い廊下から響いてきた。

足音がだんだんとこすりに近づいてきて、窓から差し込む月明かりでその姿が露わになった。

侵入者に警戒しながらも、相手の容姿を確認した。

オレンジ色の髪に、袖のない奇抜な服装。

腰のあたりには瓢箪がぶら下がっていて、なんとも滑稽に見える。

身長は…低い。かなり低い。というか子供だ。

俺の身長は、平均的な男性の身長より若干低いものの、別に気にはるほどでもない。

奇妙な服装をした少女だが、中でも一番目を引くのが…

「……角？」

少女の頭から伸びる、一本の長い角だった。

嘘をついて生きる人間、

国崎和真。

酒を飲むのが大好きで、嘘が嫌いな妖怪、

伊吹萃香。

正反対の二人の唐突な出会いだった。

プロローグ（後書き）

とこうわけでプロローグでした。
いかがでしたでしょうか？

ちなみに続くかどうかはわかりませんw

思いつきで書いてみたもので…（汗）

もし作者のテンションが上がれば続きを書かせていただくかもそれ
ませんが（苦笑）

誤字・脱字がありましたらご報告をお願いします。

感想とかいただけると泣いて喜びます。

では縁がありましたらまたお会いしましょう。

第一話（前書き）

とりあえず書いたので更新ー。
駄文ですね、そして文章が短いかもしません。
一応三人称を基本にしていますが、まだまだバラつきがあるかもし
れません。

第一話

「……ガキ、どつから俺の家に入った。不法侵入で警察に突き出してやるつか？」

「ガキ！？ 失礼な人間だね！！ 私には伊吹萃香って名前がちゃんとあるんだから！」

身長差から見下ろして告げる和真に、歯をむき出して睨み付けるよう抗議する萃香。

「お前の名前なんぞどうだつていい。せつせと質問に答える、ガキ」

「ガキガキガキって……人間風情が鬼に喧嘩を売つてただで済むと思つてるのかい？」

和真是聞き慣れない単語を聞いて眉を顰めた。

「鬼？……ああ、そのコスプレのことか」

そう言って少女の頭から生える一本の捻れた角を眺める。

「こすぶれ？ よく分かんないけど、私だつてなんでこんな所に自分が居るのか理解できていないんだ」

困ったような表情で部屋を見渡す萃香の様子を見て、少なくとも嘘はついていないようだと判断する。

「じゃあなんだ。 神隠しにでもあつたつてのか？」

「神の仕業つてのよりは、スキマ妖怪の仕業つぽじけび、じじじへ
る前に」スキマを潜つた覚えはないし……」

なにやら考え始めた萃香を置いて、小さくため息をついた。

時計を見ると深夜一時を回っていた。

丑三つ時に鬼を名乗る少女と出合つとこりのよは、なかなかに風流なものである。

「…仕方ない。 今日はもう遅いから泊めてやる。 朝になつたら
とつとと帰れ」

ぶつきらめうに吐き捨てるように告げた和真の顔を見て、きょとんとした表情を見せた萃香だったが、次第にニコニコと笑いはじめる。わらしたことは許してあげるよ

「…………そりゃどうも」

今日一番になるであろう大きなため息をついて、今度こそ眠りつと

寝室に向かおうとした和真を萃香が呼び止める。

「ちよっと待ちなよ」

「……なんだ？」

「私はさつきまで宴会で飲んでたんだけじね、途中でこっちに来たからまだ飲み足りないのさ。付き合ってはくれないかい？」

言われてみれば萃香の頬はうすらと赤くなつており、口からは酒独特の匂いが漂つてくる。

「俺はもう寝たいのだが

「なんだい、案外甲斐性のない男だね」

その言葉に露骨にイラッとした表情を見せる。

やはりさつさと追い出したほうがよかつたかと後悔する和真を置いて、当の本人は勝手に食器棚を漁つてグラスを二つテーブルに置く。腰につけていた瓢箪から一つのグラスに酒を注ぎ、自分の分の酒を一気に飲み干した。

その様子眺めていた和真是、もうどうにでもなれと自分も椅子に腰掛け、少女が注いでくれた酒の入ったグラスを傾けた。途端、和真は酒の味に眉をしかめる。

「かなり強い酒だな……」

「やうかい？ 私にとっちゃそれが普通だけど」

そうしてこる間にも萃香は自分のグラスに酒を注ぎ、一杯三杯と飲み干していく。

「こんなキツい酒飲み続けてたらすぐ潰れちまつ」

そんな和真の様子を見て、情けない、とけらけら笑つ萃香を無視して席を立つ。

あんなに強い酒をよく水のように飲めるものだな、と呆れながら和真是棚からワインを取り出した。

かなりの年代物のワインで、これ一本で時価数十万円はする。今取り出したワインのほかにも、かなりの量のワインが並べられているが、皆同じように高額のものばかりだ。

無駄に貯金があるからこそ出来る贅沢である。

別に日本酒が嫌いというわけではないが、どちらかと言えばやはりワインのほうが好きである。

空いたグラスにワインを注ぎ、香りを楽しみながらゆっくりと味わう。

それをじっと見つめる萃香に気がついた和真は、そちらに向かってた。

「なあなあ、それも酒なのか？　ずいぶんと綺麗な色をしているけど」

確かにグラスに注がれた赤ワインは無色透明な日本酒に比べて綺麗な色をしているだろう。だがワインの存在くらい子供でも知つてそうなものだが、そこまで珍しいのだろうか。

興味深々と言つた様子でワインを見つめる萃香にせれやれと首を振る。

「言つとくが、せりんからな」

「な、なんだよーーケチーー。」

ふんふんと音が聞こえてきそうなべらご不機嫌になつながら、萃香は自分の酒をあおつた。

今まで黙つて見ていたが、小学校に通つているくらいの小さな少女が、自分でもかなり強いと思つような酒を水のように飲む姿はかなりショックキングな光景だ。

別に未成年が酒を飲むな、などと言つつもりはないが、あまりにも幼い外見が酒と不釣り合いで、柄にもなく心配してしまつ。

俺らしくないな、と和真は一瞬だけ自分の中で湧いた温い感情を押し殺して、黙々と酒を飲んでいた萃香に声をかけた。

「わつ言えば、お前宴会に居たつて言つてたが、どこの宴会場だ？」

「博靈神社だよ、あそこには面白いやつがいっぱい集まるからやー」

「ハクレイ神社……？ そんな名前の神社、この町にないぞ。けつひつ遠くから来たのか？ 家はどこにある？」

「幻想郷にある妖怪の山だよ」

そこまで言われてようやく和真は自分がからかわれていたことに気がついた。

「…………お前からまともな答えが返ってくると思っていた俺
が馬鹿だったか」

「ほえ？ なんか言った？」

「……なんでもない」

結局、一人は朝日が登るまで酒を飲み続けていた。

第一話（後書き）

いかがでしたでしょうか。

更新するかわからないと書いた割には早く投稿することができます

した。

ちなみに原作キャラはしばらく萃香しか出しません。といづか最後まで萃香しか出ないと思います。

あえて言おう、萃香だけ居ればいいと…！

誤字・脱字がありましたらご報告をお願いします。

ご感想も受付中です。

第一話（前書き）

今回は和真視点です。

なんかいろいろと不自然な箇所が多いかもしれない回です。

第一話

部屋を包む熱気で和真は目を覚ます。

夏の暑さによつて蒸し風呂と化した部屋で、一日酔いで痛む頭を持ち上げた。

朝まで酒を飲んでいた挙げ句酔いつぶれて、リビングで寝てしまつていたようだ。

辺りを見回すと、空になつたワインの瓶が散乱している。我ながらよく飲んだものだ、と和真は苦笑した。

いつも和真が座つているソファーには、タオルにくるまつて眠つている角を生やした少女の姿がある。

昨夜、和真の部屋に突如として現れたコスプレ幼女である。ガンガンと鳴り響く頭を無理やり酷使して、昨夜一人で飲んでいたときの記憶を思い出す。

酔いが進み、互いに自己紹介をした後、萃香の故郷の話になつた。萃香曰く、妖怪と人間が共存している場所の名前を幻想郷と言つらしい。

世界から拒絶された幻想達が集う最後の楽園。なるほど、幻想郷とはよく言つたものだ。

大方、頭があ花畠になつてしまつた少女の妄言の類には違いないのだが、なかなかに興味深い話だった。

妖怪と人、どちらかが絶滅してしまわないように互いのパワーバランスを管理する管理者の存在。

幻想郷で起ころる数々の異変を解決するといつ博靈の巫女。

他にも天狗やら、河童やら、萃香のような鬼やらと、様々な種類の妖怪や人間がいるらしい。

信憑性の欠片もない与太話ではあつたものの、丁度良い酒の肴になつた。

ファンタジーなどに興味を持つ歳でもないのだが、まるで見てきたかのように話す萃香の言葉に興味を惹かれたからだ。

思考を戻し、再び目の前に眠る萃香に視点を合わせる。

「おい、起きろガキ」

気持ち良さそうに眠る萃香の肩を揺らすものの、起きる気配はない。ため息をつきながら、萃香がくるまつてているタオルごと思い切りソファーから床に引きずりおろした。

ガンッ、という鈍い音が響く。

どうやら落ちた拍子に床に頭をぶつけたらしく、涙目になりながら起き上がる萃香。

「いつたあ……なにするんだよ…………」

「せっかく起^ひこじてやつたのに、おとなしく起きなかつたお前が悪い」

未だに頭をさすつている萃香を一瞥して、テレビの電源をつける。適當な番組にチャンネルを合わせた後、洗面台に向かう。冷たい水で顔を洗い、よつやくなつきりと目が覚めた。

……まだ頭は痛いが。

リビングに戻ると、萃香はコップに注いだ酒を飲みながら（まだ飲むのか……）昼のバラエティ番組を見ていた。なにが面白いのかは分からんが、しきりにテレビに映つている某グラサン司会者の発言に答えていた。

『みなさん夏休みをどう過ごしていらっしゃいますか？』

「私はねーーお酒飲んだりー、お酒飲んだり、えっと他には……お酒飲んだりしてるー！」

テレビ相手に無い胸を張つて自慢する萃香。

「なに馬鹿な」とやつてんだ、ちつとも毎飯にするだ

テレビに夢中だった萃香を眺めながらも、フライパンを動かしながらセツナとチャーハンを作り始める。

特別料理が得意というわけではないが、チャーハンにはちょっとしたこだわりがある。

さすがに中華料理店で出されるような本格的なチャーハンには適わないものの、不器用である俺の唯一の得意料理と言つても過言ではない。

炒め終わった一人前のチャーハンを皿に盛り付け、テーブルに置く。すいかは初めて食べるチャーハンに感激した様子で、食事中は終始ハイテンションだった。

「こんなにおいしい料理を作れるなんて、もしかして和真は料理人かなにかなの？」

「そのくらいなら誰でも作れるっての」

とは言うものの、自分でもこだわりがあるチャーハンを褒められたのは結構嬉しかったりする。
もちろん表情には出さないが。

今まで付き合ってきた彼女たちの料理の腕は俺より遙かに上だった。そんな彼女らに自分の下手な手料理を振る舞つたことなどあるわけもないし、仕事仲間の男たちと飯を食つときはもっぱら外食だ。

つまりとにかく、田の前で一心不乱でチャーハンを食べ続ける萃香こそが、唯一俺の飯を食つた人物ということになる。

「でも本当においしいよ。和真是いいお嫁さんになれるね～

「黙つて食え」

チャーハンを食べ終わり、お茶を飲みながらぼつとひと息つく萃香に冷たい声をかける。

「ああ、食い終わったならわっせと出でいこよ

「あへ……うん、そうだね…………あははは、つい居心地がよくって忘れてたよ。あ、あのさ……よかつたら、もつちゅうと泊めてくれないかな?」

寂しげな笑みを浮かべながらぽつぽつと頭を搔く萃香。

「親が心配してるだり。馬鹿な」と言つてないで早く帰れ

「それなんだけどね……帰り方が分かんないんだよ

ここまで来たくせに帰り方が分からないとはどうこう見なのか。また俺をからかっているのではないかと疑つてみるもの、明らかに困ったような表情をする萃香が嘘をついているようには思えない。嘘をつき続けて生きてきた俺だからこそ、相手が嘘を言つているかどうかが小さな違和感ではっきりと分かる。

それを微塵も感じさせないところを見ると、やはり嘘はつこていないのである。

「じゃあとつづえず警察に連れて行くから。あとはちで奥元確認とか色々やつてくれんだ。これ以上俺のところに座られても迷惑なだけだしな」

めんどくさそうに吐き捨てる俺の冷たい言葉にて、萃香は明らかに落ち込んでこるようだった。

「わっか……そうだよね、うん。『めんな、迷惑かけるよつない』と言つちやつて」

「ああ、迷惑だ。 すげー迷惑だ。だからちゃんと出る準備してくれ」

「…ツー！」

萃香は床に小さく涙を溜めながらも、いそいそと部屋を出る準備を始める。

そりやそりだらけ。萃香くらいの小さな子供が、面と向かって大人から迷惑だから出て行つてくれと言わたことなどないだろうから。だから、じつしたつてこうんだ。

ここがこれから先どうなるか、俺の知ったことじや

一瞬だけ、萃香の話の内容を思い出した。

世界から拒絶された幻想。

その幻想に類する“鬼”、伊吹萃香。

もし仮に、そもそも仮にだ。

本当に彼女が世界から拒絶される存在だったとしたら。

ここから出て行った後、彼女は 萃香はどうなるのだろうか。

「あ、あの……準備できたよ」

目を赤く腫らしているところを見ると、俺が見ていない隙に静かに泣いていたのである。う。

昨日飲んでいた酒の入った瓢箪を腰に添えて、萃香は俺の前に立つていた。

というより彼女にはこの瓢箪以外に、そして荷物などなかった。身の着一つで、彼女を拒絶した世界に放り出されるのだ。

「せ、せめてもう一日だけでも、ここに泊めてくれないかな……?
下手だけど料理もできるし、掃除もするよ！ 洗濯も、買い物も……だから、お願ひ、お願ひします……っ」

最後のチャンスとばかりに、再度俺に頼み込んでくる萃香。

また先ほどと同じように冷たい言葉で拒絕されると分かっていても、縋る相手が他に居ないのだ。

ようやく合点がいった。

彼女は本当に、世間一般で言うところの“鬼”なのだろう。
無限のように酒が出続ける摩訶不思議な瓢箪。
あれも萃香が鬼だという証拠の一つだし、何よりもあの角だ。
萃香が寝ている間に少しだけ触つてみたのだが、抜ける気配どころか生き物独特の温かさが手のひらに伝わってきたのだ。

もしも自分が鬼だということがバレてしまえば、帰り方が一向に分からぬ状態で敵だらけの世界に一人ぼっちになってしまふ。
殺されてしまうこと以前に、この世界でたった一人ということのほうが、彼女にとって何よりも恐ろしいのだろう。
だから必死に、ほんの小さな繋がりを持つ俺に縋つてくるのだ。

人間は信用できない。 いつ裏切るともしれない。

でも目の前の人間なら? 一晩とは言え、酒を酌み交わした仲の人間なら?

そんな想いがひしひしと伝わってきた。

傍から見れば馬鹿げているとしか言えないだろう。

出会つて一日も経っていない人間に縋るうといふのだから。

自分でもわかっているのだろう。

それでもなお、目の前の人間をひたむきに信じる萃香に向けて

「さつさと行くぞ、馬鹿ガキ」

いつもと変わらない、冷たい声が投げつけられた。

「…………うん」

萃香は絶望を表情にありありと浮かべて、消え入るような声で呟いた。

もう味方は居ない。

何人の人間を殺し、何度も傷つきながら、どれだけの時間を一人ぼっちで居なくてはならないのだろうか。

そんな想いが、萃香を襲つた

その瞬間

目の前の人間が大きなため息をつく音が彼女の耳に届いた。

「はあ～…………早くその瓢箪部屋に置いてこい。瓢箪持つたガキなんかと一人で歩いてたりなんかしたら、俺が周りから変な目で見られるだろうが」

「え？」

「さつさとお前の服買いに行くぞ。いつまでもその服一枚で居るつもりか？何度も乾燥機回さなきゃなんなくなるだろうが。それに、新しい布団やら歯ブラシやらも買わないとな」

よつやく萃香は俺が言つた言葉の意味を理解したよつだつた。

無意識に流れ出る涙をぼろぼろと零しながら、何度も必死に頷く。

「うんっー・うんっ、うんっ！」

「…………なに泣いてんだか」

その場にしゃがみ込んで、ポケットから取り出したハンカチで萃香の涙を拭つてやる。

涙を拭いてやつているつていうのに、当の本人はさらに大量の涙を流し始めた。

嗚咽を上げながら、何やら必死に礼を言おうとしている。

「ありが……と、ありが……」

「分かつた、分かつたから」

突然俺の胸目がけてタックルをかましてくる萃香。

「ぐおっーー？」

あまりの衝撃で心臓が止まりかけた。

こんな小さな体のどこにこんな力があつたのだろうか。

そのまま俺のスースを涙でびょびょに濡らす萃香を見て、小さく、でも今までとはどこか違うため息をつくのだった。

ジイさん、オヤジ、うるさい同居人が一人増えました。

第一話（後書き）

どうでしたか？

一応当初考えてたイベントは半分ほど消化できました。

次回からはまたほのぼのに戻ります。

第三話（前書き）

いつのまにやらRSSが2000件超えました。
こんな駄文を大勢の人見られていると思うと、キーボードを打つ
手が震えますがなんとか頑張って書き続けたいと思います。

家族連れで賑わう郊外のショッピングモールに、周りからじろじろと注目されている一組の男女の姿があった。

男の方は、スーツ姿で黒眼黒髪の平凡な顔立ち。どこにでも居るようないい風貌をしているが、極悪人のような目つきの悪さで、殺人を犯したと言われば納得してしまいそうになる。

もう一方の女……と呼ぶにはいささか難しい小さな少女のほうは、隣を歩く男と比べてもかなり奇抜な格好をしていた。
日本人離れしたオレンジ色の髪に、袖の千切れたような服。
そして何より、少女の頭についている一本の角のようなアクセサリーが否応無しに目立っていた。

二人の様子は恋人同士というには歳が離れすぎているように見受けられるし、兄妹にしては一人の顔立ちはあまり似ていなかつた。角のアクセサリーをつけた少女はきょろきょろと辺りを見渡して、初めて見るであろう風景に興味深々といった感じだ。

男はどうと、自分たちを見つめる野次馬たちを鋭い目つきで睨み返している。

傍から見ていて恐ろしい目つきだといつのに、その目で真正面から睨みつけられた野次馬たちは慌てて目を逸らして我先にとそこから遠ざかっていく。

野次馬が散つていったのを確認すると、スーツ姿の男、国崎和真は、せわしなく視線を動かし続ける少女、伊吹萃香に声をかけた。

「瓢箪より先に、お前のその角をどうにかしなくちゃならんかつたな。注目されるとは分かつてたが、やつぱり我慢ならん」

「む、鬼の誇りである角を邪魔にするとはいひ度胸だね」

「埃か。邪魔にしかならないところでは確かにその通りだな」

「字が違つじやないのさー」

一人の当初の目的だつた洋服売り場に到着する。

今日は特に自分の服を買つつもりもないのに、和真は紳士服のコーナーを一瞥もせずにさつと一人して婦人服のコーナーに向かう。

萃香はこれほどたくさんの服が売られている光景を見るのが初めてだつたらしく、その迫力に圧倒されているようだ。

「『』、『』置いてあるのが全部服なのかい……？」

「ああ、そうだが？ 別にこんな安物しか置いてない店で遠慮はいらんから、好きなの探してこよ」

「とは言つても、外の世界でどんな服装が普通なのか分かんないよ」

「む……それもやつだな」

近くで服を並べている従業員らしき女性に声をかける。

「ここに合ひの服を適当に見繕つてやってくれ」

「かし」しました

営業スマイルを浮かべながら、戸惑ひの萃香を連れて、女性はさわりと服を選んで萃香に手渡していく。

そのまま試着室にズルズルと連れて行かれる萃香は、売られていく子牛のような目で和真を見つめていた。

そんな萃香の眼差しとは裏腹に、和真是さつさと休憩用のベンチに腰掛けた大きなあぐびをしていたのだった。

数分後、ベンチでうつらうつらと船を漕いでいた和真だったが、目の前の人気が立つ気配がして顔を上げる。

そこには涼しげな純白のワンピースに身を包んでいる萃香が、少し恥ずかしそうな表情で立っていた。

見た目が幼いこともあり、少々子供っぽいであれどその服装も妙に萃香に似合っていた。

先ほどの奇抜な服装とは一変して、清楚というイメージが浮かぶ。

「えつと……びつ、かな？ 似合ひてる？」

「あー、似合ひてるんじゃないかな？ 色も涼しげでいいな」

もじもじと手を絡めて上田遣いで和真を見つめる萃香に、少しだけ視線を逸らしながら投げやりな様子で声をかける。

言い方には多少棘があるものの、彼にしては珍しく、素直に相手を褒めている。

それを聞いた萃香は、ぱあっと笑顔を浮かべて、萃香の後ろで二二口と微笑んでいる従業員の女性に顔を向ける。

「千恵が選んでくれた服、似合つてるって褒められたよー。ありがとうね！」

「どういたしまして」

微笑みながら、萃香の頭を優しく撫でる知恵と呼ばれた女性に和真も小さく頭を下げる。

余程嬉しかったのか、鼻歌まで歌い始める萃香に小さく苦笑して、和真はレジへと向かった。

支払いの際、ゴールドカードを提示した和真にレジの従業員が田を見開いて驚いていたのはまた別の話である。

その後、萃香用の花柄の布団を購入した一人は、オレンジ色に染まる空の下、人気もまばらな帰り道をゆっくりと歩いていた。今日一日いろいろあって流石に疲れたのか、萃香は和真の背中で気持ちよさそうに寝息を立てている。

おかげで両手が塞がつてしまい、購入した服や布団は家まで郵送してもらうことにした。

「つづく迷惑かけてくるガキだな……どつかその辺に捨てて帰ろうか」

そうは言つてみるものの、昼過ぎに見た萃香の涙を流す姿を思い出した和真は、うつ、と息を詰ませる。

「…………まあ、また泣かれても面倒だしな」

根では人一倍お人好しである彼がそんなことを出来るはずもなく、流石に痺れてきた腕をなるべく意識しないようにしながら、渋々と足を進めるのだった。

第三話（後書き）

鬼と一緒にお買いものでした。

主人公の嘘つき属性が出てないじゃん…って思つてる読者の方ゴメンナサイ。

後々ちゃんと出てきますのでご勘弁を……＾＾；
誤字・脱字等ありましたらいつ報告ください。

みなさまからの「」感想お待ちしております！

第四話（前書き）

二二一ク一千〇〇〇突破！！

嬉しそうな、みんなで元気いっぱいの声が聞こえてきます。

第四話

和真の住んでこむマンションのロビーへ着くと、背中で寝息を立てている萃香に声をかける。

「ほら、着いたぞ。さつぞ起きて自分の足で歩け」

「ふあ…………うそ、分かった」

まだしつかりと頭が働いていいのか、ふらふらとした危なっかしい足取りで歩き始める萃香。

エレベーターに乗り込んで和真の部屋がある階のボタンを押す。エレベーターが動き始めると、萃香は和真の足に寄りかかるよつとして、また船を漕ぎ始める。

そんな萃香の額田がけて強めのトロッパンをする。

「痛つ！？ なにするのやー！」

「ほんとこでまた寝るやつがあるか」

「ううう……」

額を押されて涙田で睨む萃香を尻田に、田標の階へと到達したエレ

ベーターから降りる和真。

その後ろを慌てて追いかける萃香だが、ふと視線を感じて後ろの通路を振り返るが、そこには誰も居なかつた。

「…………？」

「なにしてんだ？ わざと入らないと鍵閉めるぞ」

部屋の扉から顔を出して「ちりこ」声をかける和真。

萃香は先ほどの視線を不思議に思いながらも、小走りで和真の部屋へと滑り込んだのだつた。

「おいガキ、飯の前に風呂入つとけよ

「ふう…………？ ああ、湯あみのことね。 妖怪はそんなもん入らな
いよ」

「妖怪とか人とか関係あるか。お前ちょっと汗臭いぞ」

「う、嘘！？」

慌てて自分の体の匂いを嗅ぐが、確かに少し汗臭い。

妖怪は通常、自分の身に纏う妖力で汚れや匂いなどから身を守つて
いるために湯あみなど自分の体をケアする行為は必要としない。

だが外の世界に来て、自分の体から妖力の類が見られないことに萃
香は気づいたのだった。

「いいからさっさと入れ。シャンプーとかの使い方は分かるか？」

「い、いや……わかんない

「…………仕方ないな」

ため息をついて萃香へと近づいていく和真。

そしてひょいと萃香を脇に抱ぐと、ずんずんと風呂へ向かっていく。

「ちよ、ちよっとなにするのさー？」

「ひるねせい、いちいち説明すんのも面倒だからな。一緒に入れば万事解決だ」

「一緒に！？ 嫁入り前の娘と裸で風呂に入るなんてどうこう感性してるんだい！」

「ああ……？ ガキの裸なんかいちいち気にしないから安心しろ」

「あ、あたしが気にするんだよー」

『わやー』と騒ぐ萃香を無視して脱衣所のドアを閉める。そして何の躊躇いもなく自分の服を脱いで素っ裸になると、萃香の服を脱がしにかかる。

「か、和真！ 前隠して、前！ つて、無表情であたしの服を脱がそうとするんじゃないよー。ちょ、ちょっとーー。『わやー』変態！」

「ひるねせい」

わざと萃香の服を剥ぎ取ると、和真は一足先にシャワーを浴びる。

和真が「ンシ」「ンシ」と体や髪を洗つてる間も、萃香は風呂場に来ようとはせず、真っ赤な顔で脱衣所から顔だけを出してこちらを伺っている。

体についた泡を流すと、湯船に一気に肩まで浸かって深く息を吐く。

「へへああ～…………極楽だ」

しばらく天井を見つめていたが、ふと視線を未だに脱衣所に居る萃香へと向ける。

「なにしてんだ、もうひと入らないと風邪引くぞ」

妖怪が風邪など引く」とはないのだが、妖力の無い今の萃香では分からぬ。

観念したようにおずおずと風呂場に入り、恐る恐る湯船に足をつけ る。

「…………」

「風呂に浸かるだけでどんなだけ真剣な表情してんだよ」

小さく苦笑して、まだ膝すら湯に入り切れていない萃香を持ち上げて一気に風呂へと浸からせる。

「ひやつー？」

驚いたような声を上げる萃香。

初めて入る風呂の感触に混乱していたようだったが、次第に落ち着いていき、今では和真の膝の上にひょこんと座っている。

「ふう……初めて入つたけど、なかなかいいもんだね。人間はいつもこじんないいモノに入つてるのかい？ 妖怪の山にも作ろうつかな」

「全員が全員どうかは知らないが、まあ普通はそうだらうな。妖怪の山つてところには風呂がないのか……汗臭そり」

学生の頃に嗅いだ剣道場の更衣室の汗臭い匂いを思い出しつづけりとする。

「そういえばさ、和真」

「なんだ？」

和真の胸に頭を乗せて湯船に浸かっていた萃香が、ひょこつとちらへ顔を向ける。

「和真はどんな仕事してるんだ？ 幻想郷の人間は畠仕事とか、商

人だつたりとかが普通だつたけど、外の世界の仕事も似たよつなんのかい？」

「商人はともかく、畑仕事が普通つてことはないな。たぶん畑仕事をしてゐる人間はこいつでは一割にも満たないとと思つ」

「じゃあどうやつて作物を育ててるのさ？ 見たところ、幻想郷とは人間の数が大違ひだ。こんなにたくさんの人間の食い分をどうやって賄つてるのさ？」

「ほとんど海外からの輸入に頼つてゐるな。ほかの国との貿易が無くなつたらこの国は間違ひなく亡ぶ」

「情けない話だねえ」

「まあ、な……その分、技術力ではかなりのレベルを誇つてゐると思うぞ」

「河童が聞いたら喜んで飛び跳ねそうだね」

「河童……？ 河童と言つたら川で相撲してゐるかキュウリ食つてゐるイメージしかないのだが。」

そんなことを考えつゝも和真は先ほどの萃香の質問に答えることとした。

「俺の仕事の話だつたな。まあ、あれだ。悪いやつをこじらしめてお金を稼いでるんだ」

「へえ～、靈夢みたいな仕事かな。まあ靈夢は万年貪吃だけど」

「靈夢……博靈の巫女だったっけか。流石に俺は妖怪退治なんかできないけどな。もっぱら相手は人間だよ、どいつもこいつも糞みたいな外道ばっかりさ。……まあ、その外道のやつらから奪つた汚い金で生きてる俺も糞みたいな人間だが」

最後の部分は呟くように言つたため、萃香は聞き取れなかつたようで首を傾げている。

「人に嘘ついて金を得てゐる糞みたいな職業もあるつてことだよ」

「ふ～ん…………あたしは嘘つきは大つ嫌いだね。殺してやりたくなるくらい嫌いだよ。そんなやつらをこらしめるのが和真の仕事なんだろ？ 私は尊敬するよ」

花の咲くような笑みを浮かべて和真を見つめる萃香。心から和真を信頼しているであろう、純粋な少女。

そんな萃香の笑顔を見て、和真の胸がチクリと痛んだ。

いつかこの少女に、自分の本音を言える日が来るのだろうか。

「…………ああ、やつだな。ほり、お前の髪洗つてやるから
そこへ座れ」

ゴシゴシと後ろから洗われる髪に、気持ちよさそうな声をあげていた萃香だったが、和真が頭に垂らしたシャンプーが目に入った途端に絶叫を上げるのだった。

第四話（後書き）

誤字・脱字あつまつた「」報告をお願いします。
みなさんからの「」感想お待ちしております。

第五話（前書き）

異常に短い上に会話文がないのですが、 次話へのつなぎ + だと思つてお許しください^ ^ ; ;

和真視点

風呂から上がり、鏡の前で萃香の髪にドライヤーをかけて乾かしてやる。

萃香はドライヤーから吹き出される熱風に驚いていたが、おとなしくされるがままになつていて。

女性の長い髪を乾かした経験など持ち合わせていなかつたため、壊れ物を扱うように慎重な手つきで乾かしていく。

その後、リビングに戻ると夕飯のおかずを買い忘れていたことに気が付き、でもどっちにしろ萃香のせいで両手が使えなかつたあの状況では一緒だつた、と自己完結する。

とりあえず有り合わせの材料で何か作ろうと冷蔵庫を開けるものの、ネギや卵、ハムなどが少しあるだけだった。

今からゴンゴンビーハー買ひ出しへ出かけてもいのだが、腹を空かせている萃香を待たせてしまつのも気が引ける。

仕方なしに、今朝作つたチャーハンと同じものを作り始める。

一日に一回もチャーハンを食べるには流石にどうだらうかと思いつつ、かといって他に手つ取り早く萃香の腹を満たせる方法が思いつかなかつたので、文句の一つでも甘んじて受けようと覚悟していたのだが、イスに座つて待つている萃香の反応は予想を裏切るものだつた。

運ばれてくるチャーハンを見るや否や、その真ん丸な瞳をキラキラと輝かせる萃香。

更には並べていたスプーンを手に取り、鼻歌を歌いながら、空いたグラスをスプーンで叩いて音色を奏でている。

不器用な男が作ったチャーハンをそこまで気に入ってくれたのか、と思わず顔に出そうになる笑みをなんとか押さえつける。

萃香の前にチャーハンを盛つた皿を置くと、しきりにスプーンでチャーハンを口に運んで、おいしい、おいしい、と笑顔を見せる。

今度チャーハンの上に刺す旗でも買つてやるか、と思つて、自分もチャーハンを食べ始めた。

うん、うまい。

食器を洗い終わつて、リビングでくつひこでいた萃香に向ける。

腹がいっぱいになつて眠くなつたのか、昨日は絶えず飲み続けていた酒の入つた瓢箪にも手を付けずに、とろんとした田でぼんやりとテレビを見ている。

そんな萃香の肩をとんとん、と軽く叩いて立ち上がらせ、洗面所で萃香に歯ブラシの使い方を説明する。

刺激の強ミント味の歯磨き粉の味に、露骨に嫌な顔をしながらも、俺に並んで歯ブラシを動かし続ける。

俺はコップは使わずに、手で水をくみ、口に含んでペジ、と吐き出しつづけた。手渡し、すぐさまこなへる。

しかしベッドに潜り込んだ萃香は、一向に俺の手をはなさうとした。あいにく、萃香の布団はまだ畳じてこないため、萃香を俺のベッドに寝かせて自分はリビングのソファーで眠らうとする。

田舎者、じつは、萃香の手を引きながら、寝転て向かう。

しかしベッドに潜り込んだ萃香は、一向に俺の手をはなさうとした。あいにく、萃香の布団はまだ畳じてこないため、萃香を俺のベッドに寝かせて自分でリビングのソファーで眠らうとする。

どこかに置いていかれてしまつところ不安が、まだ心のどこかに残つてゐるのだろうか。

い。

今朝のことがトラウマになつてなればいいが……と内心冷や汗をかきながらも、なんとか萃香の手をはなさうとするもののつまづかない。

小さくため息をついて、自分もベッドに潜り込んで萃香と向かい合うようにして寝こりぶ。

萃香は俺のシャツの胸元をぎゅっと握りしめ、すやすやと眠りにつ落ちて行った。

俺自身も今日一日色々あつて体が疲れていたのか、すぐに瞼が重くなつてくる。

だるい腕を上げて、眠っている萃香の頭を軽く撫でてやる。すると気持ちよさそうに身をよじらせながら、俺の胸元に顔を摺り寄せてきた。

(嫁さん貰つ前に、子供が出来たみたいだな……)

胸の中で眠る萃香の様子を微笑ましく想いながら、俺は眠気に身を任せた。

第五話（後書き）

誤字・脱字の「」報告お願いいたします。
みなさまからの「」感想お待ちしております。

第六話（前書き）

急展開ですね。
すいません、お楽しみください。

第六話

味噌汁の良い匂いがリビングに漂つ。

和真は黙々と朝食の準備を進めていた。

キッキンに立つ和真の服がくいくこと引つ張られる。

「和真、和真」

「あん？」

見ると、萃香がキラキラと何か期待したような瞳で和真を見つめていた。

恐らく今日の朝食はまだなのか訊ねに来たのだ。いつそう考えた和真は味噌汁をかき混ぜる手を止めずじ、横に居る萃香に話しかける。

「腹減ったのか？ もうちょっとで出来るからおとなしく待つてろ」「違う違うー たしかにお腹は減ったけど、そのことじゅないんだ

「あ

「……なんだよ？」

すると萃香は人差し指をビシッとリビングにあるテレビに向ける。

そこにはつい先日開園したばかりの遊園地のCMが流れていた。

迫力満点のジェットコースター や、恋人と思しき一人が乗っている「コーヒーカップ」。

そして子供たちが気持ちよさそうに泳ぐテーマパークならではの趣向を凝らした屋外プール。

（今年の夏は海にも行つてないな……）

そんなことを思いながらも、しきりに服を引っ張りつづける萃香へと視線を戻す。

「で、なんなんだよ。別にテレビが壊れたわけじゃないみたいだけど」

「ゆーえんちー！」

突然、大声で叫ぶ萃香に驚いて半歩後ずかる和真。

「…………遊園地が、なんだ？」

「ゆーえんちに行きたいの！ 連れて行つておくれよー！」

和真がうんざりとした表情で萃香を見る。

「遊園地って……ガキかよ。いや、お前の見た目からすると確かにその通りなんだが…」

「な、なんとも言えぱい。とにかくあたしはあそこに行きたいいんだ！ なあ、頼むよ、和真あ～」

朝一番に面倒な話題を振ってきたな、と舌打ちしそうになる自分を抑えて、和真は小さくため息をついた。

「……行きたいなら一人で行けよ。こんな暑い日に外に出たくない

まだ八月も半ばである。

外ではアブラザミやリハインゼミが猛暑の中、自分の命を削つて糞やかましい音楽を奏でている。

ただでさえ暑いといふのに、あの声を聞くだけで体感温度が2、3度は上がるような気がする、とは和真の言である。

「あたしが一人で行けるわけないだろ？ ゆーんちつてここまで
の道も知らないし、大体一人で行つても面白くないんじやないかい
？」

「……確かに一人で遊園地に行くやつはめったに居ないだろうな」

思い浮かべてみて欲しい。

周囲がカップルや家族連れ、もしくは仲の良い友人たちと一緒に居るというのに、たった一人で黙々とアトラクションに乗り続ける哀れな姿を。

何の罰ゲームだと思いたくなるくらい悲しい光景であることに違いない。

「……さっき届いた荷物の中に昨日買ったお前の服が入ってたろ。飯食つたらそれに着替えてこい」

和真の言葉に、ぱあっと表情を明るくさせる萃香。

「機嫌な様子で田玉焼きの乗った皿を運ぶ萃香とは裏腹に、和真是自分がいつからこんなに甘くなつたのか、と頭を抱えていた。

多くの客の笑い声が響く屋下がりの遊園地のベンチで、スーツ姿の和真は病人のように顔を青ざめさせていた。

「ううふ…………。あの糞ガキ……コーヒー カップを本気で回すやつがあるか…………」

その原因は先ほど萃香と一緒に乗った「コーヒー カップ」にあった。

初めて乗るアトラクションに興奮していた萃香は、中央の皿を回すと乗っているカップも回ると和真に教えられ、これでもかと言つほどに回し始めたのだ。

あっという間にのどかなはずのコーヒー カップが絶叫マシーンに早変わりである。

嬉々とした表情で皿を回し続ける萃香をなんとか止めようとした和真だが、突如襲い来る猛烈な吐き気にダウンしてしまったのだった。ていた。

今は萃香に近くの売店にソフトクリームでも買いに行かせ、和真は休憩用のベンチで激しい吐き気と格闘していたのだった。

「ただいま！ あれ、和真つてばまだ濡れてるの？」

スキップしながら戻ってきた萃香は、先日和真とショッピングモールに出かけて購入した白いワンピースを着ており、手には2人分のソフトクリームを握っていた。

「誰のせいだと思ってるんだ、誰の」

顔を歪めながら萃香から和真は自分のソフトクリームを受け取る。萃香も和真の横に腰掛け、目を細めながらソフトクリームを美味しそうに食べている。

「ゆーえんちつて楽しいね、和真！」

「…………ああ、そうだな」

目の前を行き交う人々の姿をぼんやりと眺めながら、小さく呟く。

(そういえば、遊園地なんていつ以来だろうか。 小学校に入つてすぐに母親が死んで、それから一度も来てなかつた気がする)

昔のことを思い出して妙に寂しげな気分になるが、ふと萃香が自分の顔を見つめていることに気が付いた和真は、萃香へと顔を向ける。

「どうした？俺の顔に何かついてるか？」

その言葉に萃香は小さく首を横に振り、そして何やら照れたような笑みを浮かべる。

「いや、和真といつやつと一緒に居られると思つとす」「嬉しいって思うんだ。自分でもなぜだか分かんないけど、うん、す」「嬉しい」

「……………そりかよ」

まっすぐな気持ちをぶつけてくる萃香に、和真は顔を背けてしまつ。

今までこんなに素直に自分の感情をぶつけてくる相手など知らなかつたからだ。

人間というのは、いつも腹の中に何かしら邪念を抱えている。

口でいくら取り繕おうと、その気配がひしひしと伝わってくるのだ。

昔付き合つた女性の中にもその気配を感じさせる人が居た。

和真が持つている莫大な金が目当てなのか、それとも裏に対する口ネが目的だったのかもしれない。

しかし和真の目の前に居る少女からは、まったくその気配が感じられない。

常に自分の本心を目の前の相手に正直に伝える萃香が、和真には眩しく光る太陽のように思えた。

「それで、ずっと和真と一緒に暮らせたらな、って思うようになつたんだ。も、もちろん迷惑だつてことは知つてるよー。でも、少しでも長い間、和真と一緒に居たいんだ」

顔を真っ赤にして自分の気持ちを告白する萃香。

そんな萃香を愛おしく想つ自分の気持ちに、和真是気づいた。気づいてしまつた。

今まで自分の本心を晒したことのない彼が、目の前の少女にだけなら、心を開けるのではないか、と。

「あ、あ……その、な。別にお前がずっと居たいって言うなら、俺は構わないぞ。ガキの一人や一人を養う金くらい、余裕である

んだからな

その言葉を聞いた萃香が、その表情を驚愕の色に染める。

「ほ、本当に……？　でも、迷惑なんじゃ……」

「たしかに迷惑だが、我慢してやらない」ともない。あまり俺に苦労をかけない、つていう条件付きでだが

萃香は今日一番の笑顔を浮かべ、和真の胸に飛びついた。

そして手に持っていたソフトクリームで和真のスーツを汚し、言った傍から怒られるという愚拳を犯してしまったのはまた別の話。

空が茜色に染まり始め、和真は腕時計を確認する。

午後5時。そろそろ帰らなければまた夕飯の材料を買い忘れてしまうだろ？

まあ別に外食しても構わないのだが。

「おーい、そろそろ帰るぞ」

田の前を歩いていた萃香の後ろ姿に声をかける。

「えー、もう？ もうちょっと遊んで行こうよー」

「お前今田一田でどれだけアトラクションに乗ったと思ってるんだ。俺はもう無理だ、内臓が悲鳴を上げてる」

「ふー、分かったよ……」

少し待つて、と和真に叫びて公衆トイレへと向かう萃香。

やれやれと思いつつ首を鳴らすと、後ろから何者かに声をかけられた。

「はじめまして、国崎和真さん」

振り向くと、金髪の若い女性が居た。

和真が今まで生きてきて一度も見たことのないような美人である。着物のようなものを羽織り、かなり目立つ格好をしているのにも関わらず、周りの人間は女性のほうを見向きもしない。

「国崎和真さん……で、合ひてますよね？」

「一体そんな女性が自分なんかに何のよつなのか、と疑問に思いつつ返事を返す。

「そうですが……どこかでお会いしたことありましたつけ？」

「いえ、私があなたのことを一方的に知っているだけですよ、国崎和真さん」

裏の関係者かと思ったが、女性で自分の素性を知っているような人物は組織には居ないはずだと和真は混乱する。

「はあ。それで、あなたのお名前は？」

「申し遅れました。八雲藍と申します」

（八雲……八雲……やっぱり知らない名前だな）

「その八雲さんが、俺に何の用事ですか？」

八雲藍と名乗った目の前の女性は、萃香が向かっただ公衆トイレのほうに目を向ける。

「あの子は、あなたにとつてどういう存在ですか？」

「あの子、とは？」

和真は十中八九、萃香のことだろうとは分かつていても一応確認する。

「伊吹萃香　　かつて人が恐怖した、鬼。　忘れ去られた幻想の住人のことです」

和真の体中の鳥肌が立つ。

真剣な目つきで和真を見つめる藍からは、目には見えぬプレッシャーのようなものを感じる。

そして、萃香の素性を知っている見知らぬ女に、和真は一気に警戒心を強めた。

「答えてください、国崎和真さん。　伊吹萃香はあなたにとって、どういう存在なのかを」

和真の頬を一筋の汗が伝う。

対人戦において少なからず自信のある和真を、自然な振る舞いにも関わらず気配だけで圧倒する藍。

和真は、乾いた唇を小さく開き、震える声で、それでも確かに言い放つ。

「あいつは　俺の家族だ」

和真の言葉を聞き、今まで微塵も表情を動かさなかつた藍が初めて驚愕という表情を浮かべた。

「家族、ですか？あの鬼が、あなたの家族だと言つのですか」

信じられないといつよつな声で呟く藍。

「鬼とか人とか、そんなこと関係ないんだよ。あいつはあいつだ。

伊吹萃香だ。…………違つか？」

震える体にムチを打ちながらも、必死に藍をにらみつける和真。

もしあ前が萃香の敵ならば、俺は容赦はしない
の籠つた和真の眼差しを見て、藍は小さく笑つた。
そんな想い

「私はあなたたちの敵になるよつことはしません。ですが明日、
私の主が伊吹萃香を迎えて来ます。そうすれば、もう一度とあなた
たと伊吹萃香は会つことは無いでしょう」

それでは、と小さく会釈して藍と名乗った女はスキマのような物の
中に消えて行つた。

一人残された和真は、無言で茜色に染まり切つた空を睨み続けていたのだった。

第六話（後書き）

次話からラジレシリアルアス。
でもやっぱり作者はほのぼのが好きです。

八雲藍に遊園地で告げられた内容、それは藍の主が萃香を迎えて来るというものだった。

その翌日、和真は萃香の手を引いて和真が住んでいるマンションからさほど遠くない公園に来ていた。

日は昇りきっているが、不思議なことに一人以外に人影は見えない。

何の事情の説明もされずにこの場に連れてこられた萃香は、昨日遊園地で自分がトイレから戻った時から終始無言で眉を顰めている和真に困惑していた。

自分が何か和真を怒らせるようなことをしてしまっただろうか、そう考えてみるものの、遊園地で一緒に居た時の和真は面倒くさそうな表情こそ浮かべていたものの、時々そつと笑みを零すなどの普段の彼と比べても機嫌が良さそうに感じられた。

それなのに何故　？　萃香が考えを巡らせ始めたその時、公園の中央にある時計台の下で目を瞑つたまま立っていた和真が、ふと顔を上げて公園の入り口を睨みつけた。

その視線を追うように萃香もまた入り口へと目を向け、その瞳を驚きで見開く。

何もない空間からチャックのついた窓のようなものが現れ、そこから日傘を持った女性が現れる。

昨日会った八雲藍と同じ金髪の女性だが、藍を美女というならば、こちらは大人と少女の丁度中間のような顔立ちをした美少女だろう。

だがその外見からは似つかわしくない膨大な威圧感がひしひしと伝わってくる。

日傘を差した少女は、こちらを見つめて三田田のような歪な笑みを浮かべた。

「『きげんよう、国崎和真。……いえ、こつお呼びしたほうがよろしいかしら？ 先祖代々から受け継がれる、悲劇の少年の呪いを背負った不幸な半妖 人狼、国崎和真』

目の前の少女 幻想郷最強の妖怪、八雲紫から告げられた眞実に、萃香は呆然と和真を見上げる。

和真是辛そうな表情で唇を噛みしめ、自分を見つめる萃香のほうを見ようともせずに、ただ楽しげに微笑む紫に顔を向けていた。

あるところに小さな村がありました。

とても小さな村でしたが、村人たちの仲は良く、平穏な日々が流れていました。

その村に暮らす少年は、小さい頃に両親を病で失いました。

両親を失ったことで塞ぎ込んでいた彼に、村たちは必死に話しかけました。

はじめは返事すら出来なかつた少年に、村たちは根気よく面倒を見ました。

村人たちの努力のおかげか、次第にその少年にも笑顔が戻り始めます。

返しきれないほど恩を村人たちから受けた少年は、少しでも村人たちの役に立とうと頑張ります。

まだ二桁にも届いていない年齢の少年が、大人の男たちの間に交じつて、汗で視界が滲みながらも必死に畠を耕し、
村の女性たちの間に交じつて、不器用な手つきで何度も包丁で手を

切って怪我をしながら料理を作る日々を送り始めました。

健気に頑張る少年を村人たちは温かく見守っていました。
そして少年も、自分が少しずつでも村のみんなに恩を返せていると
実感できる日々に満足していました。

そんな少年に、悲劇が訪れます。

少年が十度目の誕生日を迎えたその日、彼の体に一つの呪いが掛か
っていました。

【嘘をつかなければならぬ程度の呪い】

少年が本当のことを言つたびに、体中に焼けるような激痛が走りました。

村人たちにそのことを話そうとしても、痛みが邪魔をします。

また、誰とも話さないようにして、一定時間以上誰かに嘘をつか
なければ同じように激痛に襲われました。

自分を世話してくれた村人たちに恩を返したいと願っていた彼は、
嘘をつくことを極端に嫌がりました。

ですが、そのたびに少年は理不尽にも激痛に襲われます。

次第に少年は痛みに屈服していきました。

村人に会つたびに嘘をつき、夜になると大声で「狼が出た！」と村中を走り回りました。

あんなに素直だった彼が何故こんなことを？　村人たちの誰もがその疑問を持ちましたが、毎日のように繰り返される少年の嘘に呆れ果て、その疑問は忘却の彼方へと葬り去られました。

少年は一人、枕を涙で濡らします。

あの人たちに嘘をつきたくない、と。　自分は恩を返し切れていないのに、と。

そんな時にも呪いは彼の体を蝕みます。

嘘をつけ。
嘘をつき続ける。
　　痛いのはもう嫌だろ？
　　うう。
　　それで自分は救われるのだから。
　　嘘をつけ。

彼はまた今日も夜の村を走り回ります。

「狼が出たぞー！」

そう叫びながら。

そんな日が何日か続き、彼の居場所は村のどこにも無くなってしま
いました。

今まで少年に笑顔で接していた村人たちは、少年の顔を見るたびに
苦虫を噛んだような表情を浮かべます。

少年は生まれてからずっと住んでいた我が家に別れを告げ、森の近くにある無人の小さな小屋で寝泊まりするようになりました。

ここに居れば必要以上に村人たちに嘘をつかなくて済む、と。
どうしても耐えられなくなつた時、また村を走り回ればいいから、
と。

夜中、水を汲むために小屋の外へと出た少年の田についたのは地面に残つた複数の獣の足跡。

この大きさ、形からして、間違いなく狼のものでした。

その足跡は一直線に村のほうへと向かって続いています。

村に獣に対抗できるような武器はありませんでした。せいぜいが畠仕事で使うような農作業の道具くらい。

しかも時間は真夜中、村人たちは全員眠りについています。

みんなが危ない。

気が付けば彼は村へと駆け出していました。

村へたどり着いた彼は、ざつと辺りを見渡します。

村の中にはすでに狼が数匹侵入していましたが、まだどの家も襲われた様子はありません。

少年は大きく息を吸い込み、大声で叫びます。

「狼が出たぞ……」

体に走る激痛。激痛。激痛。

手が、足が、胸が、頭が、焼けるようになつて熱い。

肉が体の中で燃やされているよつたな、そんな感覚。

氣を失いそうになりながらも必死で叫び続けます。

「狼が出た！ 狼が出たんだ！！ みんな、逃げてくれ！！」

ちらほらと家の明かりが灯り、つぶざりしたよつた表情の村人が窓から顔を覗かせます。

またいつも嘘つき少年か、とでも思っていたのでしょうか。

しかし彼らの目に映つたのは必死に叫びつづける少年に襲いかかる狼たちの姿。

肉を引き裂かれ、激痛で体を痙攣させながらも、村人たちの身を一心に案じ、勇敢に叫ぶ少年の姿に、村人たちの瞳から涙が零っていました。

そして怒りの雄叫びを上げながら数人の男が家から飛び出してきました。

その姿を見るや否や、狼たちは慌てて逃げ出して夜の森の闇へと消えていきました。

残されたのは血の海に沈む嘘つきの少年だけ。

男たちは今にも息絶えそうな少年を抱き起して必死に傷を塞いひとつしました。

けれど少年の体から流れ出る血は止まりません。

少年の瞳からは光が失われ、震えていた指先も動かなくなりました。

最後に幸せそうな笑みを浮かべて、嘘つきだった少年は最後に正直者になりました。

この話が色んな人に伝えられ、そのたびに少しづつ内容も変わっていきました。
けれど今でもその話は現代に残っています。

『オオカミ少年』として、哀れな少年のお伽噺として。

第七話（後書き）

誤字・脱字等あつまいたら「」報酬をお願いします。
みなさんからの「」感想お待ちしております。

第八話（前書き）

主人公の能力がお披露目です。

「国崎和真はずつと貴女に嘘をつき続けていたのよ。自分が人間であるとまで嘘について、ね」

八雲紫は三日田用の笑みを浮かべながら呆然としている萃香を見やる。

「嘘だ……和真が私に嘘をつくわけないじゃないか……ッ！　和真は、ときどき意地悪だけど、それでもすこく優しくて！　それで、それで……」

「彼が優しいことと嘘つきだとの間にどんな関係があるのか理解できないのだけれど……。いいわ、私が真実を教えてあげましょう」

紫は手にしていた日傘をぐるり、と一回転させると、静かに瞳を閉じる。

そして彼女は語り始める。嘘つきの男が生まれてから誰にも話したことのない秘密を。

国崎和真という男の真実を。その身に負いし罪を。

「あるところに、嘘つきの少年が居たわ。だけど彼は望んで嘘をついていた訳ではない。理不尽な呪いをかけられていた……嘘を

つかなければその身を滅ぼすという呪いを。

その少年の血肉を食らつた狼が居た。元々、妖の類だつた狼は、少年の血肉を食らつたことでその少年の呪いを受け継ぐことになってしまった。

狼とは本来、気高き生き物。それが死ぬまで嘘をつき続けなければならぬという呪いに犯された……その苦悩が、鬼である貴女には分からぬかもしれないけど。

……話を戻しますわ。狼の身でありながら嘘をつき続けなければなれなかつた彼らは、ある種の自己暗示のよつなものを自分に掛けようになつた。

自分は狼ではない、すぐに嘘をつく穢れた人間だ、と。その歪んだ願いがどういう訛か叶えられ、彼らは人として人に混じつて生きてきた。嘘をつき続けながら。

そして人間の身になつたことで、寿命も人間と同じく極端に短くなつてしまつた。だから彼らは子孫を残し、自分たちの種が絶滅しないようにしたの。

呪い付きの狼が子をなせば、その子に呪いを受け継がせることになる。そして何代にも渡り、彼らはその呪いを身に宿してきた。

……違うかしら？ 国崎和真

和真は紫の話を黙つて聞いていた。

紫の問いかけに答えるわけでもなく、ただただ沈黙を守つていた。

「今のは……本当なの？」

恐る恐る萃香が自分の横に立つ和真に問いかける。

「 」

和真は答えない。答えることが出来ない。

真実を口に出してしまえば、彼女はもう一度と自分に向かつて笑顔を見せてくれないだろうから。

彼が初めて心を開いた少女に拒絶される。 そんなことになつてしまえば、間違いなく彼の心が 国崎和真という人格がそこで終わつてしまふから。

妖怪としての狂つた人格を押さえつけるために作られた偽りの人格、“カズマ”。

その人格が崩壊したとき 自分の中の妖怪が、目の前の少女を殺してしまうかもしれない。

伊吹萃香は、紫の口から告げられた真実をなんとか自分で否定しそうとした。

けれど、真実を告げられた時のその辛そうな和真の表情は、紫の言葉を裏付ける証拠としては十分すぎて。

萃香は田の前が真っ暗になるような感覚に襲われた。

萃香は信じていた。和真は自分と真正面に向き合つてくれていると。

まだ出会つて1週間と経つていなが、遊園地で自分に言つてくれた和真の言葉。

『あ、あ～……その、な。別にお前がずっと居たいって言うなら、俺は構わないぞ。ガキの一人や一人を養う金くらい、余裕であるんだからな』

自分のわがままに、誠実さを持つて答えてくれた和真。

彼の性格は理解しているつもりだ。なかなか自分の感情を表に出すことが出来ない、不器用な青年。

そんな彼が照れながらも、自分に言つてくれたのだ。

ずっと家に居てもいいと。男女が同じ家で暮らす、それはつまり

遊園地で遊んでいる最中、その言葉を何度も何度も思い出して、和真の気づかないところでよく真っ赤になつたものだった。

だからこそ、信じられなかつた。

彼がいままでずっと自分に嘘をつき続けていたことが。

けれど、分かつてしまつた。

紫や自分の言葉に返答しないことによって、彼が嘘をつを続けていたことを。

そして何よりも彼のその表情を見て、彼が嘘をつくことを心から嫌悪している。

だから、そんな表情を見せる和真が、萃香には悲しくて、寂おしくて。

気が付けば萃香は、和真の手をぎゅっと握つていた。

それを見た和真が、信じられないでもいつかのよつた表情を見せる。

「萃、香…………？」

「やつと、今前で呼んでくれたね」

珍しく困惑しているような和真を見て、萃香はクスリと笑う。

「どう、して……俺は、お前にずっと嘘をついてたのに……鬼つてのは、嘘が嫌いなんだろ……？ それなのに、なんでお前は……？」

俺なんかに、そんな笑顔を見せるんだよ……

その言葉を聞いた萃香は苦笑いを浮かべ、静かに首を横に振る。

「確かに、和真が私に嘘をついていたっていうのはショックだった

よ。 それに腹が立つた。 でもそれ以上に、和真が嘘をつく」と
を嫌がっていたのに、それに気づけなかつた自分に腹が立つた」

「馬鹿だろ……お前……どこまで、お人好しなんだよ…………」

知らず知らずのうちに和真の頬に涙が伝つた。
けれどその涙はとても温かくて、和真の心に在つたはずの氷を静か
に溶かしたのだった。

そんな一人の様子を見つめていた紫は、微笑みながら和真に声をか
ける。

「あなたの体に掛かつた呪い、それは真実を口にするたびに全身を
火で焼かれるような痛みに襲われるというも。 並大抵の妖怪で
はその呪いに屈服するほかない。 しかし貴方は先日、藍に伊吹萃
香は自分の家族だと告げたそうね？」

国崎和真の監察から戻つた従者の藍から、そのことを報告された時、
紫は心底驚いていた。

彼は言ったのだ。 その鬼は自分の家族だと。 口にするだけなら
簡単で、とてもとてもらつぽけなもの。

けれどその瞬間、彼の体には呪いによる激痛が走つていたはずだ。

それはその言葉が彼の偽りのない本心だったという証。

苦痛を表情にこそ出さなかつたものの、公園で紫が現れる丁度その時まで、満足に喋ることすらできないほどに消耗していた。

それを萃香は、和真の機嫌が悪くなつたと勘違いしていくようだつたけれど。

「和真…………」

萃香は心配そうな表情で和真を見る。

そんな萃香に、和真是心配ないと手を振る。

その瞬間、紫がパチッと手を鳴らした。

紫の行動の意味が分からぬ和真は、小さく眉を顰める。

「私の能力で、あなたの体と呪いの間の境界を操りましたわ。 今なら嘘をつかずとも、痛みに襲われる心配はありませんわ
もつとも、呪いが強すぎて、この状態を維持するのは5分が限界で
しそうけど」

「 なんのつもりだ……？」

和真が自分の体に意識を集中させると、確かに今まで心臓を鎖のようなもので巻きつけられていた感覚が消えている。

しかしそんなことをしても紫にはなんのメリットもないはずだ、と思考を巡らす。

「国崎和真、伊吹萃香　あなたたち一人の在り方は、私が幾千の時で見てきた中でも特に美しいもの。そんな一人のお別れの挨拶を邪魔する無粋な不純物を、取り除いてあげただけですわ」

クスクスと口に手をあてて微笑む紫に、萃香が一歩踏み出して睨みつける。

「私は帰らないよ、紫。　和真と離ればなれになるなんともっての他だ」

萃香に続くように和真もまた、紫を見据える。

「だ、そうだ。俺の大切な家族を連れて行くというのなら、ここで貴様を潰す」

そして和真は、今まで抑えていた妖力を解放する。

「　　ツ！？」

和真から放たれるその膨大な妖力に、紫どころか隣に居た萃香まで
もが驚愕の声を上げる。

幻想郷に居た頃の萃香に勝るとも劣らない量の妖力。 そしてなに
よりも、その妖力に混じっている、神聖な力を感じた。

「…………ようやく合点が行きましたわ。 神話の生き物である、
“天狼”。 それが地上の穢れによって妖怪化した一族…………そ
の末裔」

「懐かしい名前だが、過去の栄光に囚われるのはもつやめたんだ。
今ここに居るのは、ただの人狼。 国崎和真だ！」

和真は叫び、己の能力を解放する。

【真を嘘にする程度の能力】

和真から放たれた光の粒子が萃香の周りに集まり、それが霧散すると萃香は驚いたように声を上げる。

「私の妖力が、戻ってる……！？」

和真は紫を見据えたまま、萃香に声をかける。

「すまん、万が一の事を考えて、初めて会つたときにお前の妖力を俺の能力で抑えていた」

真を嘘にする程度の能力。　その名の通り、実際にあつたものを無かつたものとする能力である。

これによつて萃香の妖力を“なかつた”ことにしていた。
万が一妖力を感じ取れる人間に見つかって、萃香の身に危険が降りかからないようだ。

その封印を、今解き放つ。

「さあ、八雲紫。　あいにく俺たちの“日常”にお前は必要ない」

嘘つきの男は進む。

彼が心から愛している、大切な家族を守るために。

今この瞬間だけはすべての嘘を殴り捨てて、心からの想いを、自分の横にいる彼女のためだけに

「はじめようか紫。 あんたとやるのは久しぶりだが ここ数日、妖力を使えなかつたんだ。 あいにく手加減できそうにないよ？」

小さな鬼は進む。

自分の想い人と共に進む道を、誰にも邪魔されないために。

最強の妖怪と謳われ、人々に畏怖された鬼の力を、自分の横にいる彼のためだけに

「…………く、くくく……」

紫は心底楽しそうに、嗤いつ。 ああ、本当にこんなに楽しいのはいつ以来だろう、と。

幻想郷の管理者となつた今、ほとんどの妖怪は紫の姿を見るだけで恐れ慄いていた。

そんな自分と対等に渡り合える相手など、片手で数えるほども居ない。

皆、戦う前から負けを認めているのだ。

それなのに、目の前に居る一人の姿はなんだ？

伊吹萃香は言わずもがな、戦闘の経験がほとんど無いに等しい国崎和真ですら、自分との力量の差が分かっているはずなのに。

あの一人は互いという存在を守るために、圧倒的な存在である自分に立ち向かってきているのだ。

素晴らしい、本当に素晴らしい。

紫は心からの賞賛を一人に贈る。

だが一人の一途な願いは、到底叶わぬ夢。
なぜならば、二人の目の前に居るのは
怪なのだから。

幻想郷最強の妖怪
八雲紫は、その大きすぎる力を、解放した。

「鬼の異端児と百の年も迎えていない若造が幻想郷の母に楯突こう
というの？ ふふつ、いいわ。 あなたたちの全身全靈を
以つて私を楽しませなさい」

ここに戦いの火蓋が切つて落とされた。

第八話（後書き）

9 / 23

加筆・修正

10 / 7

主人公の能力名を変更。

第九話（前書き）

気が付けばP.V.21000 ユニーク3400になっていました。
お気に入り登録も48件……何が起きたし！？

第九話

side・紫

迫り来る弾幕の嵐を避けながら、私は小さく舌打ちした。
というのも、目の前に対峙する一人の実力が予想を遥かに上回るも
のだったからだ。

伊吹萃香 鬼の四天王のひとりとしても名高い彼女の実力は、
その噂に違わないものであった。
こちらの弾幕を容易く回避し、一気に距離を詰めて拳を突き出して
くる。
ただの拳と侮るなかれ。その力は古来より人が恐怖して止まなかつ
たもの。

回避こそ出来ていたが、その拳圧により、私の頬には数か所の切り
傷が出来ていた。

そして一番のイレギュラーは、人狼 国崎和真の存在だった。
彼が放つ弾幕には、一つ一つに膨大な妖力が込められており、戦闘
経験の浅さからまだまだ荒削りな部分が残るもの、一発でも直撃
してしまえば私でも大ダメージを受けることは必須だらう。

何より厄介なのが、彼の能力である。

【真を嘘にする程度の能力】

これによつて、私が放つ弾幕を文字通り“嘘”へと変化させる。

つまりは、当たらないのだ。

弾幕があつたという事実そのものを嘘へと変えてしまつその力はもはや神の領域である。

境界を操る程度の能力という絶対的な能力を持つ私と対になる程の強力無比な能力。

国崎和真が弾幕を張り、その弾幕の隙間を掻い潜るようにして伊吹萃香が私へと突進してくる。

更には伊吹萃香に直撃しそうになつた弾幕を国崎和真の能力で嘘へと変化させ、弾幕をかき消す。

敵ながら天晴なコンビネーションだ。

今や幻想郷中に知れ渡つている一組
博麗の巫女とただの魔
法使いの少女によるコンビネーションにも劣らないほどの連携。

予想だにしなかつた苦戦に、額に汗が滲んでいるのが分かる。

再び国崎和真から放たれる高密度の弾幕。

それをギリギリのところで回避しながら、伊吹萃香の姿を探す。

（居ない……！？ そんな馬鹿な……一体どこに？）

きょろきょろと辺りを見渡して見るものの、そこに田嶋の姿は発見できない。

すると、背後から伊吹萃香の雄叫びが上がった。

「はああああッ！…」

振り返れば、拳を振り上げる鬼の姿がそこにあった。

いつの間に背後に回り込まれていたのか そんな今更な考えに小さく苦笑する。

伊吹萃香の能力 【密と疎を操る程度の能力】。

この能力によつて自身を霧へと変化させ、全ての物理攻撃から回避することが可能となる。

更には隠密行動にも長けており、霧状態へとなつた彼女を見つけることは容易なことではないだろう。

つまり、伊吹萃香は国崎和真が弾幕を放つと同時に、自分を霧へと変化させ、私の背後に回り込んだということ。

体の重心を少しづらして、迫る来る拳を回避する。

それと同時に拳圧で腹部の服が弾け飛び裂傷を負うも、渾身の力を込めた拳を避けられたことで体勢を崩している伊吹萃香の横腹に蹴りを叩きこむ。

「がはっ！？」

小さな体が転がり、公園内に設置されていた遊具へと叩きつけられる。

「ツー？ 萃香あーー！」

その光景を見た国崎和真が、こちらに弾幕を張り巡らしながら倒れ込む萃香の方へと跳躍する。

咳き込む萃香を抱き起し、顔についた砂を払い落とす。

「大丈夫かー？」

「ゴホッ……心配、ないよ……」

痛みで顔を顰めながらも、なんとか言葉を返す萃香に和真はギリッと奥歯を噛みしめる。

萃香を地面に下ろし、和真が立ち上がった。

私を睨み付け、弾幕を撃とうと構える。

大切な家族を傷つけられたのだ。彼の怒りは最もだろう。そしてその怒りに鼓舞するように跳ね上がる妖力。

けれど、それこそが“穴”

冷静さを失つた相手ほど御しやすい存在はない。

そう、彼が冷静だったならば難なく避けられていただろう一撃。

彼の目の前に突然現れた、隙間から放たれる一発の鋭利な弾丸。

それが、彼の腹部を容易く貫いた。

「『」ほつー。」

口から大量の血を吐いて、和真は地面に片膝を着く。

腹部から流れ出る大量の鮮血
素人目に見ても、それが致命傷であるとはつきりと分かる。

伊吹萃香と同等の妖力があると言つても、彼の体は人間のもの。
つまりは高火力であるが装甲は紙という、アンバランスな存在なのだ。

そもそも、神でもなく妖怪でもなく人でもない彼という不安定な存在が、今まで私と対等に戦えていたことすら奇跡だったのだ。

「和真！　まさか、怪我したのか！？」

必死な表情で叫ぶ萃香に、和真は振り返ることすらしない。
この小さな娘に傷を見られて、心配させたくなかつたから。

和真は息を吸い込み、小さく萃香に呟いた。

「萃香、お前と過ごしたこの数日間は死んでも忘れない。
忘れることなんて、出来るわけないだろ……こんな迷惑なガキの
ことなんて」

「なに、を……？」

萃香に背を向けている和真の表情は、萃香からは見るところが出来ない。

しかし、和真と真正面から向き合っている私からは彼の表情をはつきりと見ることが出来た。

笑っていた。

今まで誰にも自分の本性を見せたことのない彼が。

涙を零しながら

それでも満面の笑みで。

「そういうえば、もうすぐ昼飯の時間だったな……。 今日も、チャーハンでいいか? ……と言つても、それ以外は口クに作れないんだが」

息も絶え絶えになりながら、必死に言葉を紡ぐ和真。

そんな和真の様子に、ただ事ではないことを悟つたのだろう。立ち上がり、急いで和真の傍に向かう萃香。

そして和真から流れ出ている血を見て、息を呑む。

慌てて彼の体を横たえて、萃香は自分の膝に和真の頭を置いた。

もう彼が長くはない」と悟つたのだろう。

萃香の瞳からはぼろぼろと涙が溢れだし、それでも和真の言葉に満面の笑みを以つて応える。

「うん、和真のちやーはんは世界一だからねー。でも、今度はみんなも呼ぼうよ! みんなで、和真が作ったちやーはんを食べよう!」

「ああ……みんなで、か。いいな、それ。中華料理ならそこそこ作れるから、店を出すのもいいな……。詐欺師は、もつ廃業だな」

苦笑しながら、だんだんと瞳が閉じられていく和真。

そんな和真の意識を少しでも繋ぎ止めようと、萃香は必死に声をかける。

「詐欺師なんて、和真には似合わないよ。誰かを不幸にする仕事より、誰かの笑顔が見れる仕事のほうが、和真だつて好きだろう!?？」

「ああ……そうだな。そんな仕事も、してみたかった」

「すればいいじゃないか！これからどれだけでも出来るさーー！私が手伝う、他でもないこの私が手伝つんだーー！出来ないなんてことがあるかーー！」

「お前……家事、できたつけか……」

小さく笑う和真を見て、涙を零しながら萃香も笑う。

「これから覚えるぞ。もちろん、和真が教えてくれるんだろう？？」

「……ああ、教えるとも。どうにかしても恥ずかしくないくらい、立派な女に育ててやるさ」

そう、それはi+fの話。

そんな未来もあつたかもしれない。

一人が小さな店を切り盛りし、苦労はあるけれど充実した毎日を送る日々。

一人の間に嘘など無く、幸せな毎日がずっと続いていく。

そんな、もしもの未来があつたかもしれない。

けれど現実は残酷で

彼の臉は、重く閉ざされてしまった。

第九話（後書き）

まだ完結じゃないですよ？

追憶・小さな鬼の話（前書き）

今回は全面萃香視点です。

ツイッターのアカウント凍結されました。
ま、まさか開始一日で凍結されるとは……恐ろしいぞツイッター。
ちょつとおせうさまのおしつこいつぶやいてただなのにな凍
結とか～……

追憶・小さな鬼の話

side・萃香

そう、それはきっと初恋だった。

鬼という身に生れ落ちて幾千の日月を数えてきた私だが、あいにく色恋沙汰というものに縁がなかつた。
誰かと恋をするということよりも、強敵と戦い酒を飲みかわすこと
が一番楽しかつたからだ。

今思えば自分もまだまだ子供だったのだらう。

つけ加えるなら、この小さな体。
コンプレックスに思つたことなど一度もないが、女の色氣と言つものが微塵も感じられないこの体に欲情を抱く者が居るはずもなくいや、何事にも例外はあつた。
極稀に私のことを熱っぽい視線で見つめる者も居ることには居たが、鬼の四天王の一人という貫禄を持つ私に言い寄れる度胸のある男が居なかつたというだけの話である。

まあそんなこんなで、生娘のように純潔を守つたまま歳だけを重ねてきた。

地上の人間たちに絶望し、鬼たちは地底へと姿を消した。

当然私も付いて行つたのだが、何の刺激もない毎日に嫌気が刺し、再び地上へと舞い戻つた。

そこで暇つぶし程度に考えた異変を起こし、博麗の巫女との決闘に敗れた私はいつの間にか地底へ帰ることも忘れて幻想郷中をフラフラしていた。

宴会が開かれると聞けば飛んでいき、昼間は博麗神社で酒を飲みつつ靈夢を観察する毎日を過ごすようになった。

そう 全てが始まったあの日も、私はいつものように博麗神社で開かれる宴会に出席したのだ。

次々と訪れる妖怪たちと互いの武勇伝なんかを話しつつ、酒を飲む。酒も回りかけてきたころ、飲み仲間たちにちょっと失礼するよ、と言い残して神社の脇にある廁へと向かった。

用を足し終え、廁の扉を開くとそこにあつたのは見慣れた神社の光景ではなく 真っ暗闇。

微かに差し込む月明かりのほづくと歩みを進めると、そこに居たのは一匹の人間。

黒髪黒眼の日本人らしい特徴だが、なんとも人相が悪い。

鬼たちには気に入られそうだけど、人間相手だと怖がられて近寄つてさえこないだろう。

そんな外見とは裏腹に、靈力が微塵も感じられないちっぽけな存在だった。

そしてまあ色々あって、一人で飲むことになったわけだが。

さっきの人相の悪い男の名は国崎和真というそうだ。

彼と話していく分かったことは、ここが幻想郷ではないということ。

それにもしても、国崎……国崎ねえ？ 幻想郷に居る間に外の人間の苗字も色々と変化しているみたいだ。

そんなことより彼が飲んでいた色鮮やかな酒が目についた。

私が持っている瓢箪からは無限に酒が出て来るが、かといって同じ味の酒を飲み続ければ流石に飽きが来るというもの。

少しだけ分けてもらおうかと思つたけれど、乞食でも見るかのような目つきで私を見てくる男が癪に触つて、結局自分の酒を飲み続けていた。

翌朝、頭を襲う痛みで私は田を覚ました。

見ると、田の前で和真が何やら小さな機械をいじっていた。
どうやら手荒な方法で起こされたようだ。

本当にしぐれく鬼に対して喧嘩を売つてくるやつだ……」これは一度
どちりが上か分からせておいた方がいいだろうか？

と、そこまで考えて自分の体に纏わりついていた布きれを見やる。

寝たときにはこんなものなかつたはずだ、と記憶を探り、自分が眠
りについた後に彼がそつとかけてくれたのだと理解する。

そういえば、誰かに布団をかけてもらひなんて一度もされたことな
かつた。

皆自分より先に寝てしまつし、そうでなくともほつたらかしにする
よつな連中ばかりだった。

なんだ、むかつくところはあるけど、結構いい奴じゃない
か。

なぜか箱の中に入っていた人間と会話をした後に和真が作つたとい
うぢゃーはんを食べた。

これがすごくうまかつた。今までこんなにうまい料理を食べたこと
などあつただろうか？

酒にはあまり合わなそうだが、それを置いても本当においしい。

いい嫁になると褒めたんだが、怒られてしまった。
なんでだ？

その後、まあ色々あつた。

え、色々つて何かつて？　い、いやあ……流石に私の口からそれを
言うのはちょっと恥ずかしい。

人前で泣くなんて赤ん坊の時以来だつたから、本当に恥ずかしかつ
た。

そして涙を流す私を、めんべくそなうな表情をしながらも拭ってくれた彼の行為が嬉しくて、更に泣いてしまった。

…………「ふふ、ほんと恥ずかしい。」これは黒歴史として封印することにする。

よく分からぬいけど、和真は私を家に置いてくれるらしかった。

私が落ち着いた後、和真は私を促すようにしてどこかに歩き始めた。
もしかして、どこかに置いていかれるのだろうか。そんな不安が頭を過った。

そんな私の様子を見てか、和真はやれやれと私の手を握ってくれた。
その手がとても温かくて、心からほっとした気持ちになった。

しばらく歩くと、大きな建物の前に着いた。
和真曰く、ショッピングもあるっていづやつらしげが、よく分からぬ。

幻想郷に住む人間よりも多くの人間が一つの建物の中に居て、とても驚いた

そしてたくさんの服が売られている場所へ行き、そこで私の服を買つた。

どんなものが似合うのかも全然分からなくて困つたけれど、店で働いていた千恵という女性が選んでくれた服を和真に見せると、彼から珍しく褒められてしまった。

たつたそれだけなのに、顔に熱が灯るのが分かる。

なんなんだ、これは……？

今まで経験したことのない不思議な感覚。

私は、随分前に知り合いの妖怪が言つていたことを思い出していた。

『いいですか、萃香さん！ 恋つていうのはですね、相手から褒められたりすると胸がぎゅーっとなって、顔がぽかぽかしてしまいます！』

顔がぽかぽか……ま、まさか！ これが恋！？

鬼である私が人間の男に恋をしただなんて信じられなかつた。

けれど帰り道、朝泣いたせいなのか急に眠気が襲ってきた私を背負ってくれた彼の背中の熱を感じた時、今度は胸がぎゅ～～つとなつて、また顔がぽかぽかなつてしまつた。

そして彼の温もりが心地よくて、私はいつの間にか眠りに落ちてしまった。

家に着くと、風呂に入れと言われた。

妖怪にそんなものは必要ない、と言つたのだが、汗臭いと言われてびっくりした。

慌てて体の匂いを嗅ぐと、確かに汗臭い。

私はそこでようやく、幻想郷の外に出てから自分の体から妖力が感じられないことに気付いたのだった。

もしもあのまま、彼に追い出されていたらぞっとする。

妖力のない今、私の力は小娘同然なのだ。

外敵が現れれば、身を守る術はない。

冷や汗を流しながら、彼の質問に適当に返していた私だが、ふいに自分の体が宙に浮く感覚を感じて我に返つた。

見れば和真が私の体を脇に抱えている。

どうこうつむりか聞くと、彼は私と風呂に入ることにしたらしい。

つて、ちょちょちょーちょっと待つたーー！

どうして急にそんな話になつてるのー？ ていつか本気なのーーー？

どうにかして彼を説得しようと試みたが、聞く耳持たずといつた感じで和真は脱衣所の扉を閉めた。

そして彼は何の躊躇いもなく自分の服を脱ぎ始めたのだ。
更には私の服を脱がそうとこちらへ近づいてくる。

初めて見る男のアレが、生娘の私には衝撃的すぎて大混乱してしまった。

自分でも何を言つているか分からぬ叫びを上げながら必死に抵抗したものの、するつと服を脱がされてしまう。

まさか想い人の前でこんなに早く裸を晒すことになつてしまふなんて想像もしていなかつた。

もう恥ずかしくて恥ずかしくて、顔から火が出そうだ。

「ひー……見られてる。 絶対見られてるよね……」

恐る恐る閉じていた田を開くと、そこにはすでに浴室へ入って石鹼で体を洗い始めている和真の姿が。

それを見てずるりと足が滑ってしまったのは仕方ないと思つ。

和真是体に付いた石鹼を洗い流すと、ゆっくりと湯船に肩を沈めた。なんとも気持ちよさそうな声を出して湯に浸かっているので、そんなに気持ちの良いものなのかと脱衣所からじつそり覗く。

すると彼と田が合つて、さっさと入つてこゝと言われた。

……もう裸は見られてるんだ。ビリビリでもなれ。

半ばヤケクソで浴室へ足を踏み入れる。

そして湯船に恐る恐る足をつけていった。し、仕方ないじゃないか。体中を湯につけるなんて初めての経験なんだから。

そんな様子の私を見て和真是苦笑すると、私を持ち上げて一気に湯の中に浸からせた。

一気に体の温度が上がったような感覚に、小さく肩を震わせたものの、慣れてきたらこれがなかなか気持ちがいい。

和真的膝の上に座つて、風呂の気持ち良さを堪能した。

それから和真と風呂の中で色々と話をした。

和真は正義の味方なんだそうだ。 いつか鬼退治に来てくれないかな？

とか思ついたら、しゃんぷーとか言つやつで鬼退治された。 あれはほんとに反則だよ。

翌朝、私が人の入っている箱を見ているとゆーえんちとかい“つす”いのが映つていた。

なんでも、新あとらくしょん?とかいうのが追加されたのどうのこうので、とにかくす“じ”いのだ!

幻想郷にゆーえんちなんて無かつたから、一度行つてみたくて和真に頼み込んだ。

どうにかOKを貰えて、目玉焼きが乗った皿を机に運んだ後、急いで和真に買つてもらつた服に着替えた。

これを着て和真の隣を歩いてたら、周りからは恋人同士に見えるのかな……？（どう見ても兄妹です）

自分で考えたことに恥ずかしくなつて頭を振りながら、彼との新しい一日に想いを馳せていた。

ゆーえんちに着くと、そこにはショッピングもあるよりもたくさん的人が居てびっくりした。

受付の女性に貰つた案内書きを熱心に見ていると、そこには「一ひーかつぶつ」という乗り物の横に小さく、カップルにおすすめ！って書いてあつた。

カップルの意味くらい流石に分かる。あれだ。その、こ、恋仲とこうやつだ……。

これは何が何でも行かなくてはならない。小さく拳を握りしめて、

和真の手を引っ張つて「ひーかっぷ田」がけて走り出した。

興奮した私が「ひーかっぷ田」を回しすぎて、和真の具合が悪くなつたりと色々事故があつたものの、いじこともあつた。

勇気を出して告白した私に、和真がOKしてくれたのだ！（勘違
いです）

恋仲というだけではなく、更には私に、ずっと家に居ていようと
てくれたのだ。

男女がずっと同じ家で暮らす……それはつまり

恋仲を通り越して、結婚！？（勘違いです）

嬉しそぎて彼の胸に飛びついでしまった。

その後で何故か彼に怒られてしまった。早速亭主らしくなつてきた
ね、和真。（関係ありません）

夕暮れ時、楽しかった時間も終わる。

そろそろ帰るぞ、といつ和真の言葉に答えて、私は小走りで廁へと向かう。

この時間が終わってしまうのは残念だけど、まだ明日がある。明後日もある。

夫婦なんだから、これから先ずっと一緒に居られるんだ。

和真のおいしいご飯を食べて、一緒に楽しい時間を過ごして……あ、私も料理の勉強くらいしたほうがいいかもしないね。

その時は和真が教えてくれるかな？ でも和真にもお仕事があるし

……

そうだ、お金を貸してもらつて料理の本を買って来よ。

本を見ながらなら私だつて出来るだ！

和真、おいしそうに言つてくれるかな？

ずっと、一緒に居たいな。

ずっと、和真の傍に居たい。

鬼であることを捨ててでも、彼の傍に。

そう、これが初恋。

小さな鬼の、初めての恋。

けれど運命は、そんな二人の絆を無慈悲に引き裂いた。

追憶・小さな鬼の話（後書き）

感想貰えると作者の元気がぐんぐん上がります。

第十話（前書き）

今回は少し短いですが、次回からの伏線といつゝことで。
お気に入り登録数が驚くほどに増えてます。
みなさん、本当にありがとうございます。

「和真！ 和真！ 田を開けてよ、かずまあつっ！－！」

瞳を固く閉じ 力無く横たわる和真に、萃香はしきりに声を掛ける。

萃香の瞳からは止めどなく涙が零れ落ち、その手は和真の体から出る血で真っ赤に染まっていた。

けれどそんなことは意にも介さず、ただただ鬼の少女は悲しみの慟哭をあげる。

「思つたよりも脆かつたわね。 まさか一発でゲームオーバーだと
は思わなかつたわ」

嘲笑うかのように告げる紫に、萃香の動きが止まる。

むりじと幽靈のように顔を持ち上げる萃香。

その彼女の瞳からはすでに光は失われていた。

表情の失われた顔で紫を見据え、だらんと垂れ下がった両腕の先にある拳に力を入れる。

目の前で嘲笑う女は、幻想郷の母でも、自分の古くからの宿敵でも、はたまた気の合う親友でもない。

自分のすぐ傍で静かに横たわる和真の

仇。

彼の体温が、恋しい。

あの日つないだ、温かかった彼の手は、今はもう動かない。

こいつが消した。彼の温かさを消した。

彼の笑顔が、愛おしい。

けれどもう、彼に笑顔が戻ることは、ない。

こいつが壊した。彼の笑顔を壊した。

小さな鬼の少女は、嘘つきな男のことを狂わしそびれていた。

「お前が……お前やえ居なければ……ッ！」

ぎれりと歯を噛みしめる萃香の瞳には感情の色が戻っていた。

しかしそれは彼女本来の色ではない。

少女の瞳に宿るのよ、復讐の炎に満ち溢れた黒々とした感情の色。

紫はそんな萃香を一瞥して、小さくため息をつく。

自分の傍で横たわる男の行動から何も学ばなかつたのか、ど。

怒りに身を任せた愚か者に待つ結末は敗北しかないとこいつのよ。

「 来なさいな、伊吹萃香。 あなたの悲しみも憎しみも、幻想郷は全てを受け入れますわ」

紫がもう幻想郷の外に居る理由はない。

そもそも萃香を連れ戻しに来ただけだったのだ。

さつさと隙間を使って田の前の鬼を幻想郷へ送り還す。 ただそれだけ。

その際邪魔だつた人狼の男を始末するために戦つただけのこと。

その男を始末した今、いつまでも時間を潰している余裕などない。

まだ博麗大結界に起きた異変について、具体的な解決方法が見つかっていないのだから。

紫の能力で萃香の足元に隙間を発生させる。

ズズズ……と音を立てて、萃香は足から隙間に飲み込まれていく。それに気づいた萃香は、なんとか脱出しようともがくものの、抵抗むなしくすでに膝まで隙間に飲み込まれていた。

(イレギュラーの存在はあつたけど、これで予定通り……。早く帰つて藍に温かいお茶でも入れてもらいましょ)

自分の勝利を確信する紫。

当然だ。彼女には自分の能力に対する絶対の自信があつたのだから。しかし、それはあくまで彼女の能力を妨害しない者が居なかつたらの話で……

ふつ、と紫が息をついたその瞬間

「「ツー?」」

膨大な妖気が、二人の周りに充満した。

辺りを見渡して見るものの、当然の如くこの場に居るのは紫と萃香の2人だけ。

しかしこの妖気は一人のうちどちらのものでもない。

妖怪にはそれぞれ妖気に特徴がある。

今この場に充満している妖気は、お互いのものではないことはすぐ分かった。

一体誰が 紫は探るような視線を先ほど自分が殺した男の体に向けて、息を呑んだ。

死んだはずのあの男から、恐ろしいほどの妖力が漏れていたのだ。

馬鹿な 紫が呆気に取られたような表情をし、その表情に気付いた萃香もまた、自分の背後を振り返ろうとした、その瞬間。

和真の体が、跳ねるようにして起き上がった。

和真が見せた、人間ではいや、生物には到底不可能な動きに、紫は小さく後ずさる。

よく見ると、彼の漆黒だった髪は雪のように真っ白な髪へと変貌を遂げていた。

それには、天を指すように生える、銀色の毛並みを持つた狼の耳。

ゆつぐりとした動きで開かれた彼の瞳の色は、金色に輝く天狼の眼。

人間の身だった頃の彼とは比較にならないほどの妖力。

そして和真はいや、長年の封印から解き放たれたその妖怪は、無邪気で……それでいて、歪んだ笑みを浮かべた。

「あはっ」

第十話（後書き）

和真くん妖怪化のお話でした。

誤字・脱字等ありましたらい報告お願いします。

皆さまからの「」感想を大募集しています。

といつか感想貰えない日はめっちゃ落ち込むので、短くてもいいの
でお書きくださいと本当にうれしいです。
なんか催促してるように申し訳ないです……

第十一話（前書き）

みなさんたくさんの方の「感想・評価ありがとうございます！」
読者のみなさんあつてこそこの小説です。
これからも応援よろしくお願いします！

第十一話

s.i.d.e.・紫

「あはっ」

「ツー！」

目の前の妖怪から放たれる膨大な妖氣と心臓を驚撃されると同時に、私は一気に警戒度を上げる。

「おねーさん、妖怪なの？　お前は？」

「……ええ、八雲紫……スキマ妖怪よ。といひで、あなたは一体何者かしら……？」

「ぼく？　ぼくは九狼だよ！　狼の妖怪！」

にこにこと無邪気な笑みで語る九狼。しかしその体から止めどなく溢れ出る狂氣が肌に刺さる。

一つの体に二つの精神が存在する妖怪……それが目の前の人狼の正体、か。

「あなた……いや、正確には“あなたたち”の体は確かに死んだはずよ。一体どういう原理になっているのかしら？まさか蓬萊の薬を飲んだつていう訳でもないんでしょう？」

そう、確かにあの時、和真は死んだ。

死者が蘇るなんて世界の常識を覆すことなど出来うるはずもない。

けれどそんな常識をあざ笑うかのように、目の前でその死んだはずの体をもう一つの人格が操っている。

「ほーらいのくすりってなに？ そんなものなくても、ぼくは……いや、ぼくたちは死なないよ。 ぼくが死なせてあげないもの」

楽しげに声を上げて笑う九狼の言葉に、小さく眉を顰める。

“死なせない”とは、一体どうこいつことなのか。

彼の能力は【真を嘘にする程度の能力】のはず。

死と言う真実を嘘にした……？　いや、そんな馬鹿なことがあるわけがない。

この私ですら、生と死の境界を操ることなどできないのだから。

ふと見ると、九狼の乱入によつて隙間から逃れた萃香が、彼の豹変振りに口を開けて呆けている。

きっとまだ理解できていないんでしょうね。今日の前に居るのは和真ではない、まったくの別人だということを。

「そんなことより、ぼくと一緒に遊ぼうよ。ずっと外に出れなかつたから、退屈してるんだ」

ふくーっと頬を膨らませる九狼。

可愛らしい仕草だが、元の顔つきがいかついだけあって、精神と体が一致していないというなんともアンバランスな印象を受ける。

「……せっかくのお誘いだけど、お断りさせていただきますわ。早くそこに居る鬼のお姫様を連れて帰らなければなりませんもの」

視線を萃香へと向ける。

九狼もまたその視線を追い、萃香がそこに居たことを初めて気づいたようで、驚きの声を上げた。

「わあ！ 君も妖怪？ その角かっこいいね～」

「え？ あ、そうかい……？」

ぺたぺたと角を触る九狼。その体から漏れる狂気に若干後ずさりながらも、萃香は苦笑いを浮かべる。

その体から感じられる狂氣とは裏腹に、実は純粹なだけの妖怪なのがもしない。萃香がそう思い、肩の力を抜こうとした、その瞬間。

何の前触れもなく、九狼は萃香の腹に蹴りを叩きこんだ。

「かはッ！！」

それと同時に萃香の肺の中の空気が一気に外に押し出され、呼吸ができなくなる。

20メートルは飛んだところで萃香の体は、重力の法則に従つて背中から地面に叩きつけられた。

「ぐつ……うう……」

「わー、すうじく飛んだよー？ すうじこすうじこーー。」

パチパチと満面の笑みで手を叩く九狼。

狂っている。これならばあの狂氣の質も納得できるといつもの。

「次はドッヂボールだよ！ うまく避けてね！」

九狼の手には、ボール大の大きさの妖弾が構えられている。

けれどその大きさに反比例するように、膨大な妖力がその弾に詰まっているのがひしひしと感じられる。

(まざいわね……)

アレを食らえば、いかに鬼と言えどもただでは済まないだろう。

今ここで伊吹萃香に死んでもらっては大いに困る。

かといって妖怪化した彼を私の実力で止められるとは思わない。

私は一気に萃香との距離を詰め、彼女を抱きかかえる。

そして一瞬で前方に隙間を開け、脇目も振りずに飛び込んだ。

「ゆ、紫……？」

「怪我人は黙つてなさい……まったく、ついてないわね」

私の腕の中で痛みに顔を顰めながら、私の顔を見上げる萃香に苦笑する。

隙間を通つて目的の場所に行くと、このは案外イメージ力を要する。なので少しイメージを纏める時間が必要になるが、今はそんなことを言つている場合ではない。

殺しても死なかつたような奴だ。どんなイレギュラーが再び起ころか分からぬ。

まずは自分と、そして伊吹萃香の安全を確保することが最優先。

とにかく田地はどこでもいい。まずはアイツとの距離をえ離せれば問題はない。

そう考へ、隙間の中を小走りで駆けていく。

とりあえずあの場所から200kmほど離れた場所に……

「見いつけた！」

「「ツツツ……？」」

隙間の中を走っていた私たちの前に現れたのは、白髪の妖怪。

国崎九狼だった。

ありえない。

あらうことが、田の前の妖怪はスキマの中に自力で入り込んできたのだ。

そんなことを出来る存在なんて今まで一度も見たことない。

当たり前だ。最強の妖怪である私の能力に干渉できる存在なんて、幻想郷をひっくり返したって出て来るわけがない。

それをこいつは、とも自分の家の玄関を潜るかのように侵入してきた。

私の背筋が、恐怖という感情を以つとして生まれて初めて凍った。

「本邦の、ヤマトノサムライのやうな」

第十一話（後書き）

ご感想お待ちしています。
ツイッターのフォローも待っています。

第十一話（前書き）

平日ですが余裕がありましたので投稿。

急遽書き上げましたので至らぬ点があるかもしぬかもしれません。

皆さまの応援のおかげで、この度PV36000 ラニーカ5300を達成いたしました。

このような作品が皆さまに愛されてこられたこと事実に深く感動していますが、

何よりも応援してくださつてこられるすべての読者の方に改めて深く感謝の意を述べさせていただきます。

本当にありがとうございました！

この物語の結末まで今しばらくお付き合いいただければ幸いです。

「がはっ！！」

九狼の力によつて紫の体が宙を舞い、スキマの中にある地面へと叩きつけられる。

もう何度攻撃を受けたか思い出せないほど、紫の体はダメージを負つていた。

スキマの中にまで乱入してきた九狼に、萃香をかばいながら戦闘を続けてきた紫だったが、時間が経つごとに押されていった。

今では九狼の攻撃に抵抗すらできないほど消耗しており、九狼の完全なワンサイドゲームと化していた。

紫の右腕は本来では有り得ない方向にひしゃげ、見ているだけでも痛々しいほど青白く変色してしまっている。

けれど九狼は意にも介さない様子で、さらにもう一回紫へと追い打ちをかける。

苦しげに呻く紫の顔面に、思いつきり振りかぶった足で蹴りを叩きこむ。

グシャ、といつ耳を塞ぎたくなるような痛々しい音が無音のスキマ

の空間の中に響き渡り、九狼は歓喜の笑い声を上げる。

「紫つ！」

ようやく先ほど腹部に受けたダメージが回復し、戦線へと復帰する
萃香。

狂気に満ちた笑みを浮かべる九狼へと一気に詰め寄り、弾幕を撃た
せないよう九狼の両手を掴み、一人は取つ組み合いの状態になる。

「和真！ 一体どうしちゃったのさ！？ 確かに紫は私たちの敵だ
つた……でもここまでやるなんて、いつもの和真らしくないよ！」

相手の顔に唾をまき散らしながらも、必死に叫ぶ萃香。

「さつきから和真和真って……僕の名前は九狼だつて言つてるでし
ょーーー？」

自分の顔に降りかかる唾などお構いなしに、負けじと九狼も目の前
の鬼に叫ぶ。

しかしながら、流石の九狼も筋力では鬼の怪力に勝てないのか、じりじりと後方へと押されていく。

「馬鹿力だけが取り柄のバカ妖怪に、僕が負ける訳ない！」

目の前の萃香を睨みつけながら、九狼は妖力をその身に纏わせる。

「なつ！？」

九狼の妖力が一瞬跳ね上がったかと思うと、その体に変化が起つていた。

白髪の頭から生えるのは、萃香そっくりの一本の角。

鬼の誇りであり、絶対強者の証でもあるその角が、なぜ彼の頭に突如として出現したのか

しかし、彼に起こった変化はそれだけではない。

「ぐつ……！」

先ほどまで力で押していたはずの萃香が、今度は逆に九狼に押されてしまっている。

九狼の体から漲る怪力に、拮抗していたはずの萃香の両腕が悲鳴を上げる。

「どかーん！」

力負けした萃香の体が後ろにのけ反るや否や、九狼は勢いよく萃香の額に頭突きをきました。

「がつ……！」

何とも衝撃が萃香の体を襲い、背中から地面に叩きつけられると同時に目の前がチカチカと光るような感覚に襲われる。

「だから言つたでしょ。僕が負けるはずないもの」

仰向けて横たわる萃香の首を掴み、軽々とその体を空中へと持ち上げる。

「かはつ…………か…………かず、ま…………」

喉を掴まれて苦しげな表情を浮かべながらも、萃香は必死に田の前に居る想い人へと声をかける。

そんな萃香の様子を、九狼は忌々しげに見つめる。

「…………そんなにあの作り物がいいの一ー？」

「作り物…………とか、お前が何を言つているのか、私には……よく分からぬ…………。だけど私は……和真が、好き…………それだけさ…………！」

萃香の想いの詰まった叫びに、九狼の表情が歪む。

困惑から憎しみへ。憎しみから悲しみへ。

「…………みんなそうだ。みんな和真が好き。パパもママもお爺ちゃんも、みんなみんな和真和真和真和真つて、僕のことなんて誰も見てくれないーー！」

「が……はつ……」

癪癩を起した子供のように喚き散らす九狼。

それと同時に萃香の首に掛かる圧力が増す。

「……要らないよ。 和真も、和真が好きな人たちも。 みんな
らない、イラナイイラナイイラナイ!! みんな消えちゃえ!!!!
！」

九狼の右腕に高濃度の妖弾が形成される。
それは目の前に広がる全ての風景を、塵一つ残さず消し去つてしま
うほどの暴力の化身・

首を掴まれて宙に浮いたままの萃香には、それを避ける術がない。

鬼の角が生えたことによつて筋力が増大した九狼の腕から逃れるこ
とは、消耗しきつた萃香には到底不可能なことであった。

「くつ！ 萩香……！」

口から血を流して、美しかった頃の面影もないほど顔の形が歪んでしまっている紫が、それでも尚萩香を逃がそつと能力を発動しようとする。

しかし紫にも妖力は欠片も残つておらず、伸ばした腕の先にスキマが開かれるることは無い。

「ばいばい、鬼の妖怪さん。 次は“僕のことを好きでいてね”」

振りかぶった右腕の先にある妖弾が、萩香の顔面を粉碎しようと迫る。

和真……もう一度だけ、一緒におしゃべりしたかったな。

瞳を閉じ、大切な人のことを思い浮かべながら、萃香は連れられない死を覚悟した。

.....

しかし、これは嘘つきな男の物語である。

世の中の理不尽に嘘をつき、森羅万象の理に嘘をつくことこそが彼の“誇り”。

故に、鬼の少女の死などという真実は認めない。認めるわけにはいかない。

そう、嘘つきな男にとつても、少女は大切な存在なのだから。

「人の家族に何してやがるんだ？」九狼

聞き覚えのある声が萃香の耳に届く。

恐る恐る瞳を開けると、そこには目と鼻の先で止まる妖弾

を握りこんだ右腕。

そして、金色だった瞳が右目だけ、確かに黒色へと変貌していた。

黒色の瞳が映すのは愛おしいものを見るかのような優しげな色。

そう、それは間違いない国崎和真のものであった。

「一体どいままで僕の邪魔をすれば気が済むのかな

和真

憤怒の表情で顔を歪める九狼。

一つの口が、まるで大道芸でもしてくるかのように互に別の声色を放つ。

「邪魔？ 邪魔だと？ それならば言わせてもらひやつ。お前の存在のほうがよっぽど邪魔だ。糞つたれが」

「散々僕を閉じ込めておきながら、ひどい言い草だね。勝手に人の体を乗っ取つておきながら、本来の体の持ち主に邪魔だと言い放つか……あまり調子に乗らないでよ、作り物の人格の分際で」

「例え作り物だろうと、俺は確かにここに存在している。結局のところ、作り物とオリジナルにほとんど差なんて生じないのさ……それは俺を作ったお前が一番よく知っているだろ？　国崎九狼」

「憎たらしいほどよく分かっているよ。だからこそ、僕は僕という存在を賭して、君という存在を作ったのだからね。国崎和真」

二人は笑う。　ああ、なんと滑稽な話だらうか。

狂気に満ちて生れ落ちた少年は、その狂氣故に実の肉親さえも彼を畏怖し、遠ざけた。

そこで彼は、他者から自分という存在を認めてもらつために作り物の自分を作った。

作られた少年は、本来の自分が過ごすはずだった時間を傀儡として生きてきた。

少年は傀儡に、ただの道具としての価値しか認めていなかった。

だけど傀儡は自我を持ち、更には自分の守るべきものを見つけた。

故に一人は対立する。

お互に譲れないものがあるのだから。

これは決して正義か悪かの一択で論じられる問題ではない。

二人がその手に振りかざすものは、自分自身のためのただの我が儘なのだから。

「決着をつけよ。俺たちの、お互いの存在を賭けて」

嘘つきな男は告げる。

再び自分の大切な少女と共に生きる、幸せな日々を勝ち取るために。

「決着をつけよう。僕たちの、どちらの我が儘を通すのかを」

狂気に染まった少年は告げる。

傀儡を殺し、今度こそ自分自身の生を、自分自身の足で歩んでいくために。

二人の体から力が抜け、ガクリと膝を着く。

瞼が静かに落とされ、誰も知ることのできない、一人だけの決戦の場へと赴いた。

第十五回（後書き）

誤字・脱字等「お詫せ申します」。報生をお願いいたします。
「感想もござりますぬ寄せてください。」

登場人物紹介（前書き）

Fate風ステータスです。

あくまで、参考程度にお考えください。

登場人物紹介

国崎 和真 (Kazuma Kunisaki)

種族：人間／妖狼

ステータス

筋力：D

耐久：E

敏捷：D++

妖力：A

幸運：B

能力：A +

設定

本編の主人公。

“親しい人から嫌われたくない”という願望によつて国崎九狼が造つた人格。

一族代々から受け継がれる、【嘘をつかなければならぬ程度の呪い】を身に宿し、真実を口にするたびに激痛が体を襲う。

黒髪黒眼の典型的な日本人の姿であるが、人相がとても悪い。

そのため初対面の人から怖がられてしまうこともしばしばある。

詐欺師を嘗んでいたため、表面上は人とコミュニケーションを取ることは苦手ではない。

しかし素の自分を表に出すことがなかなか無かつたため、真正面から自分と向き合つてくる萃香に戸惑いと愛しさを感じている。

人間の体のため、妖怪と比べると力も無い上に打たれ弱い。

更には戦闘慣れしていないということもあって、本来出せるはずの実力をなかなか奮うことが出来ないでいる。

能力

【眞を嘘にする程度の能力】：A +

その名の通り、眞実を嘘へと変えてしまう能力である。

弾幕といった物質がそこに在ったという眞実を嘘へと変え、弾幕そのものを書き消すことが可能。

それ以外にも、妖力が在るといつ眞実を嘘へと変えたりとさまざまな用途が存在する。

呪い

【嘘をつかなければならぬ程度の呪い】：?

大妖怪にも劣らない和真の妖力を以つてしても打ち消すことのできない凶悪な呪い。

大昔に先祖が呪いつきの少年を喰らつたことにより、その身に少年と同じ呪いを宿した。

伊吹 萃香

(*S u i k a I b u k i*)

種族：鬼

ステータス

筋力：A+

耐久：B++

敏捷：B

妖力：A

幸運：D

能力：A +

設定

突然幻想郷の外にある和真が住んでいるマンションの一室に姿を現した鬼の妖怪。

小学低学年にしか思えない容姿をしているが、何百年もの齢を重ねた大妖怪である。

頭には長くねじれた2本の角が生えている。

「伊吹瓢」という瓢箪を持っており、この瓢箪は酒虫という少量の水を多量の酒に変える生物の体液が塗布されていることによって酒が無限に沸き出るようになつていて。

地上の人間に絶望して他の鬼たちと共に地底へと潜つたが、暇つぶしに幻想郷で異変を起こす。

その際、博麗の巫女やその仲間たちによつて退治され、その後は博麗神社でのんびりと過ごす生活を送つていた。

今ではその生活よりも和真と共に生きることを望んでいるらしいが、やはり酒は好きらしい。

能力

【密と疎を操る程度の能力】：A +

あらゆるもの の密度を自在に操る能力である。物質の密度を高めればそれは高熱を帶び、逆に密度を下げれば物質は霧状になる。体を霧状にすることも可能で、このとき相手は全く手出し出来ない状態になり、一方的に戦う事が可能となるが、本人曰く戦闘においてその使い方は卑怯とのこと。

国崎 九狼 (Kuro Kunisaki)

種族：天狼

ステータス

筋力：B

耐久：D++

敏捷：C

妖力：A+

幸運：D

能力：A++

設定

生れ落ちた時から狂気に満ち溢れた忌み子。

肉親からも畏怖され、壊れそうになつた自分の精神を守るために国崎和真という人格を作り、自分は心の奥に閉じこもつた。

そのため精神年齢は幼い子供と一緒にくらいである。

和真が一度死んだことによつて再びその人格を現し、消耗しているとはいえ八雲紫と伊吹萃香の二人を圧倒した。

能力

【うそまこと嘘を真にする程度の能力】 · A ++

本編ではスキマの中を逃走する紫と萃香を追いかけるために、“自分もスキマに入る”という嘘をついた。

更には伊吹萃香に力負けしそうになつた際、この能力を使って“自分も鬼である”という嘘を真に変え、筋力を増大させた。

以上のことから分かる通り、ある一定の制限を除いて、ほとんどの事象を無から有へと具現化する恐ろしい能力である。

第十二話（前書き）

急ピッチで仕上げました！
遅くなり申し訳ありませんへへ

第十二話

白と黒の弾幕が辺り一面に広がり、互いにぶつかり合って爆発しながら消滅する。

膨大なエネルギーを秘めた弾幕同士の爆発の威力は恐ろしいものであつた。

爆発による熱風の嵐の中を疾走する一つの影があつた。途切れることなく弾幕を放ちながら、距離が縮まれば肉弾戦へと移行する。

拮抗した勝負に思われたが、徐々に黒色の人影のほうが押され始めていた。

「くつ……！」

黒色のスーツ服を纏つた青年が苦しげに声を漏らす。

人狼　　国崎和真は、不利な状況にあっても尚、その闘志を失うこととは無く目の前の相手を睨みつけている。

「あはははは！」

和真に対峙する白のスーツ服を纏つた白髪の少年は狂った笑い声を上げながら白色の弾幕を放ち続ける。

天狼　　国崎九狼は、ただただ目の前の弱者を蹂躪することしか考えていない。

当然だ。そもそもそれ以外に考える必要がないのだから。

「Jの……野郎があ！」

和真は自分に迫りくる弾幕を己が能力を以つて消滅させる。

そしてすぐに九狼との距離を詰めようと足に力を入れるが、先ほどまでそこに居たはずの九狼の姿はそこにはなかつた。

「なつ……ー？」

「ビ」見てるのぞ

一瞬で和真の背後へと移動していた九狼が、にやりと口元を歪める。まったく以つて無防備な状況　　人間の体の和真が一度でも攻撃を喰らえばその時点でゲームセットになるのは間違いないだろう。九狼は自分の勝利を確信し、大きく勢いをつけた回し蹴りを和真の体へと放つた。

いきなり背後から放たれた強烈な蹴りで和真の体が吹き飛ばされるはずだつた。

しかし咄嗟に発動した和真の能力により九狼の不意打ちは失敗し、勢いを殺しきれなかつた九狼の体は大きくバランスを崩した。和真の体が蜃気楼のように霞へと変わり、空気中へと霧散していつた。

「お前の攻撃は“当たらない”」

「　　ツ！？」

足元から聞こえてきた和真の声に息を飲む。
見ると、腰を低く落とした体勢でしゃがみ込み、拳を握りしめる和真の姿が在つた。

「まずは……一発だ！」

勢いよく跳躍し、九狼の顔面めがけて拳を振る。

九狼が超人的な反射神経で咄嗟に両腕を顔の前で交差させガードするが、当たり所が悪かったのか、ガードした右腕から骨が折れる音がはつきりと九狼の耳に届く。

「死ねつ……！」

痛みに顔を顰めながらも、咄嗟に左手から放った弾幕が和真の命を奪おうと迫る。

しかしその弾幕も、和真の能力によって無効化される……はずであった。

「何度も同じ手が通用すると思つな！」

九狼の能力によって、和真の能力で消滅しかかっていた弾幕が再びその力を取り戻す。

弾幕という存在が和真によって“嘘”へと変えられ、更にその事実を上書きするかのように九狼によって“真”へと変えられる。

つまりは　　今和真の目の前にある弾幕は、和真の命を容易く奪つてしまつシロモノだということだ。

「くそ……！」

力いっぱい体を動かし、なんとか迫りくる弾幕の軌道から自分の体を回避させようとした和真だったが、直撃こそ避けたものの、左肩に掠つた弾幕によつてその部分に大火傷を負う。

「があつ……！..」

脳を揺さぶられるような激痛に目の前がチカチカと光るが、唇を噛みしめてどうにか意識を失わないように努める。

もはや使い物になりそうにない左腕に早々に見切りをつけ、右拳を握りしめながら九狼に向かつて駆ける。

「来い、和真！　お前の物語に幕引きをしてやるひつー。」

「抜かせこの引きこもり野郎が。俺の物語はここから始める……お前の都合で勝手に終わらせてやりなんかしない！」

白と黒の妖力の塊が真正面から衝突し、辺りは眩い光に包まれた。

あれからどのくらいの時間が経つただろつか。

和真はもぢりんのこと、あらゆる面で和真に勝っているはずの九狼でさえも、わずかな妖力すら残つていなかつた。

決して九狼が油断していたというわけではないのに彼がここまで苦戦を強いられているというのは、和真の願う渴望が彼のそれを上回つていたからに他ならない。

肉親からも拒絶され、一度は深い奈落の底にその身を落としたが、

今度こそ己が人生を他ならぬ自分の足で歩みたいという九狼の渴望。

そして永い年月を嘘をつき続けることに費やした嘘つきの男が、ようやく出会った心のそこから守りたいと思える少女とのまだ見ぬ毎日を願う和真の渴望。

一つの渴望が真正面から衝突し、そして今なおその決着はつくことを知らない。

それは至極当たり前のことであろう。その渴望は一人にとってすでに自分にとつてのアイデンティティといつものに他ならないのだから。

和真是静かに、そしてはつきりと田の前に対峙する「」の壁……もう一人の自分を見据える。

その目に映る九狼からは、満身創痍の身でありながらも未だに霸気とこうものが消えてはいない。

計らずとも、自分も同じように映つていてあらうが。

左腕はもはや使い物にはならないことは重々承知の上である。また、なんとか動かせる右腕に至つてもうまく力を込めるとはできなくなっていた。

……しかし、それが何だというのだ。

動かせないならば動かせるようにすればいい。力が入らないのなら

ば無理やつにでも込めてやればいい。

不条理？理不尽？そんなものは既に 食い飽きている。

今自分が求めているのはそんな陳腐な味ではなく、愛しい鬼の少女とのまだ見ぬ輝かしい日常でこそ得られる暖かな味なのだから。

故に勝利を。この貧弱な人間の身に墮ちた嘔吐きの男に女神の祝福を。

嘔つきは駆ける。自分と対峙する敵に向かって？いや、違うだろう。そんなものは彼の 眼中にはない。

彼が目指すのは、自分を待つ小さな鬼の少女の居る場所のみ。

その道の途中で自分を阻む邪魔な壁を粉砕するためだけに嘔吐きな男は拳を振るう。

この刹那に、自分に残されたすべての力を拳に乗せて

この戦いはここで、幕を下ろした

。

第十二話（後書き）

次辺りで第一章エピローグかと思われます。

Hピローグ（前書き）

思えば遠くまで来たものだと、今更になつて思います。

ついに、ついに……第一章Hピローグです！

みなさまに応援され続けて、ここまで頑張つて来れました！
お気に入りも100件突破しました！

本当にありがとうございます！

s i d e : 和真

荒い息をどうにか落ち着かせながら、今日の前で仰向けに横たわる九郎の体を見やる。

すでにその存在を維持する力も失われ始めているのだらう。光の粒子が体から漏れ始め、少しづつ透明になっていく。

俺が放った拳は、何にも遮られることなく九狼の顔面に見事にヒットした。

俺に残された力のすべてを乗せた一撃とはいえ、所詮は人間の貧弱な拳一つ、妖怪である九狼にとつては避けることなど容易かつただろう。

それなのにこいつは、拳を避ける動作など一切見せずにただ目をしつかりと見開いたまま俺の拳をその体で受けた。

「どうして、避けなかつた」

消え入るような声で、呟く。

分からぬ。

「……こいつはそんな馬鹿な真似をやつてのけたのだろう。

「この一撃を喰らえばいに九狼とはいえ、致命傷となることは分かつていたはずなのに。」

その身に宿す渴望は何物にも代えられないはずなのに、九狼は憎たらしい表情の一つも見せず無表情で真っ白な空間を見上げている。

「僕にもよく分からぬよ。……でも、避けたらいけないような気がしたんだ」

「……ふざけてるのか？　お前は生きたかったはずだ。俺という存在を消して、体を取り戻す必要があったはずだろ？……なんで自分の身を滅ぼすような真似を」

「確かに、僕は生きたかった。一度と謳歌できないと諦めていた人生が、君が死んだことによって手の届くものになった。そんなチャンスを逃すと思っていたのかい？」

「だからシ！　それならばなぜ「でもそれは所詮僕だけの願いなんだよ」……なにを、言っている？」

「これは僕と和真の我が儘のぶつかり合いだった。自分の我が儘

のためにもう一人の自分をその手で消す……そのため僕らは戦っていた。いや、そう勘違いしていたんだ」

「勘違い……だと？」

呆けた表情の俺を見て、九狼は小さく喉を鳴らす。

実際に愉快だ、実際に滑稽だと。でもそれは相手を侮辱する言葉ではないかった。

それは、この結末が訪れたことにに対する喜びの言葉。

「君の願いは、君だけのものじゃなかつたんだよ

そう、和真の願いは萃香と共に生きること
香にとっての願いである。

己一人のちっぽけな渴望が、幸福な毎日をただ無垢なまでに願う一人分の渴望に叶うはずがなかつたのだ。

九狼は見てしまったのだ。拳を唸らせて迫る和真の背後に、彼を慕う鬼の少女の影を。

「正直、君たちが羨ましい。互いに愛し愛され、互いを信じ合ひ
君たちの関係というものは僕が嫉妬して止まないものだ」

「それなら、なおさら

「君は、僕だ。もう一人の僕自身だ。なればこそ、君の幸福は
僕自身の幸福もある。……そのことによく気が付いた。
だから、もう思い残すことはないよ」

そう言って九狼は、いつもの狂気に満ちた笑みではなく
相応の、純粋な笑みを浮かべた。

九狼の体から漏れ出した光の粒子が宙へと溶けていく。
九狼に残された時間は、もう幾何もないだろう。

「ああ、でもやっぱり、死ぬのは怖いな。ねえ和真……僕は何の
ために生まれてきたのかな」

その問いに答えるべき言葉を、俺は持っていない。

いや、持つてはいけないのだ。

本当は言つてやりたい。お前には生まれてきた理由がちやんとあった。

お前のおかげで俺は今ここにいる。お前のおかげで萃香と出合つことが出来た、と。

けれど 田の前で消えつゝあるこの少年の人生そのものを、嘘つきの男の口から放たれた下品な言葉で汚してはいけない。

「ああな。自分で考えたらどうだ？ 生憎、こちとらガキのお守りは一人で精いっぱいなんだ。お前のことまで構つてられねえよ」

吐き捨てるよつて言つた俺の言葉に、九狼はそれでも満足そうに頷く。

「そつか、そうだね。ふふ……君のその無愛想な部分は僕も気に入ってるけど、彼女にもそんな態度ばっかり取つてたら、いつか嫌われちゃうよ？」

「うせーよ。引きこもりのガキここまで心配されるほど落ちぶれちやこねえぞ」

「あははは！ 人付き合いが何よりも苦手なコミュ力不足の社会不適合者には言われたくないなあ」

互いに軽く毒づきながら、笑いあう。

思えば生まれてからこの方、誰よりも近い位置に居た一人だというのに、こうやって話すことなどめったに無かつた。

狂気に満ちていた少年は思つ。

どうして氣づかなかつたのだろう。自分を愛してくれる存在が、こんなにも近くに居たのに」と。

「………… そろそろ、お別れだね」

「………… ああ。後は俺に任せて、ゆっくり休んでくれ」

「これまで君にずっと任せっきりだつたけどね。………… さて、君と鬼の少女の物語には無粋な輩は必要ないみたいだ。よつて消えよう、僕たちを戒め続けてきた呪いと共に」

九狼の体がより一層の輝きを放つ。

その身に残されたすべての力と、わずかに残った自分という存在を媒体にし、呪いを断ち切る。

自分が認めた二人の未来に、いけ好かない不純物など残してやるものか。

それは忘却の彼方へと葬り去られたはずの天狼としての誇り。

遙か昔から、神の使いとして数多の魔をその牙で断罪してきた、正義の心。

その輝きはこの世のものとは思えないほどに神々しくて、和真の目には、それが天使の翼のように映つた。

「またね、和真」

「……ああ、またな」

光に包まれた九狼の体が、宙へと霧散して、消えた。

・・・・・

暖かな温もりに包まれながら、ゆっくりと瞼を開く。

まず初めに目に映ったのは、涙で目を真っ赤に腫らした愛しい少女の顔。

身長差があるはずの自分が、何故か自分より背の低い少女を見上げているという状況と、後頭部に柔らかな感触を感じて、彼女に膝枕をされていたのだと理解する。

どう声をかけようか 微かな時間、頭の中で考えてみたものの、改めて自分らしくないと内心で小さく苦笑する。

かわいの少女に嘘をつく必要などないのだ、だから今は

「おかえりっ、和真！」

「…ただいま、萃香」

彼女の笑みに、自分も満面の笑みを以つて応え、「ここにしそうではないか。

「……ほん……そろそろここかしら？」

しばらくの間見つめ合っていた俺たちに、気まずそうにかけられた声で一人して慌てて立ちあがって振り返る。

そこには、先日遊園地で会った藍と名乗る女性に肩を支えられている紫の姿が在った。

俺と九狼が精神世界へ潜る直前に見た彼女の有様は、なんともひどいものだったが、腫れ上がっていたはずの顔は以前と変わらぬ美しいものに戻つており、ひしゃげていた腕も元通りになっていた。おそらく駆けつけてきた藍に治癒してもらつたのだろう。

すでに傷は見当たらないが、体力はそれなりに消費しているようで一人では立てないようだった。

それでも俺を一度死へと追いやった紫の能力は危険だ。

体を半歩前に出し、応戦の構えを取る。

「ちょっと待ちなさい！ 流石にもう戦いつもりなんてないわよ！」

すると紫は慌てたように手を顔の前でぱたぱたと振り、敵対の意が自分には無いことを伝える。

「……信用できないな。例えお前にはなくとも、横に居るキツネ耳生やしたねーちゃんは無茶苦茶ガン飛ばしてくるんだが」

そう、俺が田を覚ました時からずっと藍から親の仇のように睨まれていた。

「……まあ主人がこんな田にあつたんだ。恨まない方がどうかしてるだろ？」

「……はあ。藍、あなたの氣持ちは嬉しいけど、ここは抑えなさい」

「ですが紫様！？」

「聞えなかつたかしら？ 私は抑えろと言つたのよ」

「ツ……！ 申し訳、ありません……っ」

渋々といった表情で引き下がる藍

紫は小さくため息をついて、再び俺たちに田を向けた。

「私の式が失礼しましたわ。それで、あなたに話があるのだけれど」

「……生憎といひからず話すことなんて何もないんだがな

「まあそりゃ仰らぎに。何事にも寛容な器の大きさがないと、その程度の男だと思われるわよ?」

「……こいつは人をおちよくつているのだろうか。

本当に話を聞かずに帰るうが、と思つたものの、今現在スキマの中に居る俺たちがここから出る術はない。

「九狼なら小指一本で家までの道を開けるだろうが。

「あまり時間もないし、率直に言いますわ。
国崎和真、
幻想郷へ来る気はないかしら?」

「……なに?」

紫から告げられた言葉にしばし思考する。

別に元の世界に未練があるといつわけではない。詐欺師は廃業した
し、そもそもやる必要もなくなつた。

それに萃香が一緒にいる、別にどうでも暮らしていく。

……我ながら信じられないほど萃香に依存してしまっているな。

何ともいえない表情で眉を潜める俺を見て、「クンと小首を傾げて「どうしたの?」と尋ねる萃香。

嘘はつかないと決めたが、こんなことを正直に言つてしまえば俺の中の大事な何かが壊れてしまう。

「なんでもねえよ」と小声で返事をし、改めて紫に向かって直る。

「一体どうこう風の吹き回しなんだ? セツセツまでは俺を殺そうとしてきた奴が、今度は自分の住む場所に誘おうだなんて、頭狂つてるようにしか思えねえよ」

「……こちらにも色々と事情があつたのよ。でも戦つてみて確信したわ。あなたの力はこれから幻想郷にとって必要不可欠なものであるとね」

さて、どうしようか。

萃香にどうしては何のデメリットもない話だ。元居た場所に帰るだけなのだし、俺の世界に居るよりも同じ妖怪が居る幻想郷に居たほうが気が楽だらう。

俺にひとつ同じ。何度も同じことを言つよつだが、萃香さえ居ればどいつも構わない。

通帳に入っていた財産も、元はと言えば詐欺で稼いだ汚い金だ。そんなものこれから飯を食つていこうとは到底思えない。

「萃香は、じつ思つ？」

だから俺は、自分の隣で話を聞いていた萃香に決断を委ねることにした。

「……和真も一緒に、私は帰りたいな。仲のいい奴らも居たし、和真のことも紹介したいからね！」

そう言って手をぎゅっと握りしめてくる萃香。

「この手の平から伝わる体温を、今度こそ手放さないと誓おう。

九狼からも散々お膳立てされたんだ。ここで行かなきゃ男が廃る。

「……行こつ、幻想郷に。萃香がそれを望むなのならば」

しつかりと紫の田を見据えて告げる。

「ふふっ、よつこわ幻想郷へ。 幻想郷は全てを受け入れますわ」

上品に口元を手で押さえながら、小さく笑う紫。

そして俺たちの背後に、ちょうど一人分通り抜けられそうなスキマが開く。

このスキマの先にある世界で、俺たちの新しい生活が始まるのだ。

そう思ひつと、年甲斐もなく妙にテンションが上がつてくるのを感じた。

萃香の手をしつかりと繋ぎ直し、小さく一步を踏み出す。

萃香の歩幅に合わせて、ゆっくりと、けれど確実に。

俺たちは、幻想の世界へと足を踏み入れた。

side・紫

「……本当によかつたのですか？ 紫様」

私の式からかけられた声に、肯定の意を以つて応える。

「もちろんよ。あの男からの情報も、案外捨てたものじやなかつたつてことね」

そう、伊吹萃香が幻想郷から消えたあの日。

私はある男に、伊吹萃香の居場所と、彼女と共に居るであろう男の情報を受け取ったのだ。

なんとも胡散臭い男ではあつたものの、彼に纏わる逸話は嫌というほど聞いている。

大昔から存在する大妖怪の一柱。

その中でも抜きんでた力を誇る最強の中の最強。

その筋からの情報だ、無下にするわけにもいくまい。

「けれど、今この時期に新たな外来人を幻想郷へ呼び込むのは紫様も反対なさっていたはずでは……」

そう、それが国崎和真を殺そつとした一番の理由。

今幻想郷は、侵略を受けている。

比喩でもなんでもなく、そのままの意味だ。

創立以来、外敵からの攻撃を一度も受けたことのなかつた幻想郷が今、未曾有の危機を迎えている。

幻想郷を覆っていた博麗大結界の一部が破壊され、そこから外敵の侵入を許している。

現状では私と藍の2人でなんとか対処できているけれど、それも限界が近い。

いずれ幻想郷中の戦力を集めて全面戦争をしなければならなくなるでしょうね。

故に今、素性の知れない……しかも能力持ちという外来人を何がつても幻想郷に入れないとつもりでいた。

そいつが今回の幻想郷侵略にどんな繋がりを持つているのか分からぬからだ。

けれど

「彼が伊吹萃香のこと以外目にならってことは、戦つてみてよく理解できたわ。ならばその甘さを、今は利用させてもらつことにしましょう。……戦力は、少しでも欲しいもの」

そう、彼は伊吹萃香と共に生きることを望んでいた。

それこそ幻想郷でなくとも構わない。彼が元居た世界でも構わなかつたのだ。

そこから考えひるて、彼が今回の異変に関わっている可能性は零に等しい。

「……ここからが、正念場ね」

眉を潜めながら、ほつりと呟く。

私の愛しい幻想を守るためならば、この身がどうなろうと構わない。

けれど今回の相手は、未だにその実態を明かさない未知の敵
ただ、博麗大結界を破ったことから想像を絶する強さを誇つてい
るであろうことは容易く理解できる。

正直、私と藍が一人で戦つても勝てるかどうか分からぬ。

なればこそ、使える駒は全て使いましょう。

全ては、私の愛する我が子たちのために

Hプローグ（後書き）

次回からは幻想郷編です。
更新までに時間が空いてしまうかもしだれませんが、ご容赦ください。
ご意見・ご感想お待ちしております！

幕間・幻想に忍び寄る魔の手（前書き）

更新遅くなりました。すみません。
お気に入りが111件突破しました。
わお、ピンゾロですね。

幕間・幻想に忍び寄る魔の手

幻想と現実の狭間にある誰も知らない空間に、ひつそりと佇む大きな屋敷。

西洋屋敷のような外見をしているそれは、美しくありながらも何人たりとも寄せ付けない威圧感を漂わせていた。

その屋敷の一室……いや、ホールと言つべきか。高い天井には豪華なシャンデリアが飾られているが、ところどころに蜘蛛の糸が張つており、それが長年手入れされていないことが分かる。

暗闇に包まれたホールを照らす明かりは、窓から差し込む月明かりと、申し訳程度に設置されたロウソクから漏れる淡い光だけだった。

百人は裕に入れそうなホールだが、そこにある人影はたったの四つのみ。

しかしその四人の一人一人が万の軍勢にも勝るほどの膨大な妖力を持つ猛者たちであることは、並みの妖怪でも理解できるだろう。

古ぼけた黒いローブに身を包み、長く伸ばした黒髪に目の人下にある隈がなんとも不健康さを漂わせている少女が、小さく口を開く。

「……博麗結界の一部を破壊することに成功。私の兵たちを少數送り込んだものの、八雲紫によつて全て撃破された模様」

淡々と告げたかに見えた少女だったが、その声色に含まれている感情は微かな怒り。

自分の愛すべき兵たちを、下種な妖怪如きに葬り去られたことによる遺憾の念。

そんな少女の様子を感じ取つたのか、奇抜な服装をした金色の髪を逆立てた長身の青年が割り込む。

「けつ、まあ仕方ないさ。腐つてもスキマ妖怪…最強の妖怪と畏怖され続けてきた存在だ。お前の人形如きじや、せいぜいスタンナを浪費させるのが精いっぱいどころだらうよ」

「……喧嘩売つてるなら、買ひ」

静かに睨みつける黒髪の少女に、金髪の青年は嘲笑で返す。

「お~お~、冗談はよせよ。戦闘能力だけで見ればお前は」の中
じや最弱だ。無駄に命を散らすだけだぜ?」

「……やつてみないと分からぬ」

少女がその身に妖氣を宿らせる。何らかの能力を発動しようとする合図であろう。

それに気付いた青年もまた、両の掌に妖力を集中させる。

この一人から漏れる妖氣は尋常なものではない。
ここで戦闘が始まってしまえば、この屋敷はいつも容易く崩壊してしまうだろう。

今ここに、絶対強者の一人による決闘が始まろうとした、その時

「　　お一方、そこまでござる。今は御前でござるべく、控
えられよ」

一触即発の雰囲気を、和服のよつたものに身を包み黒髪を後頭部で纏めた、いかにも侍といった風貌の男が制す。

腰に添えられた一本の日本刀からは、尋常ではない妖氣と濃厚な血の匂い。

そして獲物を決して逃がさない鷹のよつた目つきからも、この男がかなりの兵であることが伺える。

「なんだ武蔵？ 邪魔するつていうなら、お前であつても容赦しねーぜ」

「……別に私は武蔵がどつなるつとどもこ。 あの人さえ居れば、私は……」

対峙していた二人から、濃密度の殺氣をぶつけられる。

並みの人間ならそれだけで心臓発作を起しそうなものだが、武蔵と呼ばれた侍風の男はそよ風でも浴びるよに表情を微塵も変えない。

「実力行使も止む無しでござるな。 致し方ない……少し眠ついていただきましょ」

武蔵が腰に添えられた一本の刀に手を伸ばし、その刀身を鞘から抜き出そうとしたその時、低い男の声がホールに響き渡った。

「 なにをしている…絆、時臣、武蔵。 仲間内で争つてい
る場合ではないだろ」

その声が届いた時、三人の背筋に冷たいものが走る。

そして自分の意志とは無関係に自然と震えだす体を、それでも益荒男としての意地で押さえながら、彼らの主へと頭を垂れる。

彼ら三人は決して弱い存在ではない。

一騎当千、一人一人が万の軍勢にも勝る……本物の怪物たち。

その彼らが忠誠を誓う人物こそが、この屋敷の主。

「申し訳ございませぬ、我が主。拙者、この馬鹿者共がいやいやぞを始めた為、鎮圧しようとしていた次第にござる」

武蔵は頭を深く下げたまま、田の前の主から発せられるこの場にいる全員とも比べ物にならないほどの威圧感を堪える。

「その話は本当か？」

武蔵から視線を外し、頭を垂れる一人へと田を向ける。

「……私の兵を、侮辱されたので」

「俺は使えない物を使えないと言つただけですよ、主」

言葉こそ発しているものの、絆と時臣の二人の額には大粒の汗がにじみ出でていた。

もう数えるのも億劫になるほど年月をこの方と一緒に歩いているところに、ああ、勝てない。どう足搔いてもこの方には絶対に勝てないと、本能から理解してしまう。

「 面を上げる」

その言葉に、さつと顔を上げる二人。

そして今一度自分たちの主の顔をしかとその胸に焼き付ける。

血に染まつたような真紅の髪。もう長く散髪などしていなか、伸びきった髪は肩まで届き、前髪はその顔のほぼ全てを覆い隠している。

しかしながらその髪の間から時折見える肌は、古来より忌み嫌われた異民族と同じ褐色の肌。

更には、見る者すべてを畏怖させる黄金の瞳。

そしてその身に纏つのは、もう本来どんな服であつたかもわからな
いほどボロボロになつた黒い布きれ。

まるで浮浪者のそつた風貌だが、この男には益荒男たちを屈服させ
る確かな力がある。

三人から主と呼ばれた男は、このホールに集つた三人の顔をさつと
見渡し、さまざまな感情が籠つてゐるであらう声で呟いた。

「 とうとう、この時が来た」

瞼を静かに瞑り、男は己が人生を振り返る。

永かつた。本当に。

いつたいこの日のためにどれだけの血を我が身に浴び、どれだけの
者たちの命を踏みにじつてきただらう。

だが、全ては“彼女”のために。

「これより、幻想郷を 征服する」

絆はその瞳に熱き炎を燃やす。

自分が全てを捧げた主のために、この身が朽ちても主の願いを叶えたい。

遥か邪馬台国の時代から孤独だった少女は、その“絆”を決して手放さないと誓う。

時臣はその身を歡喜で震わせる。

よつやく自分の全力を出すことのできる機会がやつてきたのだ。

数多の時代を旅してきた青年は、よつやく自分が歩むことの出来る“時”を見つけた。

武蔵は両脇の刀の鞘をそつと撫でる。

人間だった自分が、惨めに死ぬはずだった運命を変えてくれた我が主。

我が刀を、我が命を、全て主に捧げよ!。

そして、男……『血濡れ』は、愛する“彼女”の元へ

「幻想の里には数多の血が流れる」とになるだらけ。しかし、これは決して侵略というな悪の行為ではない……“彼女”的の、聖戦だ」

そう、全ては“彼女”的の戦である。

女神の楽園に蔓延る塵芥共を駆逐するのが我らの役目。

さあ、穢れに満ちた土地を、そこに住まつたものの血で洗い流そう。

今ここに、天下無双の獣たちが開戦の雄叫びを上げた。

幕間・幻想に忍び寄る魔の手（後書き）

「J意見・「J感想おきかせください。」

プロローグ（前書き）

やつと書きたかった日常編が書けた！
これからじめらへのーんびり進みます。

プロローグ

少女の細く美しい指が、獲物の腹の中を蹂躪する。

その手が獲物の血で真っ赤に染まっているが、少女は気にした様子もなく、それどころかどこか愉しげな笑みまで浮かべている。

そして少女は、獲物の腹から臓物を一気に引っ張りだし、明かりの下へとそれを晒す。

獲物は抵抗する素振りさえ見せない。当然だ。彼はもうすでに事切れてしまっているのだから。

少女は淡々と臓物を引きずり出す作業に没頭する。紅色の臓物が光を反射し、淡い光を醸し出していた。

幼さが残る少女が臓物でその手を汚していく光景は獵奇的で、それでいて何かの儀式のような神聖さを醸し出していた。

躊躇する素振りなど一切見せずに、どんどん獲物の臓物が明かりの元へと晒されていく。

少女の手が、止まる。

取り出すべき臓物が切れたのだ。

獲物の腹の中に臓物が残つていなければ分かると、少女は嬉々とした表情で声を上げるのだった。

「和真ー！ 魚の内臓全部取つたよー！」

花柄のエプロンを着た鬼の少女が、居間で茶をすすつていた男に声をかけた。

「……ん。 怪我とかしなかつたか？」

「もう何回包丁握つてると思つてゐるのさ。 」のくらい朝飯前だよ

「指が絆創膏だらけのくせによく言つな

あはは、と苦笑いを浮かべる鬼の少女 伊吹萃香の指には、大量の絆創膏が貼られていた。

そんな萃香の様子を見て、人間……いや、人狼の男 やれやれと小さくため息をつく。 国崎和真は

萃香と和真が幻想郷へやつて来てから、すでに1ヶ月の月日が流れていた。

人里に小さな家を借り、一人で生活をしている。

初めは妖怪の山にある萃香の家に住もうという話だったのだが、あのスキマ妖怪がご丁寧にも人里に家を準備してくれていたので、せっかくの好意を無下にするわけにもいかず、渋る萃香をなんとか宥めて人里で生活を送っているわけである。

とまあはじめの頃は色々とハプニングがあつたものの、住めば都と言つように入里に暮らす村人たちは余所者である和真と、畏怖すべき妖怪であるはずの萃香の二人に親しみを持つて接してくれていた。萃香については前から博靈の巫女と友人関係にあつたという事実を村人の多くが知つており、恐ろしい鬼というよりも可愛らしい少女という印象のほうが強かつたらしい。

半妖の和真に至つては、村に慧音……ワーハクタクの女性という前例があつたためか、何の御咎めもなしに人里に住むことに許可が出た。

慧音には人里に住むにあたつて様々なことでお世話になつたので、今では一人して頭が上がらない。

自分よりも遥か上位に存在するはずの萃香から頭を下げられていた

時の慧音は、見てる「ひらが心配にならぬほどの慌て様だった。

それはさて置き。

人里に住み始めてから数日もしないうちに、萃香が自分が朝食を作りたいと言い出した。

和真も、萃香に家事を教える良い機会だと結論付け、一つ返事で了承したのだが…

「の少女、とてもなく不器用であった。

包丁を握れば食材ではなく自らの指を切りつけ、ようやくのこと切り終えた食材をフライパン? なにそれおいしいの? の要領で火に

直接放り込む。

これには流石に和真が待つたを掛け、急遽和真のパーフェクトお料理教室が開かれることになったのは記憶に新しい。

今ではようやく一人で台所を任せることができるようになったものの、時折聞こえてくる料理とはまったく関係がないであろう破壊音に、和真の胃はストレスで悲鳴をあげ始めていた。

「今からお魚さん焼くから、もう少し待っててね」

「あ、ああ……。萃香、飯の味はこの際気にしないから、なるべく安全に頼むぞ」

「え？ 料理するだけなのに危ないことなんて何もないよ？ 変な和真だねー」

「ここにこと笑う萃香の様子からは、確かに何の心配もないよう伺える。

しかし今こいつして萃香と会話している最中にも絶え間なく聞こえてくる破裂音に、和真は自分の顔がひきつるのを感じていた。

その後しばらくして、居間にあるちゃぶ台の上には食欲をそそられる良い香りを発する今が旬の焼き魚と、近所の村人から分けてもらった野菜を使った漬物に、湯気を上げる味噌汁に白い飯と日本人らしい朝食が並んでいた。

和真が恐る恐る焼き魚に箸を伸ばしてその白い身を口に運ぶと、そのとたん溢れ出す脂と仄かな甘みが口の中に広がる。

（味は申し分ないのだが……）

田の前に並ぶ料理の数々が、あの轟音の中で作られたものであることを誰が理解出来るだらうか。

「えっと……その…………美味しい、なかつた？」めんね、私つて和真と違つて料理下手つぴだから……無理して食べててくれなくてもいいんだよ」

難しい顔をして田の前の焼き魚を睨み付けるようにして見つめる和真を見て、萃香は不安そうに顔を俯かせる。

「いや、いい。いいぞ、お世辞じゃないからな」

慌てて箸を動かし、田にもとまじめ速さでどんどん料理を口に運んでいく。

そして未だ不安そうな顔をしている萃香に向けて微笑みかけると、萃香はよつやくほつとしたよつこ息を吐き、自分も料理に箸を伸ばし始めた。

「萃香、」飯粒ついてるわ

「へへ～ううう～? むー、和真、取つて～

「..... ぱぱよ」

「えへへへ」

「..... へうへうせすじみつれと食べ糞ガキ」

朝食の後片付けが終わると、和真は寝間着からスーツへと着替える。

そしてその上から 猫さん模様のエプロンを着用した。

別に今から更に何かを作つて食べようとしているわけではない。

エプロン姿の和真は居間を出ると、古ぼけた廊下を進む。

随分前に建てられた家だったのだらう。歩を進めるたびにギシギシと床の板が音をたてる。

住み始めたころは床が抜け落ちてしまうのではないかと気になっていたが、1ヶ月も住んでいれば流石に慣れてくる。

今では足に合わせてリズミカルに鳴り響くこの音に、和真是妙な愛着まで湧いていた。

そのまま歩みを進めると、一際大きな部屋へと到着する。

外の明かりを一切閉ざしているためか、その部屋の中は真っ暗闇に包まれていた。

暗がりの中を手探りで進み、目的のスイッチを押す。

すると瞬く間に明かりが灯り、真っ暗だった部屋の全貌が明らかになつた。

大人が数十人は入れそうな大きな部屋。

和真と萃香が暮らす家の面積の大部分をこの部屋が占めていた。

数台の四人用テーブルが丁寧に並べられ、その上に丸い形状の椅子が4つずつ置かれている。

奥には大きめな厨房があり、鍋や食器がこれまた丁寧に保管されている。

和真が全てのテーブルの上からイスを下げて居る間に、遅れてきた萃香が厨房に掛けられていた布巾を汲み置きしていた水で濡らし、テーブルの上をせつせと拭いている。

簞で床を軽く掃き、あらかたの準備を整えたところで入り口に降りていたシャッターを持ち上げる。

すると朝日が部屋の中に差し込み、思わず和真は目を細める。

小さく深呼吸をして、後ろに控える萃香を見やる。

「仕入れは済んでたよな？」

「うん、今朝早くに田代さんのところの駄菓子屋さんが運んできたよ。冷蔵庫の中に入ってると思わ」

幻想郷には電気が通っていないため、家電品を動かすことは通常では不可能である。

しかしそこは和真の能力が活かれるところのもの。

『電気など要らない』と嘘をつくことによつて、冷蔵庫は電気いらずで通常通りしっかりと作動していた。

まさに悲劇の匂であった。

萃香のその言葉に頷き、和真は氣を引き締める。

今日はなんだかいつもより、忙しくなりそうな予感がしていた。

「

国崎料理店、今口も営業開始だ」

プロローグ（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

第一話（前書き）

遅くなつて申し訳ありません！

今回は妖夢視点なので、和真と萃香のいづやいづや展開は入れれませんでした…

それに加えてどんどん和真が萃香し〇〇ドで壊れてきてします。

でも恋つてのは、人を狂わせるものだぜー…

もう少しでコニーク10000達成しそう……
その暁には何かお礼としておまけみたいなのが書きたいこと思つてします。

なので和真や萃香、もしくは作者に何か聞きたことなどあれば感想板かメッセージでどんどん書いてください。

大喜利のような形で載せたいと思います。

第一話

side : 妖夢

「ふう……」

白玉楼のお掃除をやり終え、小さく息を吐く。

思いの外時間がかかってしまったようで、気がつけばもうお昼時。家事が苦手というわけではないのだけれど、かといってレミリアさんのところの咲夜ほど自分は手際よくはいかないらしい。

彼女なら片手間で、私ほど時間をかけることなくやってのけるだろう。

私自身、これでも努力は欠かさずしているのつもりなのだが……

「…………自分に無い才能を羨んでも仕方ないか。 それより幽々子様の昼食をお作りしなくては」

と、自分で割り切り、手に持っていた箒を物置へと戻しにいく。埃っぽい物置の中を、できるだけ息をしないように気を付けながら箒をいつもの位置に立て掛けた。

すると庭の方から、聞き慣れた魔法使いの友人の声が聞こえてきた。いつもと変わらず嵐のように突然やって来る友人に苦笑し、それでも胸の奥から沸き上がる喜びに身を踊らせながら、私は友人の元へ歩を進めるべく、物置を後にした。

「おっす、妖夢。久しぶりだな」

黒と白をモチーフにしたTHE・魔法使いといった感じの服を着込み、片手で箒を支えた少女がにこにことした笑みでこちらを見据える。

「ええ、最近忙しくてなかなか会う暇がなかつたから……月の姫の異変以来かしら？」

「ああ、そんくらい振りだな。あの後大変だつたんだぜ……新しい神社が幻想入りして、靈夢が参拝客を奪われた一つて大騒ぎして『奪われるも何も、元から参拝客なんてめつたに居なかつたじやない』

万年貪りな巫女のことを思い出し、小さく笑う。

彼女ともしばらく連絡をとつていながら、近い内に会いに行ければいいな、などと心中で呟く。

「で、どうなつたの？あの靈夢がまさか何の行動も起こせなかつたわけないわよね」

「ああ……結局件の神社まで殴り込みだよ。まったく、付き合わされた私もひどい目にあつたぜ……」

いつもなら天真爛漫な魔理沙が、珍しくため息をついている。

「新しい神社の巫女つてそんなに強かったの？」

「いや、巫女 자체は大したことなかつたんだが……その神社に祀られた神がとんでもなくてな。私と靈夢、それに相手の神の二対一つていう状況でなんとか勝てたんだが、奴さんはあんまり本気じやなかつたっぽいんだよな。手を抜いてあれなら、正直一度と戦いたくない相手だぜ……」

プライドの高い魔理沙にそこまで言わせたのだ。魔理沙の言う通り、とんでもない相手だつたのだろう。幽々子様や紫様レベルいや、神ということを考えるにそれ以上の存在であつてもなんら不思議ではない。

幸いなのは、魔理沙の話を聞くかぎり、それだけの力を持つていても幻想郷に仇なそつとは考えていことだ。

私が内心でほつと胸を撫で下ろしていると、先ほどとはうつてかわって明るい表情をした魔理沙が声をかけてきた。

「 そうだ、忘れるところだつた。なあ妖夢、これから暇か？ ちよつくり人里まで行く用事があるんだが、特別にそれに付いてくる権利をくれてやるぜ」

「 何でそんなに上から目線なのよ……人にものを頼む側の態度とは思えないわ」

私の言葉に、魔理沙は「相変わらずお堅いやつだぜ」と苦笑を浮かべた。

「それで、人里までわざわざ何しに行くの？ 魔法具の買い出しなら、前に一緒に行つた時に随分買い込んでいたじゃない」

「いやあ、今日は別の用事だぜ。あ、妖夢。まだ飯食つてないよな？」

「ええ……」これから幽々子様と私の分を作ろうとしていたところだけど

「よっしゃ！ そつと決まれば早速

籌に跨がり、私の手を掴んだまま勢いよく飛び立とうとした魔理沙に、私は慌てて声をかける。

「ちょ、ちょっと待つて！ 色々待つて！ これから幽々子様のご飯を作らなきやいけないんだってば！ それに、私がご飯を食べてないことと人里に行くことになんの関係があるの！？」

私の言葉に、魔理沙は一瞬きょとんとした表情を見せ、それから笑みを浮かべながら問い合わせてきた。

「もしかしてまだ知らなかつたのか？ 人里の噂」

「噂……？ これといって心当たりはないんだけど……」

人里でなにか異変でも起きたのだろうか？ けれど人里には、人里の守護者と言われる慧音さんが居る。彼女が居る以上、人里が危険に晒されるような異変が起きるとは考えにくえいのだけど……。

万が一人里に危険が及んでいるというのなら、いつも世話になつてゐる里の人々のためにも立ち上がらなくてはならないだろう。

氣を引き締め、腰に携えた樓觀劍と白樓劍を静かに手でなぞつた。私の剣がまだまだ未熟であることなど百も承知。しかしだからといって助けを求める人々を見捨ててよい道理などどこにあるのか。

「……行きましょう魔理沙。私たちの助けを待ち望んでいる人が居るといつのなら、この魂魄妖夢 悪を断つ正義の剣となります！」

「へ？ 流石の魔理沙さんにもまったく理解ができない展開だが……それより幽々子のやつは放つておいていいのか？」

「！ そ、それは……」

確かに私は幽々子様に仕える従者の身。主を放置して戦地に赴くなど言語道断だ。幽々子様の許可なく人里に行くことなどできない。でも人里には今にも助けを求めている人々が……

私が内心で葛藤していると、背後からほんわりとした口調の声が聞こえてきた。

「話は全て聞かせて貰つたわよ」

その声にドキリとし、慌てて振り返ると、そこには白玉樓の主であり、私が仕える幽々子様の姿があつた。

まったく気配を察知されることなく背後に回られる……こつものこながら私の主の手腕には驚かされることばかりだ。

「ゆ、幽々子様……！ 申し訳ありませんでした！ 不精この私、主である幽々子様を差し置いて、人里へ出向こうとしておりました。

従者として、面目次第も御座いません……」

頭を深く下げ、幽々子様へ謝罪の言葉を述べる。

まったく従者として失格もいいところだらう。幽々子様の口から放たれるであろう私への侮蔑の言葉に身構え、きつく下唇を噛み締める。

しかし、そんな私の心配とは裏腹に、幽々子様はいつも以上に優しげな声色で話された。

「何を謝ることがあるの？　あなたは人里の人々を助けに行こうとしていたのでしょうか？　褒めこそすれ、非難などする道理などまったく以て有り得ないわ」

その有難いお言葉に胸を打たれ、私は魔理沙が居ることも忘れて涙ぐんでしまった。

なんて慈悲深いお方なのだろうか。

自分より人里の人々のことを優先なさるとは、まさに白玉楼の主に相応しい佇まい。

このようなお方にお仕えができている自分の境遇に、私は改めて心から感謝した。

「さあ行きなさい妖夢。　貴女が信じる道を、その剣で切り開いてご覧なさいな。　後、お土産もよろしくね」

「かしこまりました！　この妖夢、必ずや人里に仇なす愚か者の首を幽々子様の元へ持ち帰つてご覧に入れましょー！」

膝を地面につき、携えた一本の愛刀を掲げる。

それを見た幽々子様は満足そうに頷き、そそくせと白玉楼の中へと戻ってしまわれた。

途中で何度も笑いを堪えるような動作をしていたのは、きっと私の見間違いなのだろう。

その後ろ姿を見届けると、一人して人里へと向かつたのだった。

少女移動中……

私が出せる一番のスピードで人里へと到着し、さつと辺りを見渡す。そこにはこの世の終わりとも思える絶望的な光景が

ておらず、いつもの平和な人里の風景がそこにはあった。

一体どういうことだらうか。眉を潜めて人里に異変が起きていらない状況に混乱する私の後ろから、遅れて到着した魔理沙が歩み出る。

「まつたく、どれだけ腹が減つてたんだよ」。まさか私より速く飛び出すとは思わなかつたぜ」

「へ？　どうして」と、魔理沙？「

「だから、早く飯が食いたくて急いできたんだろ？」

……はあ？

まったくもって意味が分からぬ。

私は助けを求めているであろう人里の人たちのことを想つて駆けつけたのであり、自分の空腹を満たすなどと考えてきたわけではない。

それより、人里の異変と私の空腹に一体何の関連性がない。

「まったく妖夢がそんなに楽しみにしてるとは思わなかつたぜ。
まあかくいう私も、少しばかり期待してるんだけどな。　今人里で
噂になつてゐる新しい飯屋のことは」

「…………めし、や？」

「え？　まさか妖夢、知らないままここまで来たのか？　幽々子か
らも土産を頼まれてたじやないか」

幽々子様……？土産……？

あ、ああ、あああああーっ！！

ま、まさか幽々子様は全部知つてて、その上でまた私をからかつて
いたのですか！？

あの時笑つてるよつに見えたのは、私の見間違いなんかじゃなく…
…………

「魔理沙お願い……私をどこか誰の迷惑も掛からないようなどこか
に埋めて頂戴」

「お、落ち着け妖夢！　まずは鞄から抜いたその刀から手を離せー！」

首を搔つ切りうとした私を、魔理沙が慌てて引き留める。

……最悪だ。人里に危険が及んでいるなどと私は一人で早合点して
いたのか。

恥ずかしい。恥ずかしくて死ねるレベルだ。

私ががつくりと頃垂れていると、魔理沙はぽんぽんと私の肩を叩いて、気遣つのように明るい声で話し始めた。

「ま、まあひとりあえずその飯屋に行こうぜ！ 幽々子をあつと驚かせるほどひまい飯を土産にしてやればいいじゃないか！」

「そうね……なんか気が抜けで、急にお腹も減つて來たし……」

未だに自己嫌悪から抜け出せない私の背中を、魔理沙が後ろから押しながら、私たちは目的の飯屋とやらに向かった。

「おー、いいか。 噂になつてるだけあって、列がすごことになつてるな」

「……ほんとね。 ここまでとは思つてなかつたわ」

私たちの田の前に広がるのは、件の飯屋に来たであろう客の行列。大人から子供まで、さまざまな年層の村人たちが店前で行列を作っている。

小さな店の中から食事を終えた客が出るにつれて、少しづつ動く行

列に、並ぶ前から気が滅入りそうだった。

「はあー、いったいどのくらいかかるのよ、これ」

「まあまあ、待ち時間が長いほど食えた時の喜びがあるってもんじやないか。さつさと列に並んじまおづぜ」

私を置いてさつさと列の最後尾に並び始める魔理沙にため息を吐き、こうなつたら意地でも噂の飯屋の料理とやらを食べてやうひとつ心で決めた。

およそ一時間後。

ようやく列の最前列まで移動することができ、いよいよ次は私たちが店に入る番となつた。

店の入り口に掲げられた看板には、達筆な字で大きく『国崎料理店』と書かれている。

おそらく店名にもなつていて、國崎さんとやらがこの店の経営者なのだろう。

しかし人里の知り合いの中にも国崎という名前には聞き覚えがないため、恐らく里の外に住んでいた変わり者　もしくは新しく幻想入りしてきた外来人であると検討づけた。

「腹が減った」だの、「もう待ちきれない」だの隣で騒ぐ魔理沙を横目で見つつ、どうして私より最初に乗り気だった貴女のほうが愚痴を吐いてるのよ、と思わず口から出しきくなる言葉を飲み込む。

そして店の中から、細長く捩れた一本の角を頭から生やした少女がひょっこりと顔を覗かせた。

「お待たせ～、次のお客様さん、どうぞ中へ……って、あれ？ あんた確かに、幽々子のところの……妖夢だったっけ？」

「す、すすす萃香様！？ 何やつてるんですかこんな所で！？」

真っ白なワンピースの上から花柄のHプロンを着た、私より背が小さい少女の名前は伊吹萃香様。

妖怪の中でも最強種と呼ばれる鬼の一族の四天王で、私なんかより遙か雲の上に居られる御方。

童のような見た目こそしているものの、その小さな身に秘めた力はこの幻想郷でも間違いなく最強クラスに入るだろう。そんな方がなぜ人里にある小さな飯屋などで給仕のような恰好をしているのか……

「何つて、ここは私の家だよ。自分の家で働いてるだけの話さね

「家……？ ここが、ですか……？」

前に聞いた話によれば、萃香様は妖怪の山の麓に小さな家を建てていたはずだ。

それなのにどうして人里で暮らして……いや、それ以前に飯屋など

嘗んでいるのだろうか。

「おっす、萃香。 約束通り飯食い来てやつたぜ」

「おお、魔理沙。 待つてたよ、さあ、妖夢も入つた入つた！」

「お、お邪魔します……」

花咲くような笑みを浮かべて店内へと引っ込む萃香様に続いて、私と魔理沙も店内に足を踏み入れる。

そこには多くの客が、それぞれ談笑しながら手元の料理を食べていた。

料理を口に運ぶ客の全員の顔には笑顔が浮かんではいる。

……それほどおこしいのだろうか。ここに来てようやく私もこれから味わえるであろう料理に期待が持ってきた。

何気なく厨房らしきものの方へと目を向けると、そこにはなんとまあ田つきの悪い男が、睨みつけるようにして手元のフライパンを見つめていた。

顔つきは決して悪くない。むしろ整っていると言えるだろうそれは、しかし凶悪な田つきによつて見る者のイメージを完全にマイナスにしてしまっている。

真っ黒なスーツの上から猫らしき動物の描かれたエプロンを羽織っている。

スーツの上にエプロンというアンバランスさが、彼の田つきと合っていた。余計に不気味な印象を醸し出していた。

私が彼の様子を観察している間にも、店の中には料理を注文する声が行き交う。

「鬼ラーメン一つと、店長特製チャーハン一つ。」

「ハナチハヌツキギョーザ一つと、チャーハン一つ……いや、三つで！」

「萃香ちゃんとのデート券一つ。」

「あいよ。…………それから最後の奴は、後で萃香に手加減抜きのグーパン頼んどいてやるよ」

厨房に立つ彼は注文を黙々と手元のメモ帳に記しながら、最後の客の[冗談]にはまさに鬼のような表情で言い放った。

彼とは初対面だが、これだけは間違いないと見える。

アレは間違いない、萃香様にゾッコンである。

すると厨房近くのカウンター席に座っていた一人の少女の後姿が目に映つた。

見覚えのある赤と白の巫女服に長く伸ばした黒髪。

九割九分、彼女は私のよく知っている友人に間違いないだろうが、こんな場所で料理を注文できるような金が果たして彼女にあつただ

るつか。

「まったく、あんたほんとに口リコンよね。見ていて気持ち悪いつたらありやしないわ。あ、チャーハンおかわり」

「靈夢、お前これで五杯目だろ……間違いなく太るぞ。あと口リコノ言うな」

厨房に立つ彼と親しげに話す靈夢のテーブルには、空になつた皿が積まれている。

察するに同じ料理ばかりを続けて注文しているようだが、よっぽど気に入ったのだろうか。

見ると彼女の隣の席が丁度一つ空いているのを見つけ、魔理沙と共に腰掛ける。

「久しぶりね、靈夢。元気だった?」

「まあなんとかね。今年はこの店のおかげで餓死せずに済みそうよ」

再会の挨拶をしていた私たちの間に入り込むよつとして、魔理沙が口を開く。

「またタダ飯!」馳走になつてんのかよ。まったく、情けないやら羨ましいやら……」

「つむさいわね。今まで萃香の面倒見てくれてたお礼にいつでも

「うわー、つて店長に言われてるんだから、私の勝手でしょ」

「だとしても、毎日三食しつかり食いに来るお前の神経の國太をには恐れ入るぜ……」

魔理沙のため息にもまつたく氣にする素振りを見せず、ずきーつ、とお茶を飲む靈夢。

靈夢の話によると、この店長である国崎和真さんはつい最近幻想入りしてきた半妖らしい。なんでも萃香様と親しい仲になつたそうで、この度一人で一緒に人里で暮らすことになつたんだとか。

(……だ、男女が同じ屋根の下で一緒に暮らすだなんて、私には想像しただけで気絶しそうです……。)

そういうじている間に、靈夢が注文していたチャーハンが目の前に置かれた。

「ほりよ、じつせまた追加するんだから、大盛りにしてやつた」

「気が利くわね。今度萃香に私の巫女服着のよつに頼んどいてあげましようか?」

靈夢がにやつきながら言ったその言葉に、国崎さんの表情がピシリ、と音を立てて凍りついた。

口をぱくぱくと忙しく動かしているが、そこから声は出でていない。冷静なイメージがある彼からは想像が出来ないほど、顔が真っ赤に

なつてゐる。

…………田つきは相変わらず怖いけど、ちよつと可愛い。

視線が休む暇もなく動き回つてゐるところを見ると、彼の中で何かしらの葛藤があつてゐる最中なのだろう。

「巫女服……だと?」「いや、葵香にはむしろドレスのほうが……などとぶつぶつ聞こえてくるが、気にしないであげよう。

しばりくすると、国崎さんはふいと顔を私たちから背けて、消え入るよくな声で小さく呟いた。

「…………頼む」

そのまま気合を入れ直すように天井を勢いよく見上げて、大きく息を吸い込むと、小走りで厨房の中へと戻つていった。

「……見かけによらず欲望に忠実な奴なんだな」

「ええ、最初に見た時はどこの組の若頭だと思つたけれど、付き合つてみればなかなかあれで面白いやつよ」

「また濃いキャラが幻想入りしてきましたね……」

笑顔でぴょこぴょこと跳ねまわりながら料理をテーブルに運んでいる萃香様を横目で見ながら、私たちは三者三様の笑みを零したのだった。

第一話（後書き）

「意見・「J感想等お待ちしております。」

第一話（前書き）

10000ゴードン突破しましたー！
これも皆さまからの応援のおかげです！
このまま20000ゴードンまで一直線だー！……え、無理ですか
？

s.i.d.e・幽々子

私は今、一心不乱に空を飛んでいた。周りの風景がどんどんと流れしていく。まるで一瞬で日に映る光景が変わるかのような錯覚を覚えていた。

こんなに本気で飛んだことなどいつ以来だらうか。いや、生まれてこの方、ここまで一生懸命になつたことなどなかつたかもしれない。

けれど私は、この龜のように遅い血のスピードを憎んで止まなかつた。

周りからは幻想郷のパワーバランスの一つだと恐怖され、そんな私に忠誠を誓ってくれている可憐らしい従者も居る。

だが、それに何の意味があるのでだろうか。

単騎で車を圧倒しつる力？まったくもつてお笑い草だ。私よりも強い妖怪など探せばいくらでも居る。彼がそうだったよ。

誇りある白玉楼の主？そんなものが欲しいなら、そいつの浮浪者にでもくれてやる。

そんな価値のないもので私の足が速くなるとでもいうのか？待ち焦がれていた存在の元へ一瞬で辿り着けるといふのか？

ああ恨めしい憎たらしい。この木偶のような手と足を切り落とすことをでもつと速く前に進めるといふのなら、私は喜んで差し出すだろう。

唇を噛みしめ、そこから流れ出た血の不快な味を感じながらも、私はスピードを緩めることはしなかった。

はやく彼の元へ……私の初めての友達の元へと

よつやく人里を視界に捉えると、私は一目散に妖夢から聞かされた店へと向かった。

最後の客が勘定を終えたのを見計らい、その場で大きく息を吐いた。

まつたく今日はいつも増して疲れた気がする。

それもこれも、靈夢のやつが変なことを突然言い出すからだ。

萃香に巫女服だと? ふざけるな。

萃香にどれだけ巫女服が似合ひと思つていやがる。俺を大量出血で殺す氣か?

だが実に楽しみである。来たるべきその日のためにカメラを何としても手に入れなくては。

幸い、この幻想郷においても技術者とやらは居るらしい。

なんでも河童たちが幻想郷に流れ着いた外の発明品に興味を持つたらしく、それ以来、変に発達したオーバーテクノロジーを持つているそうだ。

…なんとかして河童たちとコンタクトを取らなければなるまい。

自分で中で新たな目標を掲げながら、閉店の準備をしようとした最
中

「マニア……」

突如として店の入り口から、桃色の髪をした女性が物凄い
スピードで俺目がけて突進してきたのである。

そしてそのまま、彼女は俺の胸に抱き付く、か細い声で話し始めた。

「会ったかった……、会ったかったのよ、本当に……」

所々で鳴咽のようなものが混じつていて、心から、慰めへは泣い
てこらのだらう。

だが待て。まったく意味が分からん。

突然見ず知らずの女性から抱き付かれるなど、ビジの「流ラブコメ」だ。

いや、まあ、確かに、こんなに容姿端麗な女性は俺が一十余年生きてきた中でもお目にかかることがないほどのものであるし、意味が分からぬとはいえ喜ばしい出来事には違ひがないのだが……

「か、か、か、和真ーツツツーー。幽々子と向してゐるよーー。」

厨房の奥で食器を洗つていた萃香が、騒ぎに気付いたのかひょこつと顔を出すと、今の俺の現状を見て大声を上げた。

萃香の口ぶりから察するに、田の前の女性は幽々子と喧嘩している……それも萃香の知り合いか。

いつも無邪気な笑みを浮かべている萃香からは想像もできないほど恐ろしい……それこそ鬼のような表情をしてい。

ああ、間違いなく怒つてるな。分かる、分かるとも。確かに店内で、しかもこんな日も沈んでいない時間から女性と抱き合つなど言語道断だらう。

だが待て、萃香。今回の件は俺に何の責任もないんだ。だ、だからその振り上げた右拳をどうにかしろ！外の世界ならまだしも、鬼の力が戻ったお前に殴られたらシャレになら

ピチューーン！

数十分後。

なんとか喋れるくらいには体が回復した俺は、未だに不機嫌ムード全開の萃香の眼差しを努めて気にしないようにし、やつとのことで泣きやんだ幽々子から事情を聞くことにした。

曰く、昼間妖夢に渡した持ち帰り用のチャーハンの味が、幽々子がまだ外の世界に居た頃の友人が作ってくれたものにソックリだったらしい。

そしてその友人とはもう何十年も会っていなかつたらしく、今回その友人が幻想入りして、新しく飯屋を営んでいると勘違いしたとのことだった。

……話は分かつたが、問答無用で抱き付いてくるほど俺のチャーハンの味とこいつの友人とやらが作ったものの味は酷似してたのか？

俺のチャーハンは完全に独学の产物だ。似たような味は作り出せる

だろうが、まったく同じものを作るのは極めて難しいだろ？
ちょっとした隠し味も入れてあるしな。

にも関わらず、その味を作り出せる友人とやらには俺も興味が湧いた。

ことチャーハンに関してだけはちょっとしたプライドがあるからこそ、そいつとは一度酒でも飲みながら話してみたいものだ。

「あの……本当に『めんなさいね？』私の勘違いのせいでの、奥さんとも拗れてしまったみたいで……」

「いや、それはいいとして……。そもそも萃香は俺の嫁つてわけじゃないんだが……」

「なに？……？」

何やら勘違いしているらしき幽々子の言葉に訂正を加えたのだが、横に控えていた萃香が突然騒ぎだし、俺の首襟を掴んで上下に振り始めた。

「おいら馬鹿亭主！ 私が嫁じやないつてビツにうつだとーっ！」

？

ガクガクガクガクッ

「あ、お、落ち着け、萃香ー。お前まで一体何言つてるんだー?」

ガクガクガクガクツ

「「ひぬわーーー! 馬鹿、馬鹿、馬鹿! 」のぐタレ嘘つきー。」

ガクガクガクガクツ

「や、やめ……! 昼に喰つたラーメンが喉まで来てるからー! ほんとやめてー。」

そんな俺たちの光景を見て、幽々子はくすくすと口元に手をあてて可笑しそうに笑っていたが、ふとその表情が寂しげなものに変わる。

当然だろう。長年離ればなれになつていた友人と再会できると思つてここまで大急ぎでやつて来たのに、そこに居たのは見ず知らずの男だったのだから。

それを見て、未だに襟を掴んで放さない萃香の角を「じじ」と撫でやる。突如として萃香は「ふにゃー」と氣の抜けた声を出し、こくんと頭を俺へと預けてきた。

こいつが角を撫でられるのが好きなのは、一か月ほど一緒に暮らし

てきた中で熟知している。

こつして撫で続けてやれば、まあしばらくな復活することもないだろ？。もちろん、我に返った萃香からどんな仕打ちをされるかは分かつたものではないが……。

「…………いや、こいつちやん悪かったな。よくやく友人と会えると思つて楽しみにしておきたお前さんの気持ちを裏切るような真似をしてしまって」

萃香の角を撫でながら、ぱつの悪そつて片手で頬を搔ぐ。

「あなたが謝ることじやないわ～。でも……本音を言つたら
し残念かしらね……」

顔の前ではぱたぱたと手を振つて、「気にしないで」と告げる幽々子
だったが、その表情の陰りは消えなかつた。

「まあ、その、なんだ……もし暇な時は飯でも食いに来たらいい。
特別にサービスしてやるよ、お前なら靈夢みたいに一皿三食お代
わり付きで食いに来ることもないだろ？」

「あら～、なんだか悪いわね～。それにしてもあなた、よくお人
好しつて言われないかしら？」

「……生憎とい、じつらに来てからよく言われるよつとなつたよ」

あの“遠慮”といつ言葉を知らない腹ペロ巫女にも、何度も言
われた台詞だ。

あの忌まわしき呪いが消えて、嘘をつかなくなつたせいが、なんだ
か自分がとても丸くなつてしまつたように思える。

まあもちろん、ちょっととした嘘や、萃香をからかうような嘘ならば
今でもついているが。

そこはまあ、長年の癖と言つことで田を瞑つていてもらいたい。
そんな自分の変化に喜ぶべきか否か　なんとも言えない想い
で眉を潜めていた俺の顔を、幽々子はじつと見つめていた。

「……やつぱり、どこか似てるわね」

「似てるって……俺とあんたの友人が、か？　それはまた、……難
儀な友人を持ったもんだ」

俺と同じような人間が田の前に居たとしたら、間違いなく俺はそい
つのことが心底嫌いになるだらつな。

ちつぽけな自分を守るために嘘ばかりついて、それで他者を貶める
よつな最低最悪のクズ野郎だ。

一発殴つただけじゃ、収まらないだろ？

「ええ、本当に似てるわよ？ 雰囲気とか、言動とか…… 一人の女の子のこと有何よりも大切に想つてはいるところとか、ね？」

そう言って幽々子は、俺の腕の中でだらしなく伸びきった表情をした萃香を見て微笑んだ。

その表情には、もう先ほどまでのよつやかな暗さは残っていなかつた。

一人の少女のこと有何よりも想つてはいる…… か。

確かに俺にとって萃香はもう無くてはならない存在になつてはいるのは、この際否定しない。

だが、そのことを本人に面と向かつて言おうとは思わない。というか無理だ。そんなルナティックな難易度の行為を出来るわけがない。まず間違いなく恥ずかしさで死ねるだろ？ まつたく世の中の男女は一体どうやってカツプルなんざ作つてやがる。

まあ、俺にも付き合つていた女性は居たが…… どっちかと言えば彼女たちのほうから交際を迫つて來たからな。

あの時は飯を作つてくれるお手伝いさんが出来た程度の理由で了承していたのだが、今となつて考えれば別に好きでもないのに了承したのは彼女たちにとって失礼以外の何物でもないだろ？

いずれ機会があれば謝りたい……とは思うものの、幻想郷の外へ出る」とはもう一度とないのではないかといふ『呪せん』している。

だつて……

「はいやー…… はつー? また私の角を無断で撫でてたでしょー。何度も勝手に触るなって言つてるだろー!」

俺が愛している、この少女が居るのだから。

萃香

第一話（後書き）

「意見・「感想お待ちしております。」

10000コニーク達成記念のおまけ話の作成に当たり、皆様からのメッセージ等お待ちしております！たくさんの方からの「応募お待ちしております」

第三話（前書き）

一日続けて投稿！

べ、別に暇だつたわけじゃないんだからねつ……！

「夏祭り？」

唐突に、萃香が夏祭りに行きたいなどと言った。
俺は無意識のうちに皿を洗つ手を止め、いつかを見つめる萃香に意識を向ける。

「やうだよ、夏祭り。いつもこの時期になると博麗神社で夏祭りがあるんだ。和真、いつちに来てから初めての行事だらう。せつかくだから行つてみないかい？」

右手をぐいぐいと引っ張りながら、どこか訴えるような眼差しを向けてくる萃香に、「うう……」と息を詰まらせる。

反則だ、なんだその上田遣には。確かに幻想郷に住む連中の内には反則級の強さや能力を持つ者が居るが、それでも今の萃香には敵わないだろ？。

「いや、でもなあ……」

開店して一ヶ月がそこらしか経っていないのに、もう臨時休業でもしようものなら客足が少なってしまうかもしれない。

今が一番重要な時期なのだ。自分で店を営んでいる人なら分かると思うが、最初の数か月間は一番大切なものである。

もちろんそれ以降も、決して疎かにしてはいけないわけはあるのだが。

泣るような声を上げる俺を見て、萃香は悲しげな表情を見せる。

「和真是……私と夏祭りに行くのが嫌なの……？」

萃香の目の端に小さく光る涙を見つけてしまった俺は、慌てて萃香の頭をがしがしと撫でる。

「そんなわけないだろ？。 さあ行こう、今行こう。 ああ、夏祭りなんてガキの頃以来だから、樂しみだなあ！ あはははは！」

どうにか萃香を慰めようと、努めて明るい声を上げるが、その裏冷や汗びっしょりであった。

本当、自分でも呆れてしまふくらいに、萃香のこういう表情には弱い。

不自然な高笑いを上げながら、横目で萃香の様子を伺うと、太陽に向けて咲く大輪のひまわりのような満面の笑みを浮かべていた。

……ほつ。

「どうかお姫様の『機嫌は回復できたらいい。』

嬉しそうに田代を細めながら、俺の後ろに回り込み、そのまますかずかと背中をよじ登つて行く萃香。

そして肩車のような体勢になりながら、萃香は楽しげに「ぱぱぱ」と俺の頭を叩きはじめる。

「よーし、そーと決まれば浴衣の準備だよー。はやくお店に買いく行かなくっちゃ、売り切れちゃう売り切れちゃう」

「え、え？ ……普通に普段着で良くないか？」

「だーめ！ 祭りに浴衣は付き物だよー。それに普段着つて、和真スーツしか着てないじゃないか。 そんな恰好で祭りなんか行つたらみんなからの笑いものだよ」

その発言には少々むつときた。

確かに俺が四六時中スーツ姿なのは否定しないが、これが笑いものになるとはどうこう了見だ。

「なんだとう……？ スーツってのは現代日本の祭りの衣装なんだぞ。だからまつたく以つて問題ない」

「やうなの！？ 知らなかつたよ……外ではそんなのが衣装になつてるんだね」

俺の頭の上に居るから萃香の表情は分からないうが、驚きで田を見開いているであらう」ことがその声色で想像できた。

「よつ、物知り和真！」などと意味の分からぬ称号を叫ぶ萃香に、苦笑いを零す。

「ああ萃香。盛り上がつてゐるといふ悪いんだがな」

「なんだい和真？ 今から私は第三回幻想郷クイズ大会に和真の名前を登録しようと計画してゐるところなんだけど」

「そんなものに勝手に登録せんといってくれ。 それでな、萃香……」

「でもそれなら、私も和真に合わせてスースを作つてもらおうかな？ てへへ……御揃いの衣装を着ていけば、みんな羨ましがること間違いないね」

「聞けよ、人の話」

「でも一体どんな祭りで着る衣装なんだろうね。 そんな黒々とした衣装を着るなんて、邪神でも祀つてゐる神社のお祭りなのかい？」

「ああ、それなんだが。^{スイツ} こいつが祭りの衣装つてこいつのは、嘘だ」

途端、饒舌に話していた萃香の声が止まる。

そして頭の上から感じる恐ろしいほどの威圧感に、俺は自分の浅はかさを呪わずにいられなかつた。

「かずま……？」

「…………なんでしょう？」

「こひつこひつちばん、高い浴衣買つてもらひからり…… ほら走れ！」

頭を齧られたかのような激痛が俺を襲い　　いや、言わずもがな齧られたのであろうが、俺は萃香を乗せたまま大急ぎで人里へと飛び出したのだった。

時間は流れ、夕暮れ時。

あの後、人里にある着物屋で俺と萃香の分の着物を購入したのだが……萃香が店内のどこからか持つてきた着物の値段に度胆を抜かれた。

簡単に言えば俺の手持ちでは零の桁が二つばかり足りなかつた。外の世界でならまだしも、小さな料理屋で家計を補つてゐる今の俺には手が届かない代物である。

なんとか萃香を説得し、西瓜柄の明るい色をした可愛らしい着物を購入。これでも数万はしたので、正直類が引きつっている。
俺は特売コーナーに陳列されていた紺色の無地の着物を購入した。お値段2980円也。

一度家に帰つて着付けを行い、寂しくなつた財布に追加資金を補充して博麗神社へと足を進めた。

祭りの雰囲気とは、大人であつても子供の頃のような興奮が蘇つてくるものである。

俺も例に漏れず、年甲斐もなく浮き立つ心を萃香に悟られないように努めて表情を動かさずにいた。

悟りと言えば、サトリ妖怪なるものが存在しているらしい。あな恐ろじや。しかし今回の件はその妖怪とはまったく以つて関係がないので割愛する。

博麗神社に近づくにつれ、道行く人が多くなってきた。

これは神社の中は大変な混雑具合になつてゐるだらう、と若干眉を潜める。

「萃香、人が多くなつてきたから、迷子にならないように気をつけろよ」

「……仮にも鬼に向かつてその呪詞はどうかと思ひつけど」

とは言いつつも、萃香の視線は右から左へ。どう見ても落ち着きがない。

これは間違いなく迷子になるだらうな……そう思つた俺は空いた右手で、萃香の左手を繋ぐ。

「ひやつー？」

突然のこと驚いたのか、萃香が肩を震わせて声を上げる。
そしていつの間にか自分の手に繋がれている俺の手を見つめると、音が出そななくらい一気に顔を真っ赤にした。

「か、かかかかかか和真ー」、これって……

「手繫いでないとお前すぐ迷子になるだらうが。　おとなしくじと
け」

「う、うん……」

未だ顔が赤いままで、恥ずかしげに顔を俯かせておとなしく手を引
かれている。

……急に静かになつたが、まあ迷子になられるよりは良いだらう。

さて、博麗神社の境内に到着し、かなりの人混みの中で四苦八苦す
る様になると予想をしていたのだが……

「和真～！　はやく行こうよーー！」

「あ、ああ……」

なぜだか俺と萃香の周りから人が離れていく。

まるでモーゼの奇跡のように、人が波のように割れて俺たちの行く手を空けてくれている。

ふと、遠巻きにこちらを眺める女性と田^たが合つたのだが……

「ひつー!？」

青ざめた顔で悲鳴を上げ、銅像のようこそその場に立ち尽してしまう女性。

「い、いら、目を合わせたら何されるか分からぬぞ!」

そんな女性に声を掛ける夫らしき男性に肩を担^{たた}がれながら、そそくさとの場を後にしてしまった。

「まあ、理由は分からんでもないが……」

九割九分、俺の田つきのせいだろうな。

後は俺と手を繋いでいる萃香の存在もあるのかもしれないが、周り

からの視線はその大部分が俺に向けられている。

「ううう視線には慣れている。外に居た頃から、腐るほど浴びてきた視線だ。

酷い時には、「お前の目は人殺しの目だ」などと言われたこともあつたが、まあ言わんとしていることはよく分かる。

別に気にするほどでもない、が……

(それでもどこか、寂しい気はするな)

小さくため息をつくと、ぐるっと辺りを見渡す。

そこにあつたのは先の女性と同じような怯えた表情の人達。

そりゃそうだ。こんな田つきの悪い男に、じつして親しげに接するような輩が居るものか。

目の前の少女を除いて、そんな物好きはどこにも

ふと視界の中に、一いち方に向けて手を振つてくる幾つかの人影が映つた。

その顔はどれも笑顔で、俺の店に来てくれたことのある面々で……

「は、ははは……そうだ、そうだよな……忘れてたよ。

幻想郷つ

て、そういう場所だったよな

いかなる存在も受け入れる、最後の理想郷。

そこには妖怪たちも、人間たちも、はたまたそうで無い者たちも、
今日という日を笑顔で過ごしている。

そこに嘘俺つきも迎え入れられたのだと、彼らの笑顔を見てようやく
そう思えた。

「和真……？ どうして泣いてるの……？ 何か、悲しいことあつ
た？」

萃香が心配そうにこちらを見つめている。

知らず知らずのうちに、目から涙が零れてしまっていたらしい。

萃香と手を繋いでいるほうとは逆の手で、小さく目を拭った。

「いや、焼きそばの煙が目に入っただけだよ。 気にするな、それ
より今日はひととん遊びさせ

萃香を安心させるように笑いかけると、先ほど手を振ってくれた面
々にこちらからも手を振返し、足を進めた。

出店を見て回り、萃香が射的や金魚すくいをする様子を傍で見守りつつ、先ほど入り口で渡されたチラシを眺めていた。

「花火大会、か……」

チラシに書かれている時刻によれば、あとほんの十分後といふろか。

腕時計で確認しつつ、金魚すくいに興じていた萃香へと視線を戻す。

「があーっ！ また破けた！ お嬢ちゃん、これ破れ易すぎじゃないかい！？」

「そんなこたあねえよ。 ほら見る、お嬢ちゃんの横の坊主なんか、三匹もすくつてるわ！」

見れば確かに、萃香よりも更に小さいだろう人間の子供が、手に持ったお椀の中に金魚を三匹入れて居る。

これはつまり店側に問題があるわけではなく、ただ単に萃香の技量不足といひことに他ならない。

「うわなつたら……お嬢ちゃん！ もう一回ー！」

「お嬢ちゃん、これで四回目だろ？ それなのに一匹も取れてないんだ。 そろそろ諦めたりどうだい？」

「...うるさい」

悔しげに歯をしりをする萃香の隣で先ほどの子供が四辻田の金魚をすくい上げていた。

やれやれと思いつつ、萃香の隣に腰を下ろす。

「萃香、お前の力が強すぎるんだ。
やつてみろ」

金魚屋のおひちゃんに小銭を渡し、それと引き換えにポイを受け取る。

それを萃香の手に握らせ、簡単なアドバイスをする。

それを聞いて萃香は真剣な表情をしながら頷き、睨みつけるようにプールの中でもぐ金魚を見つめた。

そしてやがて水面をふかふかと浮かぶのは涼いでいる金魚が萃
香の目の前までやつて来て……

「そこだ、萃香！」

「えいっ！」

萃香のポイは破れず、その上には小さな金魚が乗っていた。

「えへへへへ

持ち帰り用の袋に入れられた金魚を眺め、萃香は笑顔を見せる。萃香の笑顔を見て、俺も知らず知らずのうちに笑みが零れていた。

そして今、もうすぐ上がるであろう花火を見るため、俺たちは神社の裏の軒下に腰掛けていた。

「ありがとね、和真。大事に育てるから!」

「……ああ

いつまでたっても萃香から真正面に礼を言わることには慣れない。つい恥ずかしさから手を背けて頬を搔いてしまうのだ。

瞬間、夜空に一輪の大きな光の花が咲いた。

なおも続けて咲き続ける夜空の花の美しさに、萃香は田を真ん丸にして見つめていた。

浴衣を着ているからだらつか。いつものような子供っぽいとは別に、どこか艶麗な雰囲気が漂っていた。

そして花火によって照らされる萃香の横顔は、空に咲く花にも負けないほど実に美しく……知らず知らずのうちに俺の心臓は鼓動を速めていた。

(今日の萃香は、またいつもと違ったイメージがあるな……。元気な萃香もいいが、今みたいな雅な感じの萃香も…………って、何を考えてるんだ俺はッ！？)

熱くなる頬を両手でぱしぱしと叩き、大きく深呼吸をする。

ふと我に返つて、思うことがあった。

ここいつとなら、いいかもしねない。

今まで出会ってきた女性はどれも魅力的だったのだろうが、いざ結婚するか否かと問われれば首を横に振らざるを得なかつたのだ。

けれど萃香なら？　俺自身、この日常が続くことを、誰よりも望んでいた。

萃香と結婚する　　そんな展開が、あっても良いかもしない。

誰よりも一番近くで、萃香の笑顔を見れることが出来るのだから。

打ちあがる花火の下、俺はそう決心した。

しかし世の中とは、そう何もかもが都合の良く進むはずもなく

俺はこの後、人生で最大の
巻き込まれていくのであった。

幻想郷の存在を賭けた出来事に、

第三話（後書き）

「意見・「感想お待ちしております。」
ユニーク10000突破記念のおまけ話において使ひ皆様から
ツヤージを募集中です！
どうぞお寄せください！」

ヒーリング記念一（前書き）

おまけ話です。

本編とは一切関係ありませんので、ぜひお暇な方だけお読みください。

ヒートク10000記念!

作「ユニーク10000達成記念!」

和「…………和真とー」

萃「萃香の一ー！」

作・和・萃『嘘鬼質問コーナーーー!』

作「さて始まりましたねー! 第1回嘘鬼質問コーナーーー!」

和「第1回つて…… 2回目や3回目もやるつもりなのか?」

作「未定です」

萃「行き当たりばったりだね……」

作「世の中そんなもんつすよ、萃香さん」

和「思つたんだが、他の小説を見る限りだとコニーク記念のこぼれ話つて、普通10万や100万達成でやるようなもんだる。なんで1万なんてショボい数字でこんなことやひつと思つたんだ?」

作「そんなもの待つてたら小説が終わつてしまつからです」

萃「理由が切実すぎる……」

和「まあそんなことより、せつと進めてくれ。店開けつ放しで來たんだから」

萃「どんなお便りが来てるか楽しみだねーー！」

作「そうですね、たくさんの方からお便りや質問が来てます。実のところ作者自身、1通でも来れば良い方だと思つていたのですが、予想外の量に若干戸惑つておつまます」

和「小心者だから」その辺惑つてやつだな

作「つるむことな

作「やで、記念すべき第1通田はー……」(アリサ)「…」

『Q・ぶつちやけ』の小説ってあとどれくらい続くんですか?』

和「のつけからともでもない質問拾つてくれる感じかなー」の駄作
者…!』

萃「ぶつちやけにも程があるね……」

作「ま、まあ落ち着いてください。やうですね、作者の考えてい
るシナリオ通りに進むとするならば、HONDINGまではあと一度
半分つてところでしょうか」

萃「ええつー? それだけしかないのー?」

作「もちろん合間合間に思いついたおまけ話や、登場人物の過去を
深く掘り下げる特別編などを挟む予定なので、たぶん予定よりはず
つと多くなると思います」

和「予定を見る限り、パツと出で終わるような登場人物が多いから
救済処置つてどいりか？」

作「そこ突っ込まないで」

作「続いての質問は……………」

『Q・萃香たんの巫女服姿はいつ登場するんですか?』

和「ここの質問が何気に一番多かったんだよな」

萃「にやはは……なんだか恥ずかしいね」

作「ふつちやけ作者の悪ふざけで発言した内容がここまで反響を呼
ぶとは思っていなかつたので、恐縮してます」

和「まさか予告はしたのはいいけれど、書く余裕がないとは言わな
いよな?」

萃「私はそつちのほうが嬉しいんだけど……あ、もうろん和真の頬
みなら、こつでも着るよー。」

作「健気な奥さんですね……羨ましいです。今のところ本編に挿
む余裕がないのは確かですが、作者自身も登場させたい気持ちでい
っぱいなので、隙を見て書いてみたいと思います。」

和「一つだけ言えることは、“正月を待て”ってことだな」

作「どうぞお行けますよー…………ドンッ！――！」

『Q・幕間で少しだけ登場してた悪役っぽいやつらは何者なの？』

作「これ言つちまつと完全なネタバレですね。困りました

和「まあ問題ない範囲でなさいんじゃないか？」

萃「そうだね、私もどんな猛者が登場して来るのか気になつてるし！」

作「とうとう言えることは、『男3、女1の四人組で、その中の一人は規格外レベル（紫でも敵わない）』……後は申し訳ありませんが登場してからのお楽しみということです」

萃「思つたんだけど、紫がなんか噛ませ犬ポジションになつてる気がするんだけど……一応あれでも幻想郷最強の妖怪だよ？」

作「紫様が弱いわけじゃなくて、九狼君や今回のボスが強すぎるだけです。並みの妖怪なら対峙しただけで呼吸すら出来ませんよ」

和「確かにあいつのスキマは反則だからな。現に俺も一度殺されたし」

作「ああああ次、次！…………ばんつーー！」

『Q・ビリュートの話を書いつと思つたの？』

和「」の質問を最初に持つてくるべきじゃなかつたのか……？」

作「細かいことは気にしない気にしない」

萃「はあ……どうでもいいから答えてあげなよ」

作「おっと、そうでした。『嘘つきな男と小さな鬼の話』のルーツを探る重要なお話になりますので、みなさん心して聞いてください。如何にしてこの物語は生まれ、国崎和真という主人公はどうして生まれたのか……その謎を今夜、皆さんにお明かします」

和「ちょ、ちょっと待て！いかにもこの物語の超重要ポイントっぽいじゃないか！」「んなどうで言って大丈夫なのか！？」

萃「そうだよ！ 落ち着け作者！」

作「大丈夫です……なぜなら……」

和「な、なぜなら……？」

萃「へへへ……」

作「萃香といちやこいちやしたい！でも、一次元との壁は厚すぎる……」

「ならば自分で萃香といちゃこちやができる小説書けばいいんではない? そうだそうだ、そうしよう。……いつやつて生まれたのが、『嘘つきな男と小さな鬼の話』なのです」

和「完全にお前の欲望を呑きつけたような小説じゃないか！？」
うしつくれるんだ」の空氣…」

萃「そうだそうだ！ それに結局あなたと私がこひやこひや できて
ないじやないかー？」

作「ぐふつ……！ 萩香さん、痛いところを……。 そういう
んです。書き始めてから気が付いたんですが、萩香といちゃ いちゃ
できているのは私自身ではなく、結局のところ主人公である国崎和
真という登場人物……まさに孔明の罠でした」

和「単にアホなだけだろ、お前」

萃「慰める言葉も見当たらぬ……」

作「最初は可愛い萃香さんを書けるというだけで、胸が躍るような気持ちだったんです。けれど次第に、私の可愛い萃香さんがヤクザ顔の嘘つき男に良いようにされているのを見ていてどんどん腹が立ってきて……」

和「最近俺の扱いがひどこのせお前のせいか…?」

萃「自業自得すがいいも向も聞えないよ」

作「こうなつたら……こうなつたら… 幻想郷中のガチホモ達に和真君が襲われて、そのままアーツ!な方向に田覚めて B A D E N D とこう物語に修正してや…」

萃「鬼符『ミツシングパワー』」

アーツ…ピチュー…

萃「悪は滅びた」

和「作者脱落のため、次で最後にするぞ……最後の質問は、」ひかり

『Q・この物語の結末はハッピーエンドですか?』

和「言つまでもないな」

萃「えへへ、そうだね。どんな敵が立ち塞がるつと、私と和真の2人でなら打ち碎いてみせるよ」

和「そういうことだ。じゃあ今日は長々と付き合つてもうつて悪かった」

萃「阿呆な作者に代わつて、私たちが読者のみんなにお礼を言つね!」

和・萃『どうもありがとうございました!これからも嘘鬼を応援してくださー!』

ヒーラー1000記念！（後書き）

みなさん、「協力ありがとうございました」とおっしゃいました！
縁があれば次回も是非…！

第四話（前書き）

遅れて申し訳あつません……
もつすべセンター試験なので、今後もうよくうよく遅れることがあ
ると思います。

第四話

消える、消える、消える、消える。

美しかつた森が、川が、空が、音を立てて崩れ去つていく。

消える、消える、消える、消える。

将来を夢見ていた少年が、愛する家族と幸せな日常を送っていた男が、初恋の味をまだ知ることすらなかつた少女が。

空氣に溶け込む吐息のように、命を宙へと散らしていった。

つこわつきまでそこにあつたはずの幸せな日常が、そして明日からも続くであつたはずの希望に満ち溢れた未来が。
全て一切の例外なく消えていく。

そんな非常識染みた風景を一言で表すならば、そり……世界の終わり。

全てを受け入れ、消えていく運命にあつた幻想と共に生きていた、何処よりも優しい世界の終焉。

終わりとは始まりを告げる一種の区切りだとそれでいるが、この終わりの先に未来はない。

ただ終わるのだ。一遍たりとも慈悲もなく、ただただそこに在ったはずの全てが無くと消え去り行く。

世界が維持できる生命力というものがそこには無い。もう死んでしまった大地が広がるばかり。

そんな中で、一人だけ……その絶望に抗う男が居た。

けれどその男にはもう何かを為せるだけの力は残っていない。

ただ破滅という運命から己の身を守ることだけで精一杯であった。

それでもその男は、自分の腕の中で静かに横たわる少女の体を決して手放そうとはしなかった。

すでに少女の体からは生きるための力というものが失われ、その体温は徐々に……けれど確実に失われていく。

虚ろな目で虚空を見上げているが、その目にはもはや何も映つてない。

いや、一つだけあるとするならば、今自分を抱きしめてくれている男と過ごした 短くて、けれどとても温かつた日常。

自分がこの上なく我が儘など自覚していたし、そんな駄目な自分をこの男が心の底から愛してくれていたことも分かつていた。

でも最後にもう一つだけ我が儘を言わせて貰えるならば ど

うか私の愛した彼の笑顔をもう一度だけこの目で見たい。

腕を持ち上げることが出来る力など、とうに失われているというのに……それでも少女は震える右手を微かに動かした。

少女の微かな動作に気が付いたのか、男は己の掌で少女の右手をしつかりと掴んだ。

右手から伝わる彼の確かな温もりを感じながら、少女は幾百年積み重ねてきた自らの生を手放した。

もう何もなくなってしまった世界に、男の慟哭の叫びだけが響き渡る。

どうして、どうして彼女が死ななければならなかつたのか
そう声を大にして叫びたかつたが、口から漏れ出すのは言葉にもならないような呻きばかり。

なんて無様なことだらうか。己の愛した少女の命一つ救えず、どうしてここに一人だけ生き残っているのか。

出来ることなら彼自身、少女と共に生を終えたかった。

この大地の上で、愛した少女と共に屍を晒したかった。

けれどそんなことは男の矜持が認めない。認めてなるものか。なあ
そだらう?

俺たちの世界を殺した糞野郎の顔を、俺はまだ一度も殴れていない
のだから。

「……」

やつとのことで声に出来たその言葉は、自分が愛した少女の名前に
他ならず。

もう一度と瞳を開くことがない、腕の中で静かに横たわっている少
女の抜け殻に対する労いの言葉。

思い返せば、何度も何度も自分のせいで泣かせてばかりだった。
けれど一人で笑いあつたことも、星の数だけあつた気がするが……
今となつては思い出話に花を咲かすことのできる相手をえ居ない。

「……」

「……」

少女の亡骸をそつと地面に下ろす。まるで壊れ物を扱つかのような
その仕草には、この男の少女に対する愛で満ちていた。

そんな行動とは裏腹に、男の声色に込められていた感情は怨念、殺
意、狂氣。

「許さない……許さない……許してなるものか

」

それは己が怨敵に対する怒りの感情。

少女を殺したあいつが、まだ何処かで悠々と心の臓を鳴らしている。意味が分からぬ。なんでお前が生きていて、が死んだんだ?

なぜ昨日まで笑顔を見せていたはずのが、こんなに冷たくなつている?

「貴様だけは……貴様だけは俺がこの手で殺してやる……」

常軌を逸した殺意が瞳に宿り、黒色だった瞳の色が黄金へと変貌する。

それは人間という身の上では有り得ないことで。

それ即ち、男が人間であることを捨てたという証拠に他ならなかつた。

妖の身へと落ちた男は、ありつけの怨念を込めてその名を叫ぶ。

男の叫びが、静かに崩れ去る世界に響き渡った。

s.i.d.e・和真

「う、うーん……」

夢から覚めた直後、頭にガンガンと響く痛みに眉を顰める。

背中から伝わる床のゴツゴツとした感覚のせいで、背中が痛い。

夏祭りから帰宅した直後、突如萃香が酒盛りを始めたため、それに付き合つて夜通し酒を飲んでいた。

どうやら自分のほうが先に潰れてしまつたらしく（これでも酒には強い自信があつたのだが）、まったく鬼の酒の強さといふものにはほどほど呆れるばかりである。

重い体をなんとか起しそうと試みるもの、伸ばしきつた右腕に重量感を感じた。

見ると、萃香が俺の右腕を枕にして眠りこけている。長い時間枕に使われていたせいか、動かそうとした右腕に痛みが走る。

それでも萃香を起しきれないように気を付けながら、上半身を起しつつ、萃香をそっと抱きかかえて寝室の布団へと寝かせた。

「やれやれ……」

ため息をつきながら首を回す。
パキパキと心地いい音が聞こえ、背骨の位置を整えるために大きく
背伸びをする。

「うう……水、水……」

ぐらぐらと揺れる頭と一口酔いの吐き気に苦しみながら、コップに
注いだ水をゆっくりと飲み干す。

「あひ……」

椅子に腰を下ろし、昨日のうちに考えていたことを整理する。

萃香にプロポーズしようと決めたのは花火を見ていた時のことでの、けれどそんな経験はもちろん持ち合っていない。

萃香が自分に好意を持つて接してくれていることには気づいているものの、それがどんな好意なのかまでは分からない。

もしかしたら、恋人に対するソレと「いつも、自分の家族に対する好意のようなものかもしれない。

後者だつた場合は田も当たられないだろう。勇気を出してプロポーズしてみたのはいいものの、それが一方通行の感情だつたとしたら今のような関係に戻ることさえ難しくなる。

だが、何の行動も起さないのかと聞かれれば首を横に振るだろう。どんな結末を迎えるにせよ、もう自分の気持ちにだけは嘘を吐きたくはない。

話は戻るが、いざプロポーズしようとした際に何の贈り物もないといふのは少々問題があるのでないかと思う。

もちろん一番大切なものは想いであることは分かっている。だがやはり形に残るようなものをプレゼントするといつとも大切だろう。

「と言つてもなあ」

世間一般でプロポーズする際に贈るものと言えば、やはり指輪だろう。

だが、萃香には少々失礼だが、あいつがそんなものに興味があるとは思えない。

花より団子。月見より酒を飲む方を優先する。

そんなやつだ。女の子女の子した贈り物は正直あまり好みないのではないだろうか。

となるとやはり、萃香が喜びそうなものをプレゼントするといつ結論に至るわけだが……

「あいつが喜びそうなものって、なんだ……？」

もつ長く一緒に暮らしていくところの...、萃香には趣味らしさに趣味も見当たらぬ。

いつも店の手伝いをしているか、夜になると酒を飲むかで娛樂らしいう娛樂はしていないように見受けられる。

「困ったな」

鳴り止まない頭痛に舌打ちをしながら、どうしたものかと首を捻る。ならばいっそ、萃香のことをよく知る人物に尋ねてみるのはどうだらうか.....?

「.....物は試しだな」

身だしなみを整え、いつも着ているスースを羽織ると、外へと歩を進めた。

つい昨日祭りがあつたとは思えないほど、博麗神社は静かだつた。昨日はあんなにも人が來ていたといふのに、普段の博麗神社には参拝客の一人も居ないのだろうか、と無性に寂しく感じられる。

靈夢から聞いた話によると、この博麗神社には祀られている神の詳細が不明らしい。

それならばこの人氣の無さも頷けるだろう。正体不明の神に信仰を捧げるほどの物好きはめつたに居ないだろうから。

辺りを見渡し、目的の人物の姿を探す。

すると本殿の隅で、簾を壁に立て掛けでお茶を飲む赤白の巫女服の少女の姿を見つけた。

大方、祭りの後の掃除でもしていたのだろう。なんだかんだ言いながらも、ちゃんと巫女としての仕事をしている少女に苦笑しながら、片手を上げて近づいて行つた。

「よう靈夢。こんな朝から、苦労なことだな

「はあ？ もう五回過ぎよ？ あんた、萃香のボケが移つたんじゃないの？」

「む…………？」

急いで腕時計を確認してみると、時刻は午後一時過ぎ。

こんな時間まで寝てたのか、と今明らかになつた事実に目を見開く。

「すまないな、萃香の酒盛りに付き合っていたせいで時間の感覚がおかしくなつていたみたいだ」

「ああ……あんたもよくあんなのに付き合えるわよね。萃香に付き合つて同じ量を毎日飲んでたら、いつか絶対死ぬわよ」

「ふむ……今のところは問題ないが、これからは少し控えようか」

遠まわしにこちらの身体の心配までして来る靈夢に、口は悪いがお人好しな少女、といつ自分の認識が間違つていないこと再確認する。

「で、いつたい何の用？　まだ掃除も終わっていないから、さっそく片付けたいんだけど」

しつし、と手を振る靈夢に苦笑いを零しながら、さくらびく切り出したものか、と思案する。

「じ、実はな……」

「実は？」

「実はな……」

「…………」

言いかけて、急に恥ずかしさが襲つてきた。

萃香にさえ秘密にしていた自分の気持ちを他者に告げることがこんなにルナティックなことだとは思つてもみなかつた。自分の頬が熱を帯びるのを感じる。

すると業を煮やしたのか、靈夢が噛み付かんばかりの勢いで大声を上げる。

「貴重な時間を割いてやつてるんだから、せつないと話しなさいよ！なんで私が良い歳した男の赤面なんて無価値なものを延々と見せつけられなきやなんないのよ！？殺すわよ！？」

「ま、待て…………」
「…………分かった……。…………」
「…………」

「いいから話せ！」

「実は…………」

そして俺は、萃香に対する俺の気持ちと、萃香にこれからプロポーズをしようと思つてゐる趣旨を伝えた。

そしてその際に何か贈り物をしたいのだが、萃香が好みそつなものを見つっているか？、と。

話している最中、身が裂けるような羞恥の念に駆られたが、なんとか最後の一言を絞り出すことが出来た。

靈夢は真剣な表情をして俺の話を聞いていたが、次第にうんざりし

たよつた、呆れたよつた、なんとも言えない表情をしていた。

話すべし」と言つ終え、じつと靈夢からりの返答を待つていたのだが……

「…………え？ それだけ？」

「…………え、？」

靈夢から返つてきたのは、俺の一世人一代の大告白を見事に溝に捨ててくれるよつた台詞だつた。

「それだけつて……滅茶苦茶重要なことなんだが」

「ど」がよーあんたが珍しく切羽詰つたよつた表情をしてたもんだから、真剣に話を聞いてやつたつてのに……その話の内容が萃香と結婚だの贈り物だの、呆れて物も言えないわよ

はあー、つとこれ見よがしに大きなため息をつき、がっくりと肩を落とす靈夢。

「そんなことより、あんたと萃香つてもうひとつへこいつの関係だと思つてたんだけど、違つたわけ？」

「違つた。ど」をどつ見ればそんな風に見えるんだ

「どうして、全てに決まってるじゃない！　あんだけ一人身の私たちに見せつけてたくせに、まさか自覚が無かつたなんて言わないでしょ？」

「ウタ・エイジ」

そこまで言われたら不本意だが納得せざるを得ない。自分としては萃香に普通の態度を取つていたつもりだったんだが、どうやら他者から見た俺たちは恋人以上の関係に見えたそうだ。

「もつとっくに結婚なんてすつ飛ばして子供でも作ったんじやないかと思つてたんだけど……」

「一月一日、お出で下さい。」

俺と萃香の子供……それはさぞかし可愛いに違いない。願うべきは俺のような田つきに生まれてこない」とだが……つて違う違うー。

「な、何を突拍子もないことを言いやがりますか！　俺は萃香にそ
んな不埒な感情を抱いたことなど……」

「鼻血出でるわよ、みわの変態」

無い、と言い切れるだろうか。

あの日、花火の明かりの下で艶麗な雰囲気を醸し出していた萃香。夏の夕暮れ時、火照った体に上気した頬の明るみと、時折覗く素肌の上にしつとりと濡れる汗は、天の滴とも思えるような美しさで……

「 ブーツ！」

「うわ！？ あんた鼻血の量が尋常じゃないわよ！？ ちょ、ちょつと待ってて！ 今、濡れ布巾持ってくるから……」

二日酔いの上に大量の出血（原因は鼻血）をしたせいだろうか。薄れていく意識の中で、慌てて神社の横にある母屋へと走っていく靈夢の後姿だけが目に映った。

第四話（後書き）

和真、暴走する。の巻でした。

萃香への贈り物が何なのか分かつてしまつた人も、どうか内緒でお願いしますね！

第五話（前書き）

もうすぐPV10万突破しそうです。
書き始めた時はこんなに伸びるとは思ってなかつたので恐縮します。
すいじく嬉しいです。

ぼんやりとした意識のまま田を覚ますと、まず田に映つたのは雲一つない青空。

いつも田を覚ました時に見上げて居る天井とはまったく違つ光景に、しばし混乱するものの、次第に自分の置かれて居る状況が分かつてきた。

頭には濡れ布巾が置かれ、鼻にはティッシュが詰められてゐる」とに気が付く。

鼻血を大噴射し、そのままぶつ倒れてしまつた際、靈夢によつて看病されていたのだろう。

ゆっくりと頭を持ち上げると、すぐ傍で「じりを見つめる靈夢の姿があつた。

「あら、もう大丈夫なの？」

「……俺はまだのへりこ氣を失つてた？」

「そんなに長くなかったわよ。精々十五分程度つてとこかしじうね」

「そりが……世話をかけたな。すまない

小さく頭を下げ、謝罪する。

まったく、あの程度で氣絶してしまつとは我ながら情けない。

「ただの氣まぐれよ。礼を言われるほどのことではないわ

口ではやつらしながらも若干照れくわいつな表情を浮かべている靈夢。

そんな彼女の不器用な態度に苦笑し、立ち上がる。

少し休んだおかげか、大分先ほどよりも頭痛が引いてきたみたいだ。

「あ、そうそう。あんたが寝てる間に色々考えただけど……」

「ん？ なんのことだ？」

「言ひ出しつべのあんたが忘れるんじゃないわよ、まつたく……。萃香に贈るプレゼントのことよ」

靈夢に言われてようやく思ひ出す。

そういえばここに来たのも靈夢に意見を聞くためだった。
色々ばたばたしててすっかり忘れてしまっていた……気を付けなければ。

「で、何かいい案でも浮かんだのか？」

「まあ、一つだけね。あんたもよく知つてるとと思つ物だけど」

「…………？ 生憎見当が付かないのだが」

「はあ、あんたつてやつは……。いい? よく聞きなさいよ。萃香が間違いなく喜びそうなもの、それは

「

靈夢から萃香への贈り物のアドバイスを貰つた俺は、目的地目がけて空を飛んでいた。

こつちに来てから合間を見つけて空を飛ぶ練習をしていたおかげか、今ではかなり自由に飛ぶことができるようになった。

練習の際には萃香に指導を受けていたのだが、初めに萃香に「空の飛び方を教えて欲しい」と言つた時には呆れたような表情をされた。その時の萃香は、「私にも劣らない妖力を持っているのに今まで空も飛べなかつたのか」と、一ちらを馬鹿にしたような笑みと共に無い胸を張つて偉そうにふんぞり返つていた。

流石にこのまま萃香にでかい顔をされ続けるといつのは男のプライドが許せなかつたため、特訓に特訓を重ねた。能力を使えばいいじゃないか、と気づいたのは、もつすでに妖力だけで空を飛べるようになつた時のことだつた。

それについては今でも非常に後悔している節は有る。だが結果良ければ全て良しといった具合でともかく空は飛べているわけで、今更とやかく言つ必要はないだろう。

「急に寒くなつて來たな……」

肌に刺す冷たい冷気に、小さく体を震わせる。

まったく、まだ夏の終盤だといつのことひじてこんなに寒いのか。
ふと視線を移すと、大きな湖が田に映つた。
こんなところに湖があつたとは……今度萃香を連れて釣りにでも来てみようか。

などと思ひを馳せている間に、俺を呼び止める少女の声が耳に届いた。

「ちゅうとやーのお前！　あたいのナーバリに入るとはいこ度胸してるなー！」

「ん……？」

振り返ると、ひらひらを指さす水色の髪をした小さな少女の姿があった。

身長は萃香と同じくらいだらうか。こんな人里から離れたところで小さな子供が遊ぶには少々危険だらう。

「おこ、こいらはこいつ妖怪が出てもおかしくなことじゆだわ。悪いことは言わないからさつと家に帰るんだな」

「ふんっ、そいつの妖怪なんかあたいの敵じゃないよ

「なこ……？」

今気づいたのだが、この少女、俺と同じく空を飛んでいる。しかも背中には氷のようなもので出来た羽のようなものが……こいつも妖怪なのか？

「あたいはチルノ！ 幻想郷でさきよーの妖精よー！」

妖精……萃香から聞いたことがある。

なんでも、強くないくせにわらわらとどこからか湧いてくる上に、潰してもすぐに復活するから面倒だとかなんとか。

そう言えば妖精は喋ることが出来ないと聞いていたんだが……目の

前に居るチルノとかいう妖精はさつきから饒舌に喋っている。

萃香の情報が誤っていたのか、それともチルノが特別なのか……今
の俺では判断がつかないな。他の妖精なんか見たこともないし。

「俺は国崎和真だ」

「クニーサキ・カズマダ……？」

カズマダねー覚えた！

「和真だ」

「カズマダ」

「和真だ」

「カズマダ！」

「ところでカズマダはこんなところに一體何の用？　あたいのナーバリに無断で入り込むと痛い目見ることになるよ！」

「縄張りがどうとか、そんなつもりは無かつたんだが……。この先にある紅魔館に用事があつてな」

紅魔館というワードを聞いた途端、チルノの眉がピクリと動く。

「それなら丁度いい！あたい達もこれから紅魔館に行くつもりだったんだ」

「……紅魔館には恐ろしい吸血鬼が住んでるという話を聞いたんだが、大丈夫なのか？」

「問題ないわ！いつもカエルを凍らして遊んでるんだから、カエルも「ウモリも大差ない！」

カエルを……？いつたい何故そんな意味のないことを……。
ま、まさか……！？

靈夢が言っていた。つい最近、一柱の神が幻想入りしてきて、その内の一柱がカエルみたいな神だったと。なるほど最強の妖精というのも頷ける。曲りなりにも一柱の神を、しかも遊び感覚で凍らせる」とのできる実力の持ち主……俺なんかでは手も足も出ないだろう。

「カズマダ！これからあんたはあたいの子分よ！あたいのことは今から親分と呼ぶように！」

突然そんなことを言い放つチルノ。

だがこれは願つてもない機会だ。幻想郷最強の妖精の傘下に入ることによつて、これから先に面倒事が起こつた時に頼りに出来るかもしない。

妖力については萃香からお墨付きを貰つてはいるものの、戦闘経験なんてこの前の紫との戦いが初めてだった。

正直、妖怪だらけの幻想郷で自分がどれほどの位置に居るのかも分

からない。

「はい、親分」

「じゃあさっそくみんなが待ってるところに行くぞー。遅れるなよーー。」

「はい、親分」

「チルノちゃん！」

「大ちゃん！ 待った！？」

「ううん、私たちも今来たところだから」

チルノと俺を出迎えたのは三人の少女だった。

次に、チルノから一人一人を紹介して貰うことにして。

大妖精の大ちゃん。チルノの一番の親友なんだそうだ。
さつきからこちらのほうを怯えたような目つきで眺めてくる。
子供に怯えられるのは実は一番悲しかったりするわけで。

鳥の羽が生えてる//ステイア。愛称はみすちー。

初対面で「チン ン！？」なんて言われた時には驚いたが、まあそういうこいつものに興味がある年頃なんだろうな。

頭にリボンをつけているルーニア。愛称は特にない。

「貴方は食べてもいい人間……いや、妖怪……？　どっちなのだー？」と聞かれたので軽くスルーしておいた。

この四人にリグルという子を含めたメンバーでいつも遊んでいるらしい。

今日はリグルは用事があつて来れないそつだ。

「こいつはカズマダ！　あたいの子分一団よー」

「チ、チルノちゃん！　駄目だよ、そんな失礼なこと言つたら……！　怒られちやうよ……！」

ぶるぶると震えながらこいつを見の大ちゃん。そんなに怯えなくても何もしない。

やれやれと首を振り、ため息をついた。その際またしても大ちゃんがビクッ、と震えた気がしなくもなかつたが。

「国崎和真だ。よひしぐ」

軽く会釈しながら挨拶をする。

「よひしぐなのだー」

「チン ンー よりしくねー！」

「よ、よろしくお願ひします……」

三者三様の返事だが、まあ大ちゃん以外には概ね受け入れられるということだろう。

流石妖怪、細かいことは気にしないということだろうか。

萃香もあれで度胸があるから、初めて俺の顔を見た時も眉一つ動かさなかつたからな。

「それじゃあ今から、このカズマダが紅魔館潜入ミッションを遂行する！ あたいたちはそのバツクアップだ！」

「ま、またあのお屋敷に行くの〜？ この前も門番さんにお説教されたばかりだし……」

「どうしてるのかー？」

「チン ンー 私はチルノちゃんが行くならついていくよー！」

「いや、普通に入り口から入れればそれでいいんだが……」

という俺の意見は見事に無視され、如何にして俺を門番とやらに気付かれずに紅魔館の中に潜入させるかの打ち合わせを始めた四人だった。

打ち合わせを終えた俺たちは、今現在紅魔館の門の近くの茂みに身を隠していた。

高い塀に囲まれた紅魔館に入るための唯一の出入り口。空を飛べばいいのではないか?と思ったが、何やら魔術のようなもので紅魔館全体が覆われており、この門以外からは出入りすることが出来ないのだそうだ。

そしてその門には、赤い長髪をした女性が絶え間なく周囲に睨みをきかせて……なんてことにはなっておらず、大きな鼻ちょいちゃんを作つて夢の世界にダイブしているようだった。

「くっ、流石はめーりんね。油断して近づいて行つたあたい達を不意打ちしよいつていう魂胆に違ひない」

「まじですか。……どう見ても熟睡しているよつよしが見えないんですけど」

「だからあんたはいつまで経つても子分のままなのよー。あたいを見習いなさい!」

「はい、親分」

幻想郷最強の彼女が言つなりやつなんだらう。うむ、そこに違ひない。

例え目の前で門番らしき女性が口から涎を惜しげもなく垂らし続け

ていたとしても、それはチルノの言つ通りにちらを油断させる策に違ひないのだ。

「それじゃああたい達はめーりんを引き付けるから、その間に潜入するんだ！」

「はい、親分」

そう言つとチルノは茂みから躍り出で、眠りこけている美鈴曰がけて拳大の石を投げつけた。

それに続いて、何故か半泣きの大ちゃん、相変わらず淫語を連発するみすちー、にこにこ笑いで石を投げつける姿が妙に怖いルーミアが茂みの外へと姿を現した。

チルノとルーミアが投げた石は美鈴の額に見事に直撃し、「あがつ！？」という台詞と共に涙目で跳ね起きた。

「うう……いたた……。 一体何が…………」

視線の先には、自分を挑発する4匹の妖精+妖怪の姿が在つて……

「やーいぐず門番ー悔しかつたらこいつにおりでー、だ！」

「くーくーすーくーす！…………『めんなさいいいいいーーー』

「チン ンー？ 大ちゃん、一人で逃げるなんて聞いてないよーー？」

「そーなのかー？」

そんな四人の姿を見つけた美鈴は額に青筋を浮かべ、怒声を上げた。

「ま、またあなた達ですか！？　何度も何度も……！　いい加減にしてくださいよ！」

激昂した美鈴の手から弾幕が放たれるが、四人はそれを容易く避ける。

見る限り、美鈴には弾幕ごつこの才能が無いみたいだ。

けれど四人を追いかけるスピードには目を見張るものがある。一度接近されてしまえば手痛い攻撃を喰らってしまうだろう。

(今のうちに……)

こちらに気付かずにチルノ達を追いかけ続けている美鈴を横目で見ながら、こつそりと紅魔館の門を潜つたのだった。

その先に、吸血鬼との死闘が待つてことなど、この時の俺には知る由もなかつた。

第五話（後書き）

「J意見・J感想おきかせください」と言ひます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9294v/>

東方 嘘つきな男と小さな鬼の話

2011年11月24日20時47分発行